

〒371 前橋市上泉町664-4

前橋市教育委員会管理部文化財保護課

TEL 0272-31-9531

群馬県前橋市

# 前田遺跡

東善住宅団地造成事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

前橋市埋蔵文化財発掘調査団







## 序

前橋市は北に赤城山、西に榛名山を望む関東平野の北部を市域とした県都であります。北から南に貫流する利根川の清流は「水と緑と詩の町」を潤し、かつては「糸の町」として養蚕製糸で栄えてきました。今人口28万余を擁し生涯教育都市を目指し、教育文化・商工業の調和のある「豊かで、すばらしい社会を築く、街づくり」を進めています。市では工業団地、住宅団地の造成を通し、福祉、教育、文化、環境等の整備、拡充の施策のひとつとして、東善住宅団地造成事業を前橋工業団地造成組合で進めています。この事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、前橋市埋蔵文化財発掘調査団のもとで、発掘調査を実施したものであります。

東善住宅団地（前田遺跡）造成地の所在する東善町は中心市街地から南東約8kmに位置し、南部の町界は伊勢崎市、佐波郡玉村町に隣接し、一級河川蕪川右岸に沿った前橋台地の水田農業地帯にあります。高崎市、勢多郡大胡町、更に玉村町を経て多野郡新町、藤岡市へと道路交通に至便の地であります。

この前田遺跡の周辺は金冠塚古墳や国指定史跡の八幡山古墳など古代の遺跡が点在し、中世の古文書に残る善養寺荘の荘名があり、江戸期慶安年間に山王村・中内村・駒形新田（駒形町）を分村した。等々昔を今に伝える地域であります。

発掘調査は住宅団地造成地の公共施設（道路・下水道処理施設）建設用地について実施し、平安期の住居跡33軒・溝遺構25条・井戸跡3ヶ所・土坑5ヶ所・ピット3群・水田跡1ヶ所を確認した他、多数の土師器・須恵器など遺物を検出し、記録保存をいたしました。

この調査報告書を刊行するにあたり、多くの方々の御理解と御協力を得たことに対し厚く御礼申し上げます。

平成 3 年 3 月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
団 長 遠 藤 次 也



## 例 言

- 1 本書は前橋工業団地造成組合の住宅団地の造成工事にさきがけて実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は立合者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長遠藤次也）の立ち合いのもとに、委託者 前橋工業団地造成組合（管理者清水一郎）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（代表取締役須永眞弘 前橋市青柳町211-1）が実施した。
- 3 調査担当者 園部守央（前橋市埋蔵文化財発掘調査団 発掘調査係員）  
荻野博巳（スナガ環境測設株式会社 調査員）
- 4 遺跡名 前田遺跡 略称2G-7
- 5 所在地 前橋市東善町102番地 外 地内
- 6 調査期間 試掘 平成2年2月1日～平成2年3月31日  
発掘 平成2年8月21日～平成2年11月15日  
整理 平成2年11月16日～平成3年3月25日
- 7 調査面積 3,500 m<sup>2</sup>
- 8 出土遺物は前橋市教育委員会に保管する。
- 9 本書は調査団の指導のもとに、スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部（専務取締役兼部長 金子正人）が作成に当り、執筆・荻野博巳、校正・金子正人、編集・須永眞弘、測量図書の整理校正を勝田貞幸（調査助役）、遺物の復元・実測・計測を佐々木智恵子・角田朱美、遺構のトレースを小林裕美、写真製版を鈴木超夫、文章清書を須永薫子、内業事務を須永豊が担当した。
- 10 測量・調査計画を須永眞弘（測量士 第52614号）が行い、調査の指揮指導を荻野博巳、遺構・遺物の写真撮影を荻野博巳・勝田貞幸が当った。測量と測量作業指導を板垣宏（測量課長）・測量を勝田貞幸・樺沢高幸（測量主任）・佐々木智恵子・角田朱美が当った。発掘調査の安全管理は勝田貞幸が行った。作業事務を柴崎信江が担当した。
- 11 調査に協力を戴きました前橋工業団地造成組合を始め、地元の方々及び調査並びに整理に際して指導、助言を賜った各方面の方々に深甚なる感謝を申し上げます。
- 12 調査に参加した方々（順不同）

石川サワ子	内山恵美子	中川 類子	小野沢はつ江	深 沢 千 代
山 崎 勘 治	岡野とし子	佐 鳥 直 子	秋間キヨ子	栗 原 朝 子
棚 橋 う し 子	萩 原 和 子	木 村 と よ	新 井 宣 八	小 沼 あ き
高坂ちまの	山田せつ子	八木原きぬ子	板橋眞喜太	牧野せつ代
松 倉 菊 江	新井ヒロ子	須藤か津丞	青 木 芳 子	

## 凡 例

### 1 遺構名・略称

遺構名と略称は次の通りとした。

土師器住居跡 H 溝遺構 W 井戸跡 I 土坑 D  
ピット P

### 2 実測図の縮尺

遺跡現形図 S=1/2500 住居跡 S=1/60 溝遺構 S=1/60 井戸跡 S=1/60  
遺跡全体平面図 S=1/500 土坑 S=1/60 ピット S=1/60 水田跡 S=1/60・1/80  
遺物 S=1/2・1/3・1/5 竈跡 S=1/30

### 3 挿入図

国土地理院発行の5万分の1「前橋」「高崎」及び20万分の1「群馬」を使用した。

### 4 遺跡の位置の基準

基準点 国土地理院三角点及水準点を照合済み  
A-0 地点 第IX系 座標値  $x=38,030.000\text{m}$   $y=-63,080.000\text{m}$   
水準点  $BM_1$  H = 78.000m  
 $BM_2$  H = 78.000m  
 $BM_3$  H = 77.000m  
 $BM_4$  H = 76.500m  
等高線 10 cm  
グリッド 4 m 間隔

### 5 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版標準土色帖」による。

# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経緯と概要	1
1 調査に至る経緯	1
2 試掘調査の経過と概要	1
3 発掘調査の経過と概要	2
4 標準堆積土層	5
第2章 遺跡の概観	8
1 位置と環境	8
2 周辺遺跡と東善町	9
第3章 遺構と遺物	12
(1) 住居跡	12
(2) 溝遺構	32
(3) 井戸跡	43
(4) 土 坑	45
(5) ピット	46
(6) 水田跡	47
(7) グリッド出土遺物	48
第4章 まとめ	49
出土遺物観察表	52～57
遺構実測図	第10～52図
遺物実測図	図 1～10
図 版	図版 1～29
遺跡現形図 (S=1:2500)	第53図
遺跡全体平面図 (S=1:500)	第54図



## 第 1 章 調査の経緯と概要

### 1 調査に至る経緯

前橋市は「豊かで、すばらしい社会を築く、街づくり」の施策のひとつとして、工業団地及びこれに附随する住宅団地の造成を通し、福祉、教育、文化、環境等の整備、拡充を目的に昭和35年「前橋工業団地造成組合」を群馬県と組織し、以来、工業団地造成事業を進めていますが、この一環の事業として、平成2年度東善住宅団地造成事業が実施されることになり、これに伴う埋蔵文化財発掘調査業務について、前橋工業団地造成組合（管理者清水一郎）と前橋市教育委員会での協議により、埋蔵する遺構状況を把握するため、住宅団地造成面積 100,000m<sup>2</sup>の内、公共施設（道路・下水道処理施設）用地内に、トレンチ面積 3,250m<sup>2</sup>の試掘調査を平成元年度事業で実施することに成り、前橋市教育委員会のもとに組織している前橋市埋蔵文化財発掘調査団の立ち合い指導のもとに、スナガ環境測設株式会社で調査に入った。

### 2 試掘調査の経過と概要

住宅団地造成の街路計画図(S=1:2500)を基に、街路法線を測設し、この法線に沿ってバックホウ0.7(m<sup>3</sup>)で幅 1.2m・平均深 0.9m・延長約 2,700m のトレンチを設け、調査に入った。

#### (1) 基準点の設置

前橋市南部第二土地改良区第14工区確定図復元測量多角点成果簿（路線名 K63-1 測点 214-5 座標  $x=38,157.600\text{m}$   $y=-63,484.090\text{m}$ ）から、調査区域の北西地点に基準点 A-0（座標  $x=38,030.000\text{m}$   $y=-63,080.000\text{m}$ ）を設け、これより 100m 方眼基準杭の大グリッドと中グリッド 20m 方眼基準杭を団地造成区域全域に測設し、大グリッド毎の調査区域の呼称を A 区・B 区・C 区・・・N 区とした。

#### (2) 水準点の設置

前橋市東善町 123-1 番地先に所在する前橋市道路台帳 BM 53 H = 79.185 m から調査区域内に 4ヶ所の BM を次の通り測設し、調査に入った。

BM<sub>1</sub> H = 78.000m（位置座標  $x=37,930.000\text{m}$   $y=-63,020.000\text{m}$  B・E 区界線上）

BM<sub>2</sub> H = 78.000m（位置座標  $x=37,950.000\text{m}$   $y=-62,920.000\text{m}$  C 区内）

BM<sub>3</sub> H = 77.000m（位置座標  $x=37,750.000\text{m}$   $y=-62,800.000\text{m}$  I 区内）

BM<sub>4</sub> H = 76.500m（位置座標  $x=37,830.000\text{m}$   $y=-62,760.000\text{m}$  H・J 区界線上）

### (3) 試掘調査の結果

調査は平成2年2月13日から作業員休憩所設置作業、発掘資材の搬入を進める一方、街路計画を測設、基準点の設置、水準点の設置の測量を進め、2月13日から表土の厚さ約80~100cmのトレンチ掘削をバックホウ0.7(m<sup>3</sup>)により進めた。トレンチ設定図(S=1:1000)、トレンチ地断面図、遺構分布図(S=1:1000)、写真撮影など作業を進め、遺物は一括取り上げし、洗浄、注記、整理し3月31日試掘調査を完了した。

調査の結果、約400mのトレンチ内から平安期と思われる住居跡18ヶ所・焼土(竈)跡4ヶ所・畝状などの遺構を確認、他に土師器片(甕・埴)、須恵器片(甕・埴)など収納ケース1箱が出土した。

## 3 発掘調査の経過と概要

試掘調査結果報告を受けて、前橋市教育委員会と前橋工業団地造成組合で協議のうえ、遺構を確認した約400mの道路用地と遺構が用地外に及ぶ部分の面積約3,500m<sup>2</sup>について、発掘調査を実施することに成った。調査は平成2年度事業として、平成2年8月21日から平成3年3月25日を調査期間とした。8月21日から作業員休憩所設置、発掘資材の搬入、調査区域の除草などの作業から着手した。

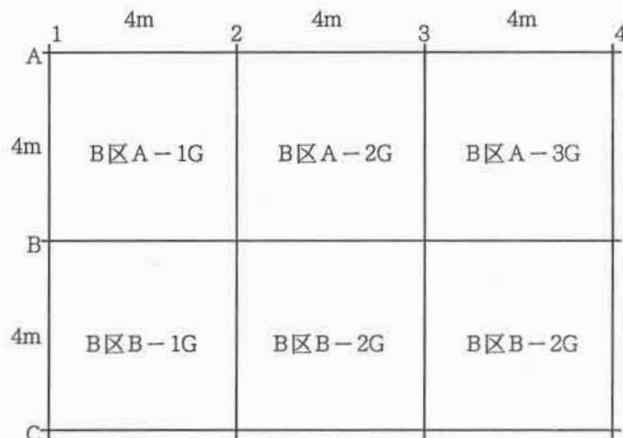
### (1) 遺跡の名称・略称

前田遺跡は地区別コードにより旧上陽地区であることから、略称2G-7とし、出土遺物の注記、製作図面の略称として記入した。

### (2) 発掘調査区域

調査対象区域は試掘調査時の大グリッド(100m×100m)のB区・C区・E区・F区・I区・

第1図 例：B区のA-1グリッド⇒B・A-1G



L区に互って遺構を確認した。大グリッドを4m単位の緯線（東西の線）と経線（南北の線）で、小グリッドを組み調査グリッドとした。

調査グリッドの緯線には北から南へアルファベット（AからYまで文字）を付け、経線には西から東へ算用数字（1・2・3・・・）を付けて表した。4mグリッドの呼び方は北・西の交点の文字で呼ぶこととした。

### （3）測量杭

グリッドの交点の測量杭は公共座標から取り付け、水準値は公共水準のBMから測設した。

### （4）実測原図の用紙と原図の縮尺

実測図の原図はポリエステルシートA-2判を用い、温度・湿気・少々の汚れ・破損などに耐えられるようにした。原図の縮尺は遺構全体図 S=1:100 住居跡S=1:20 溝遺構 S=1:20 井戸跡S=1:20 土坑S=1:20 ピットS=1:20 水田跡S=1:20 竈S=1:10とした。

### （5）遺構と遺物の調査

遺構は使用面と掘り方面について、出来る限り両面を調査した。

遺構埋没状況、遺構構築状況を観察記録した。遺物は個々に観察表に記録した。包含層の遺物は調査グリッド毎に取り上げた。

### （6）作業状況

発掘作業は平成2年8月21日から10月20日の予定で着手し、調査区域内に密生した「ひめじょおん」の除草から連日の猛暑のなか人力で進める一方、試掘調査で確認した遺構の表土排除をバックホウ0.7(m<sup>3</sup>)使用して作業を進め9月1日まで要した。引き続きジョレン精査・プラン確認の作業を進めた。

9月前半の連日の猛暑は旧水田の不透層を乾涸びさせ、陶器のようになり、ジョレンや移植こての刃が立たない程で100m程離れた水路から、キャリアダンプで運搬散水をしながらの作業が連日であった。

9月13日から雨天日が多く続き、20日の台風以降は遺跡内の遺構に水が溜り、泥沼化し田植え時の水田の様になり、排水ポンプ3台を稼働させながらの発掘作業となった。

9月13日以来、10月15日までの間に半数は雨天日で、3回の台風を数える中での調査現場は甚だ難渋するものであった。委託機関のご理解とご協力を頂き、11月15日に現場作業が完了しました。

調査整理作業は11月16日から着手、平成3年3月25日完了致しました。

## 発掘調査経過（調査日誌より）

### 発掘作業

- 平成2年8月21日 作業事務所設置・機材等の搬入・除草などの作業に着手
- 23日 重機にて表土掘削作業の開始・事務所設置・機材搬入完了  
ジョレン掛け・プラン確認作業・遺構ナンバーつけ開始  
グリッドの確認
- 24日 水道設備工事・水準点（BM）・基準点座標杭設置完了
- 31日 重機にて表土掘削作業完了
- 9月3日 除草作業完了
- 4日 猛暑で乾涸びるので確認面に散水開始
- 6日 住居跡のナンバーつけ・住居跡発掘作業・遺構写真撮影開始
- 8日 地断の確認（セクションの線引き）・グリッド杭測設開始
- 10日 拡張部の表土掘削作業（重機）開始
- 11日 遺構平面測量（S=1:100）・住居跡平面測量（S=1:20）開始
- 13日 午後3:00から雨が降り出し休業する・排水作業開始
- （9月14日～10月15日）排水作業を続けながら調査作業を進めた
- 20日 台風来襲（夜半降雨）・一括上げ遺物の洗浄開始
- 22日 遺跡全体平面測量（S=1:1000）開始
- 25日 遺跡全体平面測量（S=1:1000）完了
- 27日 遺物出土状況写真撮影開始
- 10月2日 溝跡発掘作業開始
- 10日 I区・L区の調査作業（ジョレン掛け）開始
- 11日 I区・L区の住居跡・溝跡の発掘作業開始
- 11月8日 井戸の調査作業開始
- 15日 井戸の木組基礎引き上げ・調査区域の埋戻し・発掘調査作業完了
- 16日 作業事務所・機材等搬出

### 整理作業

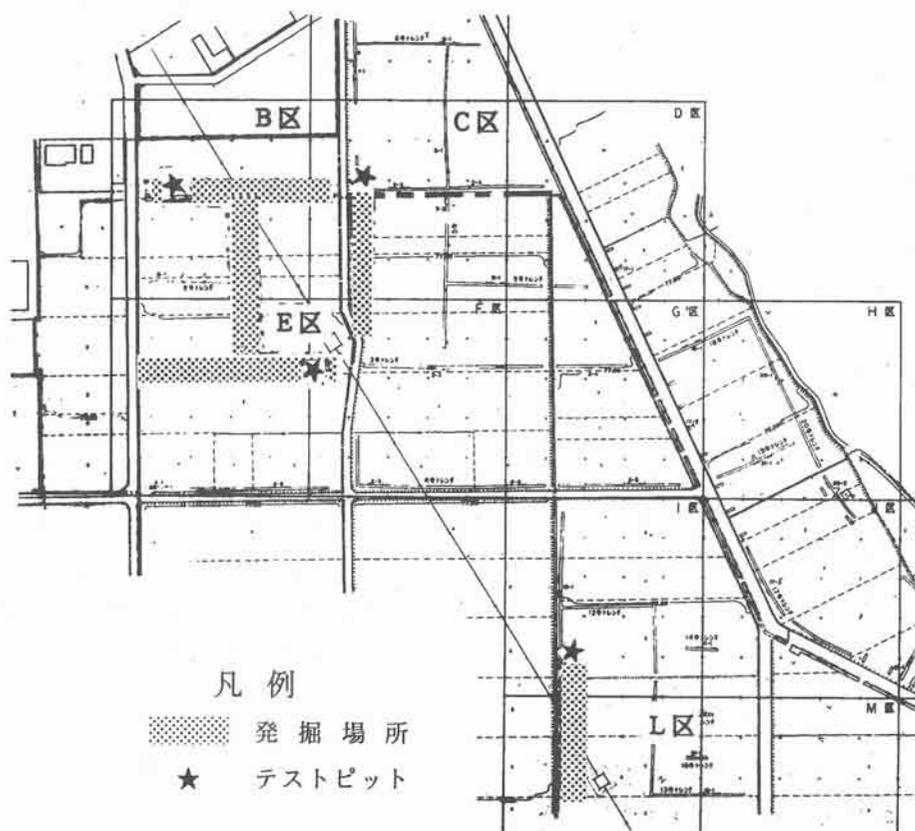
- 11月16日 遺物の洗浄・注記・測量図面の整理作業開始
- 19日 記録写真の整理・住居跡の原稿執筆作業開始
- 27日 遺物の接合作業開始
- 30日 測量図の製版カメラによる縮小作業を行う
- 12月6日 住居跡床面積の図上計測を行う
- 13日 接合遺物の石膏入れ作業開始

- 25日 遺物（土器）の実測図化作業開始
- 26日 土器の実測図の製版カメラによる 1/3縮小作業開始
- 28日 住居跡平面図・断面図の製版カメラによる 1/3縮小作業開始
- 平成3年1月3日 報告書原稿執筆・編集作業開始
- 14日 溝状遺構の原稿執筆作業開始
- 21日 遺跡全体図の作成作業開始
- 3月8日 遺物写真撮影作業を行う
- 24日 報告書原稿執筆・編集作業完了
- 25日 報告書原稿印刷

#### 4 標準堆積土層

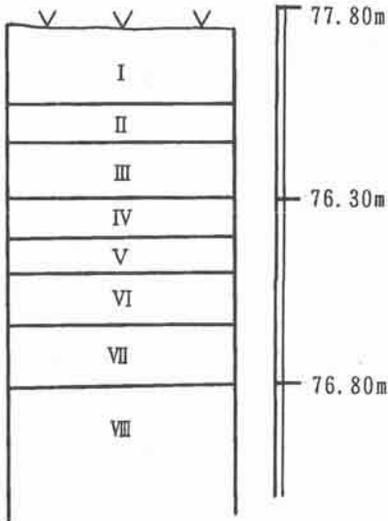
調査区域の地形は東南方向に緩やかに傾斜する前橋台地南端部の水田地帯である。調査区のB区・C区・E区・L区毎にテストピット設定し、標準土層を観察した。

第 2 図 調査区（B区・C区・E区・L区）位置図（S=1:3,850）



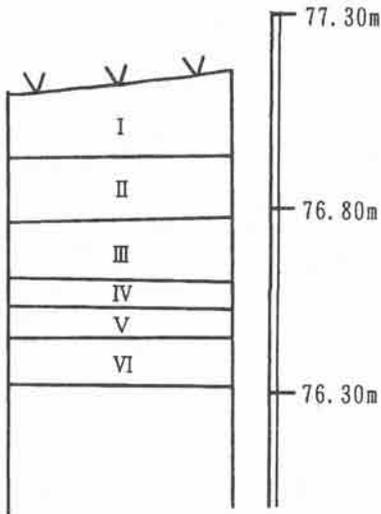
# 標準堆積土層

## 第 3 図 B 区



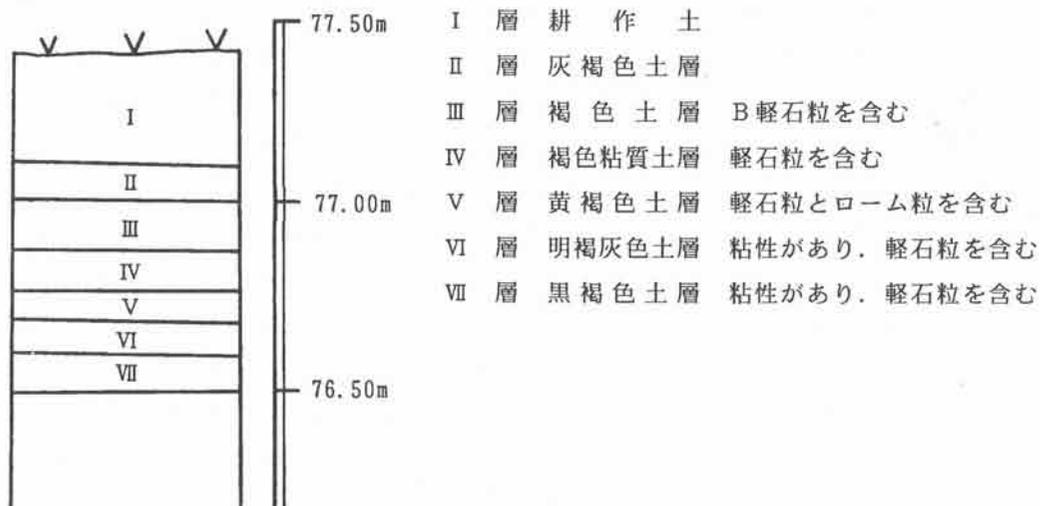
- I 層 耕作土
- II 層 灰褐色土層
- III 層 灰白色土層
- IV 層 灰褐色土層 僅かにローム粒を含む
- V 層 褐色土層 僅かに軽石粒とローム粒を含む
- VI 層 灰褐色土層 軽石粒を含む
- VII 層 黄褐色土層 軽石粒とローム粒を含む
- VIII 層 灰褐色土層 粘性があり、ローム粒を含む

## 第 4 図 C 区

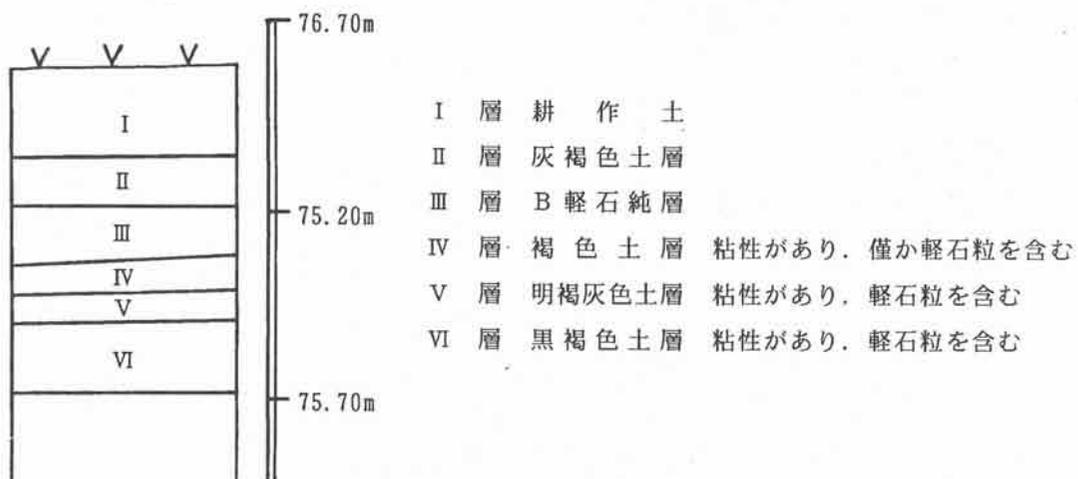


- I 層 耕作土
- II 層 灰褐色土層 B 軽石粒を含む、鉄分を含み  
やや赤味を帯びる
- III 層 灰褐色土層 軽石粒を含む
- IV 層 灰褐色土層 軽石粒を含む、僅かローム粒  
を含み、黄色味を帯びる
- V 層 明褐灰色土層 粘性があり、軽石粒を含む
- VI 層 黒褐色土層 粘性があり、軽石粒を含む

第 5 図 E・F 区



第 6 図 I・L 区



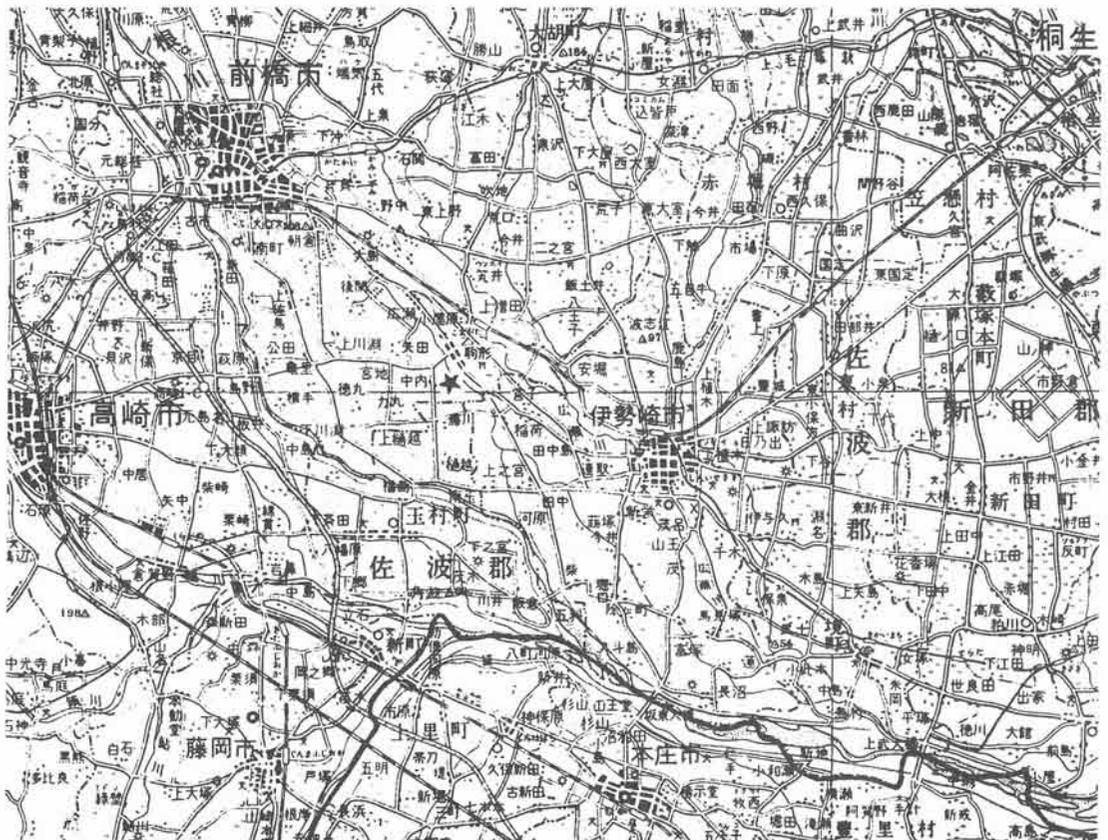
## 第 2 章 遺跡の概観

### 1 位置と環境

前田遺跡は前橋市の中心市街地から東南約 8 km の東善町内にあります。主要地方道高崎・駒形線が東西に走り、これに主要地方道藤岡・大胡線が南北に走って乗り入れ、更に市道 00-96 号線が朝倉町一広瀬町一山王町一東善町を通り乗り入れる交差点があります。それがこの東善町交差点であります。この交差点を駒形町へ向って 400m 程行き、一級河川葦川に架かる駒形橋を通り 200m 程で、駒形町を北西に縦断する主要地方道前橋・古河線の交差点に出ます。“これより北西へ 8 km 前橋市街地に至る。これより北へ 8 km 勢多郡大胡町に至る。これより東南へ 7 km 伊勢崎市街地に至る。” の道路交通の要所であります。主要道路の整備された昨今、東善町交差点に面して、通運・運輸・倉庫など大企業の社屋が立ち並び、急速に市街地化が進んでいます。

この交差点街並みの東南側に、扇状に広がる水田農耕地帯が、伊勢崎市稲荷町まで広がっています。この一郭の交差点寄り約 100,000m<sup>2</sup> が東善住宅団地造成用地として開発される区域であります。この開発区域の道路建設用地の一部約 3,500 m<sup>2</sup> が「前田遺跡 (★印)」であります。

第 7 図 地勢図 (S=1:200,000)



## 2 周辺遺跡と東善町

前田遺跡は旧利根川の一つ広瀬川支流葦川の右岸に沿った前橋台地の先端地域に位置しています。北から張り出した赤城火山斜面の麓が崖を成す所から、広瀬川右岸の前橋市街地の在る前橋台地までの広瀬川低地帯の旧利根川は幾度となく今の桃ノ木川や広瀬川などに流路を変えて1543年頃まで、流下したとされている。この旧利根川右岸に沿って、大古墳群帯が発達し、前橋市内上流域の総社町から中心市街地及び朝倉町を通り、東南端の東善町に至る大古墳群を形成している。現在の広瀬川流路に沿った旧市域から東善町にかけての、広瀬古墳群であります。広瀬古墳群を朝倉古墳群・後閑古墳群・山王古墳群などに地域別に細分している（前橋市史第一巻）。

古墳の多くは戦時中の食糧補給のための強制開墾や工場誘致、土地区画整理事業、団地造成、土地改良、道路建設等で削平され、今は残されている数も少なくなっていますが、この前田遺跡から市道 00-96号線を北西へ約 1.2 km 程に天台宗禅養寺（山王町）があります。この周辺には金冠塚古墳、亀塚山古墳などの古墳が今もある程度密集して残され、嘗ての「山王古墳群」の面影を留めている所であります。更に市道 00-96号線を北西へ直進すれば、約 2 km程に「朝倉古墳群」に唯一残る国指定史跡の八幡山古墳は5世紀の築造とされる全長 130m の前方後方墳があり、東へ 400m 程に東日本最古の4世紀後半の築造とされる前方後円墳の前橋天神山古墳（広瀬町一丁目）が「後閑古墳群」のなか唯一残るものであります。

古墳前期（石田川期）の住居跡や石槨墓を検出したとされる「後閑団地遺跡（1982市埋文）」や古墳後期（鬼高期）の住居跡を検出したとされる「後閑Ⅱ遺跡（昭和58年市教委）」など、また古墳後期（鬼高三期）の住居跡やF・Aを被った溝を検出したとされる「坊山遺跡（昭和58年市教委）」は「後閑古墳群」の南側に隣接する遺跡であり、当前田遺跡から2kmの地点になります。

朝倉町付近については「日本書紀」大化2年(646)3月2日の条で上野国司の横暴な違法命令に朝倉君等が刀・弓・布をさし出し、朝廷が国司を処罰したとする記事に縁ある地名とされる町域であるとされています。

他にも、市指定史跡の「経塚古墳」があります。当前田遺跡に隣接して東南方向へ伸びる市道を、葦川と並行して約 1.0 km 程で葦川を渡る栄橋があり、伊勢崎市に入る手前 100m 程の畑の中に、径 30 m 程の塚が経塚古墳です。この付近には嘗て多くの古墳が在ったと云われていますが、ただ一基が残るだけとなっています。

前橋市外では「火雷神社」があります。この神社は（主）藤岡・大胡線が南へ行き、利根川に

架かる福島橋を渡り、東へ行けば8 km程にあります。「日本後紀」延暦15年(796)条で官社に列せられている那波(なわ)郡火雷(ほのいかずち)神社は那波郡下之宮村(江戸期~明治22年・現在の佐波郡玉村町大字下之宮)にあり、古代の利根川は別の場所(前田遺跡の北0.7km辺り)を流れていた筈であるから東南方向へ直行し、倭文(しどり)神社の鎮座する那波郡委文(しとり)郷(現在の伊勢崎市東上之宮町)の上之宮を通れば約5 km程にあります。

倭文神社の「シドリ」は「シズオリ」の転訛で、古代の織物に携わる品部の倭文部の民が委文郷に住み、祭祀した神社とされ、「日本三代実録(857~901 清和・陽成・光孝の三天皇時代を記述す。)」貞観元年(859)条に従五位下に昇叙し官社に列したとあり、長元年間(1030年頃)の「上野国交替実録帳」には正三位とされ、火雷神社とともに古代の人々に信仰された神社で、前田遺跡から約4 km程にあります。

「倭名類聚鈔(平安中期 935年完成。日本最古の漢文の分類百科辞書)」による那波郡田後郷の一部に東善町が在ると考えられる。上野国那波郡は朝倉(あさくら)、鞆田(さやた)、田後(たしり)、佐味、委文、池田(いけた)、葦束(いらつか)の七郷である。この地名の中から前橋市に朝倉、田後の2郷が入っています。この田後郷は山王町字田尻(たしり)の地名が残る禪養寺付近一帯の地域が比定されています。禪養寺の建立は十三世紀中ごろとされ、鎌倉後期の善光寺式三尊仏を寺宝とし、境内に中世の石造墓塔などがあります。

中世の禪養寺周辺は善養寺領であったとされ、元徳3年(1331)長楽寺(新田郡尾島町大字世良田)所蔵文書の将軍の下知状に「上野国那波郡善養寺内田肆町参段半在家式字(別紙坪付在)事」とあって、高山弥四郎重朝領地の権利を由良氏(孫三郎景長の妻)への売却を将軍が承認したもので、元徳4年の寄進状に「上野国那波郡善養寺内高山弥四郎重朝領地在家式字田四町参段半」とあり、4町3段余が由良氏から寄進され長楽寺領となったとしている。

また、善養寺荘の荘名については観応3年(1352)3月11日の長楽寺寺領注文に「上野国那波郡善養寺庄内荘家二字・田<四町由良孫三郎景長 参段半妻紀氏女 元徳三、七、十三>」とあることから、南北朝期に見える荘名としている(日本地名大辞典10/角川書店)。

元龜元年(1570)7月7日に禪養寺では正親町天皇の綸旨を賜り、天下泰平等を祈ったとしている。善養寺荘が東・西善養寺村に別れた時期は解っていないようです。

近世の那波郡東善養寺村(江戸期~明治22年)は前橋藩領になり、慶安年間(1650年頃)に山王村・中内・駒形新田(駒形町)を分村したとされている。

近代は明治22年から大正6年まで上陽村大字東善養寺となり、大正6年上陽村大字東善

と改称し、昭和 32 年上陽村が玉村町に合併し、玉村町の大字となり、昭和 32 年玉村町の旧上陽村の一部が前橋市に合併し、この時から前橋市東善町となり現在に至ったのであります。

第 8 図 前田遺跡周辺遺跡の位置図 (S=1:50,000)



- ① 前田遺跡      ② 阿弥陀山古墳      ③ 文珠山古墳      ④ 善養寺      ⑤ 金冠塚古墳
- ⑥ 木ノ宮遺跡      ⑦ 亀塚山古墳      ⑧ 経塚古墳      ⑨ 天神山古墳      ⑩ 坊山遺跡
- ⑪ 後閑団地遺跡      ⑫ 後閑Ⅱ遺跡      ⑬ 八幡山古墳      ⑭ 倭文神社      ⑮ 火雷神社

### 第 3 章 遺 構 と 遺 物

この調査で確認した土師器住居跡 33 軒のうち、竈不明 5 軒・遺構の一部不明 4 軒・竈のみ 4 軒である。他に溝遺構 25 条、井戸跡は石組 1 基・素掘り 2 基、土坑 5 基、ピット 3 群、水田跡 1ヶ所を確認した。

#### ( 1 ) 住 居 跡

##### 1 号 住 居 跡 ( 第 10 図、図版 2 )

B 調査区の中央やや西側寄り、L-8・9 から M-8・9 グリッドに所在する。確認面 (H=77.450m) は耕作面から 30cm 程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は粘性の有る黒褐色土層に焼土、炭化物を含み、締まった堆積土である。

住居跡の形状は長軸 (南北方向) 3.7m、短軸 (東西方向) 3.2m の隅丸方形を呈す。主軸方向は N-0°-E である。

壁は確認面を 23 ~ 25cm 掘り込んで床面に達し、床面積は 10.76 m<sup>2</sup> を測る。

床は平坦でローム粒を含む黒褐色土で余り硬くなく、床全面に焼土と炭化物の分布が見られ、南西の隅から中央にかけて、長さ 25~55cm、太さ 10cm 程の炭化材が数本出土している。

ピット (pit) 4ヶ所を床面から下記の通り確認した。

ピットの名称	形状寸法 cm				備 考
	形 状	長径	短径	深さ	
P-1	楕 円	38	34	10	北西コーナー付近
P-2	楕 円	40	36	23	南西コーナー付近
P-3	円	55	—	25	竈のまえ、試掘トレンチで 1/2 残
P-4	楕 円	55	42	18	東壁中央やや北寄り

竈は東壁の中央部やや南寄りに位置する。試掘トレンチが住居跡中央を通り竈の左 (北) 側半分を切除し、右 (南) 側半分の焼土が残る。竈全長 (b) = 80cm、竈の主軸方向 ( $\theta$ ) = N-90°-E を測定した。

遺物は土師器甕の口縁部「コ」の字状もの、須恵器甕・埴など破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 2 号 住 居 跡 (第 11・12 図、図版 2)

B 調査区の中央やや西側寄り、M-10・11グリッドに所在する。確認面(H=77.250m)は耕作面から 50cm 程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を有し、わずか炭化物やローム粒を含み、締まりのある黒褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)2.9m、短軸(東西方向)2.6 m の隅丸方形を呈す。主軸方向はN-175°-Eである。

壁は確認面から 20cm 程掘り込んで床面に達している。

床面はやや凹凸したロームで硬く締まっている。床面積は6.90m<sup>2</sup>を測る。

ピット(pit)竈の前から2ヶ所下記の通り確認した。

ピットの名称	形状寸法 cm				備 考
	形 状	長 径	短 径	深 さ	
P-1	円	52	50	10	東壁竈前左寄り
P-2	円	42	40	8	東壁竈前右寄り

竈は東壁の中央部やや南寄りに位置し、壁外に構築され、残存状態は焼土範囲を残すのみである。竈前の東南の隅寄りから大小2個の石(大・長径35cm×短径30cm×厚4~17cmの扁平円形。小・長径20cm×短径15cm×厚4~10cmの扁平円形)が出土している。

竈の寸法は最大幅(a)=65cm、全長(b)=70cm、主軸方向( $\theta$ )=N-82°-Eを測る。

遺物は須恵器坏片のほか覆土中から土師器甕・坏・埴・須恵器甕・須恵器坏等の破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 3 号 住 居 跡 (第 12・13 図、図版 2)

B 調査区の中央やや西側寄り、L-10・11からM-10・11グリッドに所在する。確認面(H=77.350m)は耕作面から 40cm 程排土した第III土層にある。

覆土は粘性を有し、やや締まり、細砂を含む暗褐色土に焼土粒・炭化物を含む土層が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)3.10m、短軸(東西方向)2.95m の隅丸方形を呈す。主軸方向はN-175°-Eである。

壁は確認面から 45~50 cm 程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面はローム質土でやや凹凸し硬く締まっている。床面積は8.29 m<sup>2</sup> を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の南やや中央寄りに位置し、壁面より外側に構築されている。

竈の寸法は最大幅(a)=70cm、全長(b)=150cm、煙道部長(c)=87cm、煙道部幅(f)=

30cm、燃焼部幅(g)=50cm、焚口部幅(h)=65cm、主軸方向( $\theta$ )=N-85°-E、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )=30°を測る。

遺物は土師器甕・土師質坏・須恵器坏・埴など遺存状態のよいものを検出している。

時期は遺物から平安時代と思われる。

#### 4号住居跡(第13・14図、図版3)

B調査区の中央やや西側寄り、M-12・13からN-12・13グリッドに所在する。確認面(H=77.150m)は耕作面から60cm程排土した第V土層にある。

覆土は焼土粒と炭化物・礫を含み粘性を帯びて締まる暗褐色土が堆積している。

試掘トレンチ内に住居跡の北壁がかかり、5号住居跡の南壁と重複切り合い面があったと思われるが、床面からの多量の湧水などで不明瞭な面があり確認するに至らなかった。また、試掘トレンチ内にあったと思われる南壁の位置・辺長についても同様に確認出来ず推定値に成った。

住居跡の形状は長軸(南北方向・推定値)5.40m、短軸(東西方向)4.50mの隅丸方形を呈す。主軸方向はN-0°-Eである。

壁は確認面から20cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床の面積は24.30m<sup>2</sup>を測り、比較的大きい住居跡の部類に入る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の南やや中央寄りに位置し、壁面外側に半楕円状に構築され、覆土は粘性で締まりがあり、わずかに炭化物とロームのブロックと細砂を含む暗褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=90cm、全長(b)=100cm、煙道部長(c)=45cm、焚口部幅(h)=60cm、燃焼部長+焚口部長=50cm、主軸方向( $\theta$ )=N-107°-E、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )=20°程を測る。燃焼部は床面より14cm低く掘り込まれている。

遺物は土師器甕(口縁部「コ」の字状)・土錘・須恵器埴など数点検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

#### 5号住居跡(第15図、図版3)

B調査区の中央付近、L-12・13からM-12・13グリッドに所在する。

確認面(H=77.350m)は耕作面から40cm程排土した第III土層にある。

覆土は粘性を帯びて締まり、わずかに焼土粒と細砂を含む暗褐色土が堆積している。

試掘トレンチ内の南壁にかかり、4号住居跡の北壁と重複切り合い面があったと思われるが、床面からの多量の湧水で不明瞭な面があり確認する迄に至らなかった。また、試掘

トレンチ内にあったと思われる南壁の位置・辺長についても、同様に確認出来ず推定値に成った。

住居跡の形状は長軸（東西方向・推定値）3.50m、短軸（南北方向）3.20m の隅丸方形を呈す。主軸方向はN-77°- Eである。

壁は確認面から 20cm 程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面積推定値は 11.20 m<sup>2</sup> を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央やや南寄りに位置し、覆土は焼土粒・炭化物・細砂を含む褐色土が堆積している。

竈の主軸方向 ( $\theta$ )=N-75°- Eを測り、住居跡の主軸より2°北へ向いている。

竈の寸法は最大幅(a)= 60cm、全長(b)= 170cm、煙道部長(c)= 85cm、燃烧部長 (d)+ 焚口部長 (e)= 85cm、煙道部幅(f)= 35cm、燃烧部幅(g)= 45 cm、煙道部立ち上がり角度 ( $\sigma$ )= 20°程を測る。燃烧部は床面より 10cm 程低く掘り込まれている。

遺物は土師器甕・坏・須恵器甕・埴などの破片を数点検出している。時期は遺物破片の特徴から平安時代と思われる。

## 6 号 住 居 跡 ( 第 16 図、図版 3 )

B 調査区の中央付近、L-13・14からM-13・14グリッドに所在する。

確認面(H=77.300m)は耕作面から 45cm 程排土した第IV土層にある。試掘トレンチが住居跡の南側を通して確認されている。

覆土は粘性を帯びて締まり、細砂と、わずか焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸（東西方向）3.35m、短軸（南北方向）3.20m の隅丸方形を呈し主軸の方向はN-89°- Eである。

壁は確認面から 30cm 程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面積は 10.70 m<sup>2</sup> を測り、ほぼ平坦で締まった床面をしていた。床面には大小の石（大・長径42cm×短径22cm×厚13cmの楕円状 1 個と小・こぶし代の 6 個）が点在し炭化物の散出が見られた。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央に位置し、壁に切り込み、右袖に長さ 25cm・幅 15cm の袖石が東へやや傾いて出土し、主軸方向 ( $\theta$ )=N-83°- Eを測り、住居跡の主軸より6°北へ向いて構築されている。

覆土は褐色土が堆積し、燃烧部から煙道と思われる奥に掛けて焼土・灰などが見られた。

竈の寸法は最大幅(a)= 65cm、全長(b)= 80cm、煙道部長(c)= 15cm、燃烧部長(d) + 焚口部長(e)= 65cm、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )= 30°を測る。

遺物は土師質塊・須恵器塊などを数点検出している。

時期は遺物から平安時代と思われる。

#### 7 号 住 居 跡 (第 17 図、図版 4)

B 調査区の中央東南寄り付近、P-15・16グリッドに所在する。確認面(H=77.350m)は耕作面から 40cm 程排土した第Ⅲ土層にある。

住居跡の東側壁に試掘トレンチがかかり、南東の隅に攪乱場所が確認された。北側壁から東側壁方向にかけて溝(W-1)跡で切られて、重複している。遺構の新旧関係は住居跡より溝(W-1)跡が新しい遺構で在る。

覆土は粘性を帯びて締まり、わずかに軽石粒を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は南北方向3.80m、東西方向推定値 2.60mの隅丸方形を呈していると思われる。主軸の方向はN-175°-Eである。

壁は確認面から 12cm 程掘り込んで床面に達している。床面積の推定値は 9.90m<sup>2</sup> を測り、ほぼ平坦である。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は溝(W-1)跡に切られて不明である。

遺物は土師器甕・須恵器甕・塊などの破片を数点検出している。時期不明である。

#### 8 号 住 居 跡 (第 18 図、図版 4)

B 調査区の中央東南寄り付近、Q-16・17グリッドに所在する。確認面(H=77.300m)は耕作面から 45cm 程排土した第Ⅳ土層にある。

覆土は粘性を帯びてやや締まりあり、細砂を含む黒褐色土が堆積している。

住居跡形遺構の西側壁部に試掘レンチがかかり、遺構内に3個所の攪乱が確認された。北から南方向に西側壁部を溝(W-1)跡で切られ重複している。遺構の新旧関係は住居跡形遺構より溝(W-1)跡が新しい遺構である。

住居跡形遺構の形状は南北方向 3.50m、東西方向推定値3.20m の隅丸方形を呈していると思われる。主軸の方向はN-171°-Eである。

壁は確認面から 12cm 程掘り込んで床面に達している。

遺構床面積の推定値は 11.20 m<sup>2</sup> を測り、ほぼ平坦で締まっているが攪乱され、はっきりしない。

出土遺物は少ない。

ピット・壁溝は確認されなかった。

焼土及び竈は確認されなかった。

遺物は土師器甕片が1点検出されている。時期不明である。

## 9 号 住 居 跡 ( 第 19 図、図版 4 )

B 調査区の南中央寄り付近の U-15・16 から V-15・16 グリッドに所在する。確認面(H=77.200m) は耕作面から 55cm 程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯びて締まり、ローム粒とC軽石粒を含み、わずか炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は東西軸、南北軸の長さは共に 3.00 m の隅丸方形を呈し、主軸の方向は N-5°-E である。

壁は確認面から 12cm 程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面積は 7.72m<sup>2</sup> を測り、平坦でローム土の締まった床面をしている。床面北東コーナー部に長径(東西方向)140cm×短径(南北方向)100cm×深さ20~30cmの楕円状に掘り込んだ遺構が確認された。長径(東西方向)の西 1/3 程が 5 cm程高く、底全体がわずか東下がりである。遺物は羽釜の口縁部片(遺物N035) 1点が底部で検出している。この口縁部片に接合した3点の遺物片は床面から出土している。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東南側のコーナーに位置し、壁を切り込み、張り出している。袖に川石を用い、右袖に1個、左袖に大小4個、燃焼部中央に支脚石と思われる石が検出された。焼土の残りも良く、燃焼部内や右袖付近から須恵器羽釜、土師器坏などが出土している。

竈の覆土は焼土粒、細砂を含む褐色土が堆積している。主軸方向( $\theta$ )=N-130°-Eを測り、住居跡の主軸より 125° 東南へ向いて構築されている。

竈の寸法は最大幅(a)= 85cm、竈全長(b)= 110cm、煙道部長(c)= 50cm、燃焼部長(d)+焚口部長(e)= 60cm、煙道部幅(f)= 20cm、燃焼部幅(g)= 40cm、焚口部幅(h)= 50cm、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )= 10° を測る。

遺物は土師器埴・土師質埴・坏など遺存状態の良いもの数点を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 10 号 住 居 跡 ( 第 20 図、図版 4・5 )

E 調査区の北側中央寄り東北付近、B-16・17からC-15・16・17グリッドに所在す

る。確認面(H=77.100m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。住居跡の中央東寄りを南北に通る試掘トレンチにより確認された遺構である。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずかF・Pを含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(東西方向)4.80m、短軸(南北方向)3.40mの隅丸長方形呈している。住居跡の主軸方向はN-85°-Eである。

壁は確認面から20～25cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は、比較的平坦で、面積は14.97m<sup>2</sup>を測る。壁溝は確認されなかった。

ピット(pit)3ヶ所を床面から下記の通り確認した。

ピットの名称	形状寸法 cm				備考
	形状	長径	短径	深さ	
P-1	楕円	60	50	25	北西コーナー
P-2	楕円	46	36	25	南西コーナー
P-3	円	44		22	北東コーナー

竈は東壁中央に位置し、全体が壁外に張り出し両袖に川石を用いている、燃焼部中央に支脚石と思われる石が検出された。

竈の主軸方向( $\theta$ )=N-78°-Eを測り、住居跡の主軸より7°北へ向いて構築されている。覆土は粘性を帯びて締まり、焼土粒、炭化物を含む褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=58cm、全長(b)=80cm、煙道部長(c)=35cm、燃焼部長(d)+焚口部長(e)=45cm、煙道部幅(f)=32cm、燃焼部幅(g)=35cm、焚口部幅(h)=26cm、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )=40°、燃焼部は床面より4cm程低く掘り込まれて測る。

遺物は土師器甕・土師質塊・刀子など数点検出している。

時期は遺物から平安時代と思われる。

### 11号住居跡(第21図、図版5)

E調査区の北寄り中央付近東、E-15・16からF-15・16・17グリッドに所在する。確認面(H=76.900m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずか焼土粒・炭化物と、わずか所々にF・Pを含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)4.70m、短軸(東西方向)3.60mの隅丸長方形を呈している。住居跡の主軸方向はN-160°-Eである。

壁は確認面から15cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で締まっている。面積は15.33m<sup>2</sup>を測る。

土坑を床面下から2ヶ所下記の通り確認した。

土坑の名称	形状寸法 cm				備考
	形状	長径	短径	深さ	
D-1	円	70	65	17	北壁中央部東寄り
D-2	楕円	70	60	20	竈まえ中央部南寄り

壁溝は確認されなかった。

竈は東壁中央と南寄りに位置し、残存状態は、わずかに形態を留める程度で全体が壁外に張り出した感じである。試掘トレンチにより竈先端部を欠落して確認された。竈の主軸方向( $\theta$ )=N-65°-Eを測り、住居跡の主軸より95°東向きに構築している。覆土は粘性を帯びて締まり、焼土粒、炭化物を含む黒色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=50cm、全長(b)は端部を欠落し測れず、燃焼部幅(g)=35cm、焚口部幅(h)=30cmを測る。

遺物は須恵器大甕、覆土から土師器坏・甕、須恵器甕など破片が数点検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 12号住居跡(第22・23図、図版5)

E調査区の北寄り中央付近東南のD-16・17からE-16・17グリッドに所在する。確認面(H=76.900m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずかに焼土粒・炭化物・粘土粒・細砂を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)3.90m、短軸(東西方向)2.50mの隅丸長方形を呈している。主軸方向はN-3°-Eである。

壁は確認面から7~10cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で、軟かく判然としない。面積は8.98m<sup>2</sup>を測る。

ピット壁溝は確認されなかった。

竈は東壁中央と南寄りに位置し、全体が壁外に張り出している。

竈の主軸方向( $\theta$ )=N-90°-Eを測り、住居跡の主軸より87°東向きに構築している。覆土は焼土粒・わずかに炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

竈の燃焼部の中央付近25~30cmの須恵器片大小数点が集中してしている。須恵器片の下から支脚石跡の穴(口径20cm、深さ14cm)と思われるものを確認した。須恵器片は大甕の破片で、竈の補強材料として用いた可能性が考えられる。

竈の寸法は最大幅(a)=85cm、全長(b)=85cm、燃焼部幅(g)=60cm、焚口部幅(h)=62cm、煙道部立ち上がり角度( $\sigma$ )=13°、焚口部は床面より11cm掘り込んで計測した。遺物は土師器坏・甕、須恵器甕など破片を検出している。

時期は出土遺物破片の特徴から平安時代と思われる。

### 13号住居跡（第23・24図、図版5・6）

E調査区の北寄り中央付近東のE-16・17からF-16・17～G-16・17グリッドに所在する。試掘トレンチが住居跡西壁部を南北に通って確認された。確認面(H=77.000m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯びやや締まり、焼土粒・炭化物を多く含み、わずかに細砂を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)4.70m、短軸(東西方向)は試掘トレンチ内にあり、距離は不明だが短軸と推測され、隅丸長方形と思われる。主軸方向はN-3°-Eを測る。

壁は確認面から12～15cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で、軟かく判然としない。面積は9.44m<sup>2</sup>を測る。床面から多くの遺物を検出している。

壁溝は確認されなかった。

ピットは北東のコーナーから1ヶ所を確認した。形状は円状で径42cm、深さ22cmを測る。

竈は東南の隅に位置し、壁隅から煙道部が壁外に長く突き出す。(コーナー竈)煙道の焼土が円形に残り、煙道部から径10cm、厚6cmの球状の石が1個出土している。用途不明。竈の前から炭化物の範囲を確認している。

竈の主軸方向( $\theta$ )=N-120°-Eを測り、住居跡の東西軸より27°南向きに構築している。

竈の覆土は焼土粒、炭化物を含む褐色土が堆積している。竈の寸法は最大幅(a)=30cm、全長(b)=110cm、煙道部幅(f)=30cmを測る。

遺物は須恵器皿、土錘、などの他土師器甕、須恵器坏・埴・甕など破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

### 14号住居跡（第25図、図版6）

E調査区の中央北東付近のG-16・17からH-16・17グリッドに所在する。試掘トレンチが住居跡の西側中央寄りを南北に通って確認された。確認面(H=77.000m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層である。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずかに炭化物と細砂を含む暗褐色土が堆積している。住居跡の形状は長軸(東西方向)5.00m、短軸(南北方向)3.30mの隅丸長方形を呈して

いる。住居跡の主軸方向はN-101°-Eである。

壁は確認面から10～15cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は軟弱で判然としない部分もあるが、遺物の出土具合が面的に散出していることから床面を確認したもので面積は14.28 m<sup>2</sup>を測る。

壁溝は確認されなかった。ピットは北壁の北東コーナー寄りから1ヶ所、円状で長径35cm、短径33cm、深さ12cmを確認した。

竈は東壁の南コーナー寄りに確認し、主軸方向(θ)=N-123°-Eを測り、住居跡の主軸より22°南向きに構築している。

竈の覆土は焼土ブロック、炭化物を含む褐色土が堆積している。

竈の範囲が焼土の残存状況から観察ができ、構築材と思われる石が右袖側に一個と焼却部から支脚石と思われる石一個、袖の補強材として使用したと思われる埴輪片2点、竈の右前より埴輪片1点、住居の南壁に沿って数点検出している。

竈の寸法は最大幅(a)=45cm、全長(b)=93cm、煙道部幅(f)=28cm、燃焼部幅(g)=30cm、焚口部幅(h)=30cm、焚口の手前に径40cm程の灰かき穴を確認した。

遺物は須恵器羽釜などの他土師器甕・埴・坏・埴輪、須恵器甕・埴などの破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

### 15号住居跡(第25・27図、図版6)

E調査区の中央北東付近のH-17からI-17グリッドに所在する。確認面(H=76.900m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層である。覆土は粘性を帯びて締めり細砂・焼土粒・炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(東西方向)2.60m、短軸(南北方向)2.50mの隅丸方形を呈している。主軸方向はN-90°-Eである。壁は確認面から10cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で良く締めり、面積は5.89m<sup>2</sup>を測る。壁溝は確認されなかった。

ピットは四隅に4ヶ所、かなり大きめの土坑1ヶ所を下表の通り確認した。

ピット等の名称	形状寸法 cm				備考
	形状	長径	短径	深さ	
P-1	円	41		10	北西コーナー
P-2	円	40		20	西南コーナー
P-3	円	48	47	12	南東コーナー
P-4	円	36	30	20	東北コーナー
D-1	円	96	86	81	住居跡中央部

竈は東壁中央に位置し、外壁に掘り込まれて確認し、わずか焼土、灰などを残す状況である。主軸方向は住居跡の主軸と同じ向きに構築している。

竈の覆土は焼土、炭化物、わずかF・P、褐色土粒を含む褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=70cm、全長(b)=70cm、燃烧部幅(g)=60cm、焚口部幅(h)=60cm、焚口の手前に炭化物の散布する範囲を確認した。

遺物は土師器甕・埴輪など他に須恵器甕・羽釜などの破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 16号住居跡(第28図、図版6・7)

E調査区の中央北寄り付近のI-13グリッドに所在する。住居跡の南壁部分を東西に試掘トレンチが入り確認された遺構である。確認面(H=76.800m)は耕作面から68cm程排土した第V土層にある。

住居跡の形状は長軸(東西方向)2.60m、短軸(南北方向)推測値2.20~2.60mの隅丸方形を呈していると思われる。住居跡の主軸方向はN-90°-Eである。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずか焼土粒と多くの炭化物、細砂などを含む暗褐色土が堆積している。

壁は確認面から10cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で締まっている。面積は6.20m<sup>2</sup>程度を推測する。床面から多量の遺物が灰などと共に出土している。竈付近、西壁付近が特に多く径10~20cmの石が数個散在し中央から西壁寄りに掛けて、炭化物と一緒に焼けた凝灰岩の石2個を検出している。床面全面に炭片が見られた。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁南寄りに位置している。竈全体が壁外に張り出して構築している。

竈の主軸方向(θ)はN-90°-Eを測り、住居跡の主軸と同じ東向きに構築され、両袖と焚口及び燃烧部から石が出土している。燃烧部の石はやや大き目で長径約25cm短径15cmであった。

竈の覆土は炭化物を含む暗褐色土が堆積している。試掘トレンチで竈の南壁の一部を欠落して確認された。

竈の寸法は全長(b)=75cm、燃烧部長(d)+焚口部長(e)=55cm、焚口部幅(h)=50cmを測る。燃烧部は床面から14cm程を掘り込んでいた。

遺物は土師器甕、須恵器埴・坏、土師質羽釜、刀子など遺存状態の良いものを検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

### 17号住居跡（第29図、図版7）

E調査区の中央寄り北東付近のH-18・19からI-18・19グリッドに所在する。確認面（H=76.800m）は耕作面から62cm程排土した第IV土層にある。

調査区を南北方向に通る1号溝（W-1）遺構が住居跡の東側で重複し、東壁・竈などが確認出来なかった。新旧関係は床面に1号溝の堆積砂層が見られ、住居跡を切り込んでいることから1号溝跡より住居跡が旧跡である。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずか焼土粒・細砂を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸（東西方向）3.20m以上と推定、短軸（南北方向）3.20mの隅丸長方形を呈すると思われる。主軸方向はN-81°-Eを測る。

壁は確認面から15cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は硬さに乏しく判然としないが、平坦で出土遺物も少ない。面積は10.60m<sup>2</sup>を推測する。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東側南寄り床面からわずか焼土の跡を確認していることから東側壁に位置するものと思われるが、1号溝（W-1）と重複し竈は確認していない。

遺物は紡錘車、須恵器片などを検出している。時期は不明である。

### 18号住居跡（第30図、図版7・8）

E調査区の中央寄り北東付近、J-14・15グリッドに所在する。住居跡北側を東西に試掘トレンチが入り確認された遺構である。確認面（H=76.950m）は耕作面から40cm程排土した第III土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒・炭化物・細砂を含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は東西方向3.20m、南北方向3.00m以上（北側壁が試掘トレンチにより切除され距離不確認）を測り、隅丸長方形を呈しているものと思われる。住居跡の主軸は不明である。

壁は確認面から14cm程掘り込んで床面に達し、垂直に立ち上がる。

床面は平坦で、全面から遺物を検出している。床面積は8.85m<sup>2</sup>を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央南寄りに位置し、竈全体が壁外に突き出して構築され、内部には径32cm、深さ10cm程の凹みが確認された。支脚石の跡と思われる。

竈の主軸方向（θ）はN-90°-Eを測る。

竈の覆土はわずか焼土粒、炭化物、細砂を含む褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)= 70cm、全長(b)= 93cm、煙道部幅(f)= 40cm、焚口部幅(h)=64cmを測る。

遺物は紡錘車、土師器と須恵器の甕・坏・埴などの破片を検出している。時期は遺物破片の特徴から平安時代と思われる。

### 19号住居跡（第31図、図版8）

E調査区の中央の東寄り、I-20・21からJ-20・21グリッドに所在する。住居跡の中央南側寄りを東西に試掘トレンチが入り確認された遺構である。確認面(H=76.900m)は耕作面から53cm程排土した第IV土層である。

覆土は粘性を帯びやや締まり、わずか焼土粒、炭化物、砂質ロームなどを含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)3.50m、短軸(東西方向)3.10mの隅丸方形を呈している。住居跡の主軸方向はN-87°-Eである。

壁は確認面から10～14cm程掘り込んで床面に達している。

床面積は9.60m<sup>2</sup>を測る。

壁溝は確認されなかった。

竈は確認できなかった。竈にあたる部分に試掘トレンチが入ったが遺構の確認ができなかった。本調査でも鋭意遺構の確認に勤めたが、遺構が薄いうえ、多量の降雨と湧水で確認するに至らなかった。

遺物は土師器坏、須恵器壺・土師質埴などの他に土師器甕・埴、須恵器甕・埴などの破片を検出している。時期は遺物の特徴から平安時代と思われる。

### 20号住居跡（第32・33図、図版8）

E調査区の中央の東寄り、J-18・19からK-18・19グリッドに位置する。確認面(H=76.900m)は耕作面から57cm程排土した第IV土層である。

覆土は粘性を帯び締まり、わずか焼土粒・炭化物・細砂を含む暗褐色土が堆積している。住居跡の形状は長軸(南北方向)4.90m、短軸(東西方向)4.30mの隅丸方形を呈している。住居跡の主軸方向はN-170°-Eである。

壁は確認面から20cm程掘り込んで床面に達し立ち上がる。

床面はやや凹凸が有るが硬く締まっている。他の住居跡と比べてやや大きく、面積は18.93m<sup>2</sup>を測る。

ピット、壁溝は確認されなかった。

竈は東南の隅に位置し、東南方向に突き出している。主軸方向( $\theta$ )はN-125°-Eで住居跡の主軸の向きより45°東へ向けて構築している。(コーナー竈)

竈の覆土は炭化物と、わずか焼土粒含む褐色土が堆積している。

竈の燃焼部から煙道部にかけて、押し潰された状態で焼土が残り、右袖の補強材として円筒埴輪が埋め込まれて検出されている。焚口から長径13cm程の楕円状の石などを検出している。

竈の寸法は最大幅(a)=80cm、全長(b)=140cm、煙道部長(c)=85cm、燃焼部長(d)+焚口部長(e)=55cm、煙道部幅(f)=35cm、燃焼部幅(g)=55cm、焚口部幅(h)=48cm、煙道部立ち上がり角( $\sigma$ )=50°を測る。

遺物は土師器甕、土師質羽釜・坏・埴などの他埴輪片などを検出している。時期は遺物の特徴から平安時代と思われる。

## 21号住居跡(第34図、図版9)

C調査区の中央西寄り、M-5・6グリッドに所在する。確認面(H=77.250m)は耕作面から40cm程排土した第Ⅲ土層にある。西側を南北に通る調査区域外の舗装道路に沿った試掘トレンチで焼土範囲を確認し、竈を確認したものである。

竈の範囲等はトレンチの地層断面に焼土、灰の堆積を確認したもので、住居跡は調査区域外の舗装道路下にあると思われる。

遺物は確実な物は出土していない。時期は不明である。

## 22号住居跡(第34・35図、図版9)

L調査区の北側西寄り付近、B-7・8からC-7・8グリッドに所在する。西側を南北に通る調査区域外の農業排水路に沿って試掘トレンチが入り確認した住居の遺構である。確認面(H=75.800m)は耕作面から50cm程排土した第Ⅳ土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒、炭化物、F・Pを含む暗褐色土が堆積している。

23号住居跡が、当住居跡西南一郭に重複して確認された遺構である。新旧関係は当住居跡南壁を切って、23号住居跡の竈が構築されたので、当住居跡が古い遺構である。形状は南北方向3.50m、東西方向3.00m以上(西側壁が試掘トレンチのため距離不明確)を測り、隅丸長方形を呈しているものと思われる。

住居跡の主軸は不明である。

壁は確認面から3~10cm程掘り込んで床面に達している。

床面は硬く締まっている。床面積は9.12m<sup>2</sup>を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央やや南寄りに位置し、壁外に構築されている。

竈の主軸方向 ( $\theta$ ) は  $N-86^{\circ}-E$  を測る。

竈の覆土は、わずか焼土粒、炭化物を含む褐色土と灰層などで堆積している。燃焼部右壁に沿って土器数点と石1個を検出した。

竈の寸法は最大幅(a)= 80cm、全長(b)= 58cm、焚口部幅(h)= 75 cmを測る。

煙道部立ち上がり角 ( $\sigma$ )=38°、燃焼部は床面から6 cm程の掘り込みを測る。

遺物は須恵器皿・埴・坏、土師質坏、土錘などの他土師器甕・坏・埴などの破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

### 23号住居跡 (第35・36図、図版9)

L調査区の北側西寄り付近、B-7からC-7グリッドに所在する。西側を南北に通る調査区域外の農業排水路に沿って試掘トレンチが入り確認した住居の遺構である。確認面(H=75.800m)は耕作面から50cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒、炭化物、F・Pを含む暗褐色土が堆積している。

22号住居跡に当住居跡が重複して確認された遺構で、新旧関係は当住居跡が22号住居の西壁を切って、竈を構築していたので、当住居跡が新しい遺構である。

住居跡の形状は南北方向3.40m、東西方向の遺構の大部分が調査区域外の農業排水路下である。

東側壁の出土状況から隅丸長方形を呈しているものと思われる。壁は確認面から6cm程掘り込んで床面に達している。

床・壁溝の大部分は調査区域外で確認できなかった。

ピットは東壁際に、竈を左右に挟んでP-1・2を、北東のコーナーに土坑D-1を下表の通り確認した。

ピット等の名称	形状寸法 cm				備考
	形状	長径	短径	深さ	
P-1	円	—	34	10	東壁際、竈の右側
P-2	楕円	—	24	23	東壁際、竈の左側
D-1	楕円	74	—	25	東壁際、北コーナー

竈は東壁の中央部に位置し、壁外に膨らみ出して構築され、竈の主軸方向 ( $\theta$ ) は  $N-90^{\circ}-E$  を測る。竈の覆土はわずか焼土粒、灰を含む褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)= 67cm、全長(b)= 70cm、焚口部幅(h)= 50 cm、煙道部立ち上がり角 ( $\sigma$ )=45° を測る。

遺物は須恵器甕・埴などの破片を検出している。時期は遺物破片の特徴から平安時代と思われる。

#### 24号住居跡（第36・37図、図版9）

L調査区の中央北西付近、E-7・8からF-7・8グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から65cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒、炭化物、F・Pを含む暗褐色土が堆積している。

33号住居竈跡が当住居跡北西の一郭に、また17号溝跡が当住居跡の竈を切って東西方向に、重複して確認された遺構である。

新旧関係は当住居跡床面に33号住居跡竈が構築されていること、また17号溝跡についても竈跡を切っているなど、当住居跡が古い遺構である。

形状は長軸(南北方向)4.20m、短軸(東西方向)3.10mを測る。南西コーナーは角ばり、他の3コーナーは隅丸を成した方形を呈している。

住居跡の主軸方向はN-2°-Eを測る。

壁は確認面から6cm程掘り込んで床面に達している。

床面は硬く締まり、床面積は12.25m<sup>2</sup>を測る。床面南西コーナー付近に焼土範囲を確認した。ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央部に位置し、壁外に突き出している。竈の左り側を17号溝跡に切られている。竈の主軸方向( $\theta$ )はN-88°-Eを測る。

竈の覆土は焼土粒、炭化物を含む暗褐色土が堆積している。竈の寸法は全長(b)=88cmを測る。

遺物は土師器台付き甕、須恵器坏などの他土師器甕片、須恵器甕片などを検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

#### 25号住居跡（第38図、図版10）

L調査区の北側西寄り付近、H-8・9グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から60cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒、炭化物、F・Pを含む暗褐色土が堆積している。

住居跡の形状は長軸(南北方向)3.50m、短軸(東西方向)2.70mを測る。北西コーナーは角ばり、他の3コーナーは隅丸を呈した長方形である。主軸方向はN-86°-Eを測る。壁は確認面から6cm程掘り込んで床面に達している。

床面は硬く締まり、床面積は8.73m<sup>2</sup>を測る。

ピット遺構は住居跡西壁の外にやや列状を成して、下表の通り確認した。

ピット等の名称 北側から	形状寸法 cm			備考
	形状	径	深さ	
P-1	円	30	43	西壁からの距離 40 cm
P-2	円	22	43	西壁からの距離 13 cm
P-3	円	26	43	西壁からの距離 75 cm
P-4	円	28	35	西壁からの距離 120 cm

近辺から掘立柱建物跡柱穴列の確認はなく、当遺構との関係も不明である。

床面からはピット及び壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央やや南寄りに位置し、壁外に構築され、主軸方向( $\theta$ )はN-70°-Eで住居跡の主軸方向より16°北へ向けて構築している。竈の覆土は、わずか焼土粒、炭化物、F・P、細砂、灰を含む暗褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=60cm、全長(b)=66cm、焚口部幅(h)=52cmを測る。煙道部立ち上がり角( $\sigma$ )=22°、燃焼部は床面から5cm程を掘り込まれている。

遺物は土師器坏、須恵器坏などの他に土師器甕片、須恵器甕片などを検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 26号住居跡 (第39図、図版10)

L調査区の北側西寄り付近、I-8・9からJ-8・9グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から60cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、わずかF・P、炭化物、細砂を含む暗褐色土が堆積している。

27号住居跡が当住居跡の南側大半を覆う状態で重複している。竈の位置が、わずか残る焼土範囲で漸く確認された遺構である。

遺構の新旧関係は当住居跡の竈を壊し平坦化して、27号住居跡が構築されていることが土層から窺えることから当住居跡が古い遺構である。

住居跡の形状は長軸(南北方向)4.50m、短軸(東西方向)2.80mを推測できる。隅丸長方形を呈し主軸方向はN-5°-Eを測る。

壁は確認面から7cm程掘り込んで床面に達している。

床面は硬く締まり、床面積は12.98m<sup>2</sup>を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の中央付近に位置していたと思われるが、わずか残る焼土範囲で漸く判断できる程度である。

遺物は土鍾の他に土師器坏・甕、須恵器坏などの破片を検出している。時期は遺物破片

の特徴から平安時代と思われる。

## 27号住居跡（第39・40図、図版10）

L調査区の中央寄り北西付近、I-8・9からJ-8・9グリッドに所在する。確認面(H=75.750m)は耕作面から65cm程排土した第IV土層にある。

覆土は粘性を帯び締まり、焼土粒、炭化物、F・Pを含む暗褐色土が堆積している。

26号住居跡南側大半が当住居跡の中央部床面と重複している。遺構の新旧関係は当住居跡が26号住居跡を平坦化して、床面に取り込んで構築されていることが土層から窺えることから当住居跡が新しい遺構である。

住居跡の形状は長軸（東西方向）4.65m、短軸（南北方向）2.80mを測り、隅丸長方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eを測る。

壁は確認面から6～8cm程掘り込んで床面に達している。

床面は硬く締まり、床面積は11.90m<sup>2</sup>を測る。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁の南コーナー寄りに位置し、壁外に突き出し、わずか焼土粒、炭化物、灰を含む暗褐色土が堆積し、残存状況は灰層を残す程度である。

竈の主軸は住居跡の主軸方向から30°南へ向いている。

竈の寸法は最大幅(a)=60cm、全長(b)=70cm、焚口部幅(h)=55cmを測る。

遺物は土師器坏・埴などの他に須恵器甕・埴などの破片を検出している。時期は遺物から平安時代と思われる。

## 28号住居跡（第40図、図版11）

L調査区の中央寄り北西付近、H-7からI-7グリッドに所在する。確認面(H=75.650m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。29号・30号住居跡が当住居跡の上にやや竈の幅分を南へ、幾分西に寄りながら重複して確認された遺構で、竈跡の部分を残し大部分は試掘トレンチから調査区域外の農業排水路下である。重複している遺構の新旧関係は当28号・29号・30号の順に新しくなると思われる。

ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は住居跡東北コーナーの北壁から東壁を南へ2.0m程寄った位置に竈の主軸方向(θ)をN-90°-Eへ向けて構築されている。

竈の覆土は焼土粒、炭化物、わずかF・Pを含む暗褐色土の堆積にわずか竈跡の状況が窺える程度である。

竈の寸法は最大幅(a)= 60cm、全長(b)= 90cm を測る。

遺物は土師器甕の他に破片数点を検出している。

時期は遺物から平安時代と思われる。

### 29 号 住 居 跡 (第 40 図、図版 11)

L 調査区の中央寄り北西付近、H-7 から I-7 グリッドに所在する。確認面(H=75.650m) は耕作面から約 55cm 程排土した第IV土層にある。28号住居跡の上に当住居跡が竈の幅分を南に移動し、10 cm 程西に寄りながら重複して、更に当住居跡の上に南、西に 30cm 程ずれて三重に確認された遺構である。新旧関係は当28号・29号・30号の順に新しくなると思われる。

竈跡を残し大部分が試掘トレンチから農業排水路下の調査区域外である。竈は東壁に位置し、左袖が28号住居跡竈右袖の位置から構築され、主軸方向( $\theta$ )はN-90°- Eへ向いている。

竈の覆土は焼土、わずかF・P を含む褐色土と焼土ブロック、灰が堆積して竈の状態を残している。

燃焼部左壁側に径 25cm 程、深さ 5 cm程の凹み、燃焼部から焚口部に掛けて支脚石跡と思われる凹み、灰かき穴を床面から 8 cm程を掘り込まれて確認されている。

竈の寸法は全長(b)= 115 cm、煙道部立ち上がり角( $\sigma$ )=38° を測る。他は重複して判然としない。

遺物は土師器甕・坏、須恵器坏・埴などの破片を検出している。時期は遺物の破片の特徴から平安時代と思われる。

### 30 号 住 居 跡 (第 40 図、図版 11)

L 調査区の中央寄り北西付近のH-7 から I-7 グリッドにかけて所在する。確認面(H=75.700m) は耕作面から 55cm 程排土した第IV土層にある。28号住居跡に竈一つずれて29号住居跡が重複し、それに 2.0m 南にずれて当住居跡が重複する遺構で新旧関係は28号・29号・当30号の順に新しくなると思われる。

覆土は粘性を帯びやや締まり、焼土、炭化物、わずかF・P を含む暗褐色土が堆積している。住居跡の形状は東壁が南北方向 3.60 m を測り、南・北のコーナーは隅丸である。

壁、床面は判然としない部分が有るが、確認面から 14cm 程掘り込んで床面に達す。ピット・壁溝は確認されなかった。

竈は東壁中央南寄りに位置し、壁外に丸く突き出して構築され、主軸方向( $\theta$ )は

N-90°-Eへ向いている。

竈の覆土は焼土、炭化物、灰層を含む暗・黄褐色土が堆積し、燃焼部中央付近から支脚石跡と思われる凹み、構築材と思われる石2個が右袖近くから検出した。

竈の寸法は全長(b)=100 cm、焚口部幅(h)=55 cm、煙道部立ち上がり角( $\sigma$ )=40°を測る。焼土、灰層の堆積が竈の状態を残している。

遺物は土師器甕、須恵器甕・羽釜などの破片を検出している。時期は遺物の破片の特徴から平安時代と思われる。

### 31号住居跡竈 (第37図、図版11)

L調査区の中央寄り北西付近、E-7グリッドに所在する。確認面(H=75.750m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。当住居跡竈と32号住居跡竈はやや並列に1.0mの距離で重複関係にあると思われる。南北に入れた試掘トレンチの東側壁の地層断面で確認された。試掘トレンチの西側は農業排水路で調査区外であるため32号住居跡と共に床部、ピット、壁溝など確認できず新旧関係は不明である。

覆土は粘性を帯びやや締まり、焼土、炭化物、わずかF・Pを含む暗褐色土が堆積している。

竈は東壁に丸く突き出して構築されたもので灰層を残す程度で、主軸方向( $\theta$ )はN-90°-Eである。

遺物は土師器甕、須恵器壺・坏などの破片を検出している。時期は遺物の破片の特徴から平安時代と思われる。

### 32号住居跡竈 (第37図、図版11)

L調査区の中央寄り北西付近、E-7グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から55cm程排土した第IV土層にある。31号住居跡竈と当住居跡竈は1.0m間においてやや並列し重複していると思われるが、南北に入れた試掘トレンチと農業排水路下の調査区外であるため31号住居跡と共に床部、ピット、壁溝などは確認できない。新旧関係は不明である。覆土は粘性を帯びやや締まり、焼土、炭化物、わずかF・Pを含む暗褐色土が堆積している。

竈は東壁に丸く突き出して構築されたもので灰層を残す程度で、竈の主軸方向( $\theta$ )はN-90°-Eである。煙道部立ち上がり角( $\sigma$ )=40°を測る。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕・壺などの破片を検出している。時期は遺物の破片の特徴から平安時代と思われる。

### 33 号住居跡竈 (第 37 図、図版 9・10)

L 調査区の中央北西付近、F-7・8 グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から 65cm 程排土した第IV土層にある。当竈は24号住居跡床面北西部の一郭に焼土範囲を重複して確認したものである。遺構の新旧関係は24号住居跡床面を切って構築したと思われるので当竈が新しい遺構と思われる。竈は24号住居跡の西壁側から床面を掘り込んで構築している。主軸方向( $\theta$ )はN-90°-Eを測る。覆土は焼土粒、炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

竈の寸法は最大幅(a)=90cm、全長(b)=115cm、焚口部幅(h)=60cmを測る。

遺物は土師器甕片・土錘などを検出している。

時期は遺物の特徴から平安時代と思われる。

## (2) 溝遺構

### 1 号溝 (第 43・54 図、図版 12・13)

B 調査区の中央やや東側寄り、L-15グリッドからE調査区の中央東側寄りのJ-20グリッドに達する位置で確認された。北の調査区域外から始まり一部調査区域外を通り、南方面の調査区域外へ流下する溝跡である。確認面はB区・L区共に耕作面から 25 ~ 30cm 程排土した第II土層にある。溝跡の方向はN-170°-Eを測る。

覆土はB区L-15グリッドのA~A'地点では締まりのある灰褐色土にサンドウィッチされたB軽石二次堆積の赤褐色土が堆積している。

B~B'(A~A'から43m程南下した。)地点ではB軽石を多く含み、粘性を有し締まりのある暗褐色土を主に堆積している。

C~C'(B~B'から41m程南下した。L区G-18・19グリッド。)地点ではB軽石とローム粒を含み、粘性を有した暗褐色土を主に堆積している。

D'~D(C~C'から12m程南下した末端部。)地点でも同様に暗褐色土を主に堆積している。

溝は調査区内で延長約 96 m、幅 0.8~2.0 m、確認面からの溝の深さ 22 ~ 42 cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北側A~A'地点で H=77.200m、南側D'~D地点で H=76.500 m、溝底勾配  $i=7.29\%$  で北から南へ流下していたことが窺える。

2号溝の重複がB区L-15グリッドで確認されている。A~A'地点の地層断面で当溝の下端から確認されたことから新旧関係は当溝が新しいものと考えられる。

7号住居跡との重複はB区P-16グリッドで、8号住居跡との重複はB区Q-16グリッドで、17号住居跡との重複はE区H・I-19グリッドで確認されている。其々の住居跡を切った覆土地層で確認されたことから新旧関係は当溝が新しいものと考えられる。

ピット(P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>)がB区U-17・V-17グリッドで確認されている。遺物は土師器塚の他に土師器甕・坏、須恵器甕・蓋などの破片を検出している。

## 2号溝(第43・54図、図版13)

B調査区の中央やや東側寄り、L-15グリッドに所在する。1号溝との重複がL-15グリッドで確認され、A～A'地点の地層断面で1号溝の下端から確認されたことから新旧関係は当溝が古いものと考えられる。確認面は耕作面から50cm程排土した第IV土層にある。覆土は粘性を帯びやや締まり、ローム粒、細砂、わずかF・Pを含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は北西から南東方向へ全長2.3m、幅40cm(北西)～50cm(南東)、確認面からの溝の深さ7～12cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北西側地点でH=77.035m、南東側地点でH=76.960mを測り、溝底勾配*i*=32.6%で北から南へ高低差を示す。溝跡の方向はN-150°-Eを測る。

遺物は出土していない。

## 3号溝(第43・54図、図版13)

B調査区の中央やや東側寄り、N-16・17からO-17グリッドに所在する。確認面は耕作面から50cm程排土した第IV土層にある。覆土はB軽石を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南北方向に全長4.5m、幅30cm(北)～35cm(南)、確認面からの溝の深さ12cmを測る。断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北側地点でH=77.305m、南側地点でH=77.270mを測り、溝底勾配*i*=7.8%で北から南へ高低差を示す。溝跡の前後の接続や遺構が判然としていない。溝跡の方向はN-160°-Eを測る。

遺物は出土していない。

## 4号溝(第43・54図、図版13)

B調査区の中央やや東側寄り、O-16グリッドに所在する。確認面は耕作面から50cm程排土した第IV土層にある。

覆土はB軽石を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南北方向に全長 3.0m、幅 22cm(南)～42(北)cm、確認面からの溝の深さは6～9cm、断面は梯形を呈している。

溝底の高さは南側地点で H=77.305m、北側地点で H=77.270mを測り、溝底勾配  $i=11.7\%$  で南から北へ高低差を示す。溝跡の前後の接続や遺構が判然としない。溝跡の方向は  $N-174^{\circ}-E$  を測る。

遺物は出土していない。

#### 5 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

B調査区の南東中央寄り、U-17からV-17グリッドに所在する。西側 1.5m に1号溝、東側 0.1～0.5 m に6号溝、6号溝の東側に7号溝が北から南へ高低差をつけて確認している。確認面は耕作面から 47cm 程排土した第IV土層にある。

覆土はB軽石を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南北方向に全長 5.15m、幅 62cm(北)～56cm(南)、確認面からの溝の深さ 7cm～12cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北側地点で H=77.205m、南側地点で H=77.140mを測り、溝底勾配  $i=12\%$  で北から南へ高低差を示す。溝跡の南側で判然としない。溝跡の方向は  $N-178^{\circ}-E$  を測る。

遺物は須恵器(甕)片1点を検出している。

#### 6 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

B調査区の南東中央寄り、U-18からV-18グリッドに所在する。西側 0.1～0.5 m に5号溝、東側に7号溝が北から南へ高低差をつけて確認している。確認面は耕作面から 47cm程排土した第IV土層にある。覆土は砂質の灰褐色土が堆積している。当溝の確認した部分は南北方向に全長 5.10m、幅 40cm(北)～25cm(南)、確認面からの溝の深さ 5cm～11cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北側地点で H=77.230m、南側地点で H=77.140mを測り、溝底勾配  $i=17.6\%$  で北から南へ高低差を示す。溝跡の南側で遺構が判然としていない。

溝跡の方向は  $N-175^{\circ}-E$  を測る。

遺物は出土していない。

### 7 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

B 調査区の南東中央寄り、U-18からV-18グリッドに所在する。西側にやや並行して 1号溝・5号溝・6号溝を北から南へ高低差をつけて確認している。確認面は耕作面から 47cm程排土した第IV土層にある。

覆土は砂質の灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南北方向に全長 4.80m、幅 20cm(北)～30cm(南)、確認面からの溝の深さ 7cm～8cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは北側地点で H=77.205m、南側地点で H=77.140mを測り、溝底勾配  $i=13.5\%$  で北から南へ高低差を示す。溝跡の南側で遺構が判然としない。

溝跡の方向は  $N-178^{\circ}-E$  を測る。

遺物は出土していない。

### 8 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

E・F 調査区の中央やや北寄りを東西方向に跨がり、E区I-21・22・23・24 からF区I-2・1・2・3グリッドに所在する。南側 0.5～0.8 m 程にやや並行して9号溝を確認している。9号溝の南に隣接して、素掘り井戸1基と石組井戸1基の計2基が東西方向に並列して確認されている。確認面は耕作面から 57cm程排土した第IV土層にある。覆土は砂質の灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 28.7m、幅 25cm(東)～30cm(西)、確認面からの溝の深さ 5cm(東)～10cm(西)を測る。溝の断面は拋物線形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=76.720m、西側地点で H=76.725mを測り、溝底勾配  $i=0.2\%$  で東西の高低差は殆ど0を示す。溝跡の東南端側及び中程で遺構が判然としない部分がある。溝跡の方向は  $N-89^{\circ}-E$  を測る。

遺物は土師器甕・坏、須恵器甕などの破片を検出している。

### 9 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

E・F 調査区の中央やや北寄りを東西方向に跨がり、E区I-23・24 からF区I-0・1・2・3グリッドに所在する。北側にやや並行して8号溝を確認している。南に隣接して西から素掘井戸(I-2)・石組井戸(I-3)・土坑(D-5)の3基が東西方向に並列して、素掘井戸(I-2)跡とは重複して確認されている。I-2は当溝の下端から確認されたことから新旧関係は当溝が新しいものである。確認面は耕作面から 57cm程排土した第IV土層にある。覆土は細砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 23.5m、幅 16cm(東) ~ 26cm(西)、確認面からの溝の深さ 5 ~ 6 cm 溝の断面はやや半円形状を呈し、溝底の高さは東側地点で H=76.720m、西側地点で H=76.730mを測り、溝底勾配  $i=0.4\%$  で東西の高低差は殆ど 0を示す。溝跡の東南端側で遺構が判然としない部分がある。溝跡の方向は N-86°-E を測る。遺物は出土してない。

#### 10 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

I 調査区の南辺り中央西寄り、X-7・8グリッドに所在する。南側にやや並列して11~14号溝の4条が南へ約8mの間に確認されている。確認面は耕作面から30cm程排土した第II土層にある。覆土は細砂を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.1m、幅100cm(東) ~ 50cm(西)、確認面からの溝の深さ 17cm(東) ~ 10cm(西) を測る。溝の断面は拋物線形を呈している

溝底の高さは東側地点で H=75.660m、西側地点で H=75.630mを測り、溝底勾配  $i=5.9\%$  で、わずか東から西へ高低差を示す。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向は N-81°-W を測る。

遺物は出土してない。

#### 11 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

I 調査区の南辺り中央西寄り、Y-7・8グリッドに所在する。南側にやや並列して12~14号溝が2条、北側に10号溝が確認されている。確認面は耕作面から30cm程排土した第II土層にある。覆土は細砂を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.2m、幅 80cm(東) ~ 40cm(西)、確認面からの溝の深さは7cm(東) ~ 4cm(西) を測る。溝の断面は拋物線形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=75.680m、西側地点で H=75.600mを測り、溝底勾配  $i=15.4\%$  で、わずか東から西へ高低差を示す。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向は N-89°-W を測る。遺物は土師器甕片、須恵器埴片などを検出している。

#### 12 号 溝 (第 43・54 図、図版 13)

I 調査区の南辺り中央西寄り、Y-7・8グリッドに所在する。南側にやや並列して13~14号溝が2条、北側に10~11号溝が確認されている。確認面は耕作面から30cm程排土した第II土層にある。

覆土は細砂を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.3m、幅140cm(東)～94cm(西)、確認面からの溝の深さは12cm(東)～14cm(西)を測る。溝の断面は拋物線形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=75.640m、西側地点で H=75.600mを測り、溝底勾配  $i=15.4\%$  でわずか東から西へ高低差を示す。溝跡の東西の端から先が調査区域外である。溝跡の方向はN-70°-WからY-8グリッド中程で曲点を有し、N-90°-Wを測る。

遺物は土師器甕片を検出している。

### 13号溝 (第43・54図、図版13)

I・L調査区の境界線下、中央西寄り、I区Y-7・8からL区A-7・8グリッドに所在する。南へ3.0m程に並行して14号溝が、北側に10～12号溝の3条が確認されている。確認面は耕作面から35cm程排土した第II土層にある。

覆土はB軽石を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.3m、幅95cm(東)～82cm(西)、確認面からの溝の深さは4cm(東)～3cm(西)を測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=75.770m、西側地点で H=75.710mを測り、溝底勾配  $i=11.3\%$  で東から西へ高低差を示す。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向はN-91°-Wを測る。

遺物は土師器杯の他に須恵器甕片、土師質坏片などを検出している。

### 14号溝 (第43・54図、図版13)

L調査区の北側西寄り、A-7・8グリッドに所在する。南へ2.0m程に隣接して22号住居跡と、北側に10～13号溝の4条が確認されている。確認面は耕作面から30cm程排土した第II土層にある。

覆土はB軽石を含む灰褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.5m、幅44cm(東)～44cm(西)、確認面からの溝の深さは5cm(西)～14cm(東)を測る。

溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは西側地点で H=75.760m、東側地点で H=75.710mを測り、溝底勾配  $i=9.1\%$  で西から東へ高低差を示す。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向はN-95°-Eを測る。

遺物は土師器片を検出している。

### 15号溝（第44・54図、図版13）

L調査区の北側西寄り、C-7からD-8グリッドに所在する。南に隣接して16号溝と、北側に22号住居跡とその間にピット4ヶ所が確認されている。確認面は耕作面から31cm程排土した第Ⅱ土層にある。

覆土は細砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南東から北西方向に全長5.6m、幅40cm(南東)～30cm(北西)、確認面からの溝の深さ2～4cmを測る。

溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは南東側地点でH=75.770m、北西側地点でH=75.745mを測り、溝底勾配*i*=4.5%で南東から北西への高低差は殆ど平らである。溝跡の北西の端から先は調査区域外であり、南東端から先は遺構の確認が出来なかった。

溝跡の方向はN-40°-WからC-8グリッド南西隅でわん曲して溝幅を50cmに拡げN-30°-Wへ方向を変えている。

遺物は土師器坏片1点を検出している。

### 16号溝（第44・54図、図版13）

L調査区の北側西寄り、C-7からD-7・8グリッドに所在する。北側2.0m程に隣接して15号溝を確認している。

確認面は耕作面から35cm程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は細砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南東から北西方向に全長4.4m、幅40cm(南東)～50cm(北西)、確認面からの溝の深さ3～7cmを測る。

溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは南東側地点でH=75.715m、北西側地点でH=75.700mを測り、溝底勾配*i*=3.4%で南東から北西への高低差は殆ど平らである。溝跡の北西の端から先は調査区域外であり、南東端から先の遺構は確認出来なかった。

溝跡の方向はN-30°-Wを測る。

遺物は土師器片を検出している。

### 17号溝（第37・44・54図、図版9）

L調査区の中央寄り北西付近のF-7・8グリッドに所在する。22号住居跡の上面に重複して、東西方向に確認している。遺構の新旧関係は22号住居跡の竈を壊して確認されて

いるので、当溝が新しい遺構である。

確認面は耕作面から 35cm 程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土はB軽石をわずか含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南東から北西方向に全長 5.5m、幅 14cm(南東)～35cm(北西)、確認面からの溝の平均深さ 8 cmを測る。溝の断面は拋物線形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=75.760m、2.0m程西側地点 (H-22号の竈の袖付近)H=75.710mを測り、溝底勾配  $i = 10\%$ で東から西への高低差を示している。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向は  $N-105^{\circ}-W$ を測る。

遺物は出土していない。

#### 18号溝 (第44・54図、図版13)

L調査区の中央寄り北西付近のG-7・8グリッドに所在する。南 2.0m程に隣接して25号住居跡と、北側に17号溝が重複した24号住居跡が確認されている。確認面は耕作面から 35cm程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土はB軽石をわずか含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長 5.3m、幅 65cm(東)～46cm(西)、確認面からの溝の深さは 6～7 cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは東側地点で H=75.810m、西側地点で H=75.715mを測り、溝底勾配  $i = 17.9\%$ で東から西への高低差を示している。溝跡の東西の端から先は調査区域外である。

溝跡の方向は  $N-90^{\circ}-W$ を測る。

遺物は須恵器坏、土師器甕片などを検出している。

#### 19号溝 (第44・54図、図版14)

L調査区の中央寄り西付近のJ-7・8グリッドに所在する。南 2.0m程に隣接して20号溝と21号溝が合流して確認されている。北側に27号住居跡と30号住居跡の竈が確認されている。確認面は耕作面から約 35cm程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は砂礫を含む黄褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は北東から南西方向に全長 2.4m、幅 65cm(北東)～85cm(南西)、確認面からの溝の深さ 13cm(北東)～40.5cm(中程)～17.5cm(南西)を測る。溝の断面は立ち上がりが緩やかな梯形を呈している。

溝底の高さは北東側地点で H=75.550m、南西側地点で H=75.520mを測り、溝底勾配  $i =$

12.5%である。溝跡の北東の端はJ-8グリッドの西縁から始まり、南西方向へ高低差を示している。北東の端先の遺構は確認が出来なかった。南西方向の先は調査区域外である。

溝跡の方向はN-115°-Wを測る。

遺物は土師器片を検出している。

## 20号溝（第44・54図、図版14）

L調査区の中央寄り西付近のJ-8・9からK-7・8グリッドに所在する。南側に、当溝がK-8グリッドの北西一郭で21号溝と重複し、北側には27号住居跡が確認されている。21号溝との新旧関係は当遺構の土層を切って21号溝を確認していることから当遺構が古いものである。

確認面耕作面から35cm程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は砂を含む褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は北東から南西方向へ全長8.5m、幅35cm(北東)～40cm(南西)、確認面からの溝の深さ11cm(北東)～17cm(中程)～6cm(南西)を測る。溝の断面は立ち上がりが緩やかな梯形を呈している。

溝底の高さは北東側地点でH=75.710m、南西側地点でH=75.650mを測り、溝底勾配*i*=7.1%である。溝跡の北東の端はJ-9グリッドの北東の一郭から始まり、南西方向へ高低差を示している。北東端の先は調査区域外である。南西端の先はK-8グリッドの北西の一郭で21号溝に切られて確認された。

溝跡の方向はN-130°-Wを測る。

遺物は須恵器埴のほかに土師器甕片などを検出している。

## 21号溝（第44・54図、図版14）

L調査区の中央寄り西付近のK-7・8グリッドに所在する。南側に22号溝と北側にK-8グリッドの北西一郭で20号溝と重複し確認されている。新旧関係は当遺構が20号溝の土層を切って確認していることから当遺構が新しいものである。確認面は耕作面から30cm程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向へ全長4.6m、幅65cm(東)～74cm(中程)～56cm(西)、確認面からの溝の深さ10cm(東)～8cm(中程)～5cm(西)を測る。溝の断面はやや北下りの拋物線形を呈している。

溝底の高さは東側地点で  $H=75.690\text{m}$ 、西側地点で  $H=75.635\text{m}$ を測り、溝底勾配  $i=11.9\%$ である。溝跡は東から西方向へ高低差を示している。東西の先端方向は調査区域外である。溝跡はK-8グリッドの北西の一郭で20号溝を切って確認された。

溝跡の方向は  $N-85^{\circ}-W$ を測る。

遺物は出土していない。

## 22号溝（第44・54図、図版14）

L調査区の中央寄り西付近のK-7・8からL-8グリッドに所在する。南側に23号溝と北側に21号溝を確認されている。

確認面は耕作面から30cm程排土した第Ⅲ土層にある。覆土は細砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は東西方向に全長5.2m、幅45cm(東)～60cm(西)、確認面からの溝の深さ15cm(東)～7cm(西)を測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは東側地点で  $H=75.630\text{m}$ 、西側地点で  $H=75.595\text{m}$ を測り、溝底勾配  $i=6.7\%$ である。溝跡は東から西方向へ高低差を示している。東西の端の先は調査区域外である。溝跡はK-8グリッドの南西の一郭で北西( $N-45^{\circ}-W$ )方向から南西( $N-120^{\circ}-W$ )方向へわん曲して確認された。

遺物は出土していない。

## 23号溝（第44・54図、図版14）

L調査区の中央寄り西付近のM-7からN-7・8グリッドに所在する。北側に22号溝を確認されている。南側は調査区域外である。

確認面は耕作面から30cm程排土した第Ⅲ土層にある。覆土は細砂を含む暗褐色土が堆積している。

当溝の確認した部分は南東から北西方向へ全長2.6m、幅40cm、確認面からの溝の平均深さ11.5cmを測る。溝の断面は拋物線形を呈している。

溝底の高さは南東側地点で  $H=75.620\text{m}$ 、北西側地点で  $H=75.610\text{m}$ を測り、溝底勾配  $i=3.8\%$ である。溝跡は南東から北西方向へ高低差を示している。南東と北西の端の先は調査区域外である。

溝跡の方向は  $N-45^{\circ}-W$ を測る。

遺物は出土していない。

#### 24号溝（第44・54図、図版14）

C調査区の中央寄り西付近のM-7からN-6・8を通りO-6・7グリッドに所在する。北側は調査区域外である。南側に水田跡が確認されている。確認面は耕作面から60cm程排土した第VI土層にある。

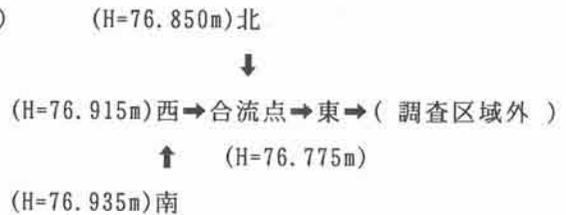
覆土は上層から耕作土、B軽石を含む暗褐色土、部分的にB軽石層、F・Pを含む暗褐色土とで堆積している。

当溝の確認した部分は全長14.9m、幅60～80cm、確認面からの溝の深さ20～30cmを測る。溝の断面は拋物線形・一部梯形を呈している。

溝底の高さはM-7グリッドの北側地点がH=76.850mで南へ5.0m程下りN-7グリッドの中央地点で東西方向の溝と合流している。この付近はH=76.775m溝底の高である。溝はN-6グリッド北西の隅（溝底の高H=76.915m）で半径2.0m程の半円形を描いて、南のO-6グリッドに伸び楕円状の凹みに継いでいる。楕円状の凹みは長径2.0m、短径1.5m、確認面から深さは13.5cm、底高H=76.935mを測る。楕円状の凹みは幅60cmの溝状で東側O-7グリッドへ続いている。O-7グリッドは調査区域外である。溝底勾配はN-7グリッドの溝の交差点が最低部H=76.775mである。南の楕円状の凹み部の底高H=76.935mは16cm程高いことになる。

遺物は出土していない。

#### 水の流れ（模式図）



#### 25号溝（第44・54図、図版14）

B調査区南辺り中央寄りのX-15・16・17グリッドに所在する。確認面は耕作面から30cm程排土した第II土層にある。覆土は砂層（B軽石）が堆積している。当溝の確認した部分は全長6.5m、幅35cm（東）～60cm（西）、確認面からの溝の深さ9～11.5cmを測る。溝の断面は梯形を呈している。

溝底の高さは東側地点でH=77.535m、西側地点でH=77.550mを測り、溝底勾配*i*=2.3‰である。溝跡は東から西方向へ高低差を示している。東西の端の先は調査区域外である。溝跡の方向はN-80°-Wを測る。

遺物は出土していない。

### ( 3 ) 井戸跡

#### 1 号井戸跡 ( 第 42 図、図版 12 )

##### 素掘り井戸状跡

B 調査区の中央やや東南側寄り、R-16グリッド杭を取り込む位置に所在する。確認面 (H=77.200m) は耕作面から 60cm 程排土した第V土層にある。Q-16・17グリッドの8号住居跡が隣接して確認されている。覆土は上層は細砂を含む暗褐色土、下層は砂質ロームを含む暗褐色土が堆積している。

確認面で井戸の北側縁りから河原石が出土したが、井戸の構築材かは不明である。

確認した遺構の平面形は確認面で径 1.8m のほぼ円状で、断面の形状は確認面から70cm程掘り下げた所からロート状を呈し、1.8m程の深さで底に達する。湧水が非常に多く、井戸底の状態は不明である。

壁面は粘性に富んだローム層で井戸枠は検出していない。

遺物は確認面から 60cm 程の浅い位置から土師器の塊、高坏、須恵器の甕片などを検出している。

#### 2 号井戸跡 ( 第 42 図、図版 12 )

##### 素掘り井戸跡

E 調査区の中央やや東寄りの I-22・23グリッドに所在する。確認面 (H=76.600m) は耕作面から 65cm 程排土した第V土層にある。当遺構の東側 5.0m に3号井戸跡が、西側15m程の周辺には17号・19号・20号住居跡が確認されている。

覆土は上層で、わずかB軽石・焼土・炭化物を含む暗褐色土で下層はローム・粘土を含む灰褐色土が堆積している。

遺構の平面形は確認面で径 1.8m のほぼ円形、断面の形状は確認面から 90cm 程掘り下げた所で径 1.2m に、わずか縮めてロート状を呈している。

壁面は粘性に富んだローム層で井戸枠は検出していない。湧水が非常に多く、井戸底は不明である。

遺物は確認面から 90cm 程の浅い位置から須恵器の塊、甕片などを検出している。

確認面の付近で河原石が多く検出したが、井戸の構築材かは不明である。

#### 3 号井戸跡 ( 第 9・42 図、図版 12 )

##### 石組井戸跡

E 調査区の中央やや東寄りの I-22・23グリッドに所在する。確認面 (H=76.500m) は耕作面から 75cm 程排土した第VI土層にある。

当遺構の東側 8.0m に5号土坑が、西側5.0mに2号井戸跡が、その西側10m程の周辺に

は17号・19号・20号住居跡が確認されている。

覆土は上層で、わずかに炭化物を含む暗褐色土で、中層は礫とF・Pをわずかに含む暗褐色土で、下層は礫と細砂を含む粘性の強い黒褐色土が堆積している。(註・この項では、上層は確認面から1・2層、中層は3・4層、下層は5層をいう。)

掘り方の形状は確認面で径 3.1m のやや楕円状を呈し、確認面から楕鉢状に 1.3m 程掘り下げて径 2.1m に縮め、次に 0.3m 程掘り下げて径 1.4m に縮め、さらに 0.5m 程掘り下げて径 1.1m に縮めて底部とする3段の楕鉢状断面である。底部の泥炭質粘土層(不透水層)は厚20cm程で、これに楕鉢状の穴(上径 80cm・底径 60cm・深さ40cm)を掘り込み、下層の軽石質砂層(透水層)に達している。

穴に人頭大の石を詰めた上に扁平の自然石(厚7~8cm・径 20cm 程)を敷均し、方形の木枠組を基礎として井戸側(あ)積み石を小口積で天端(確認面)まで積み上げている。確認面から木枠までの深さは約2.0mを測る。

底部の穴と、穴に人頭大の石を詰めたのは軽石質砂層(透水層)中の被圧地下水を噴出させ井戸(水溜部)に十分な水量を確保するためと、詰め石に因って地下水の噴出穴と井戸側積み石の崩壊防止を考えたものと思われる。曲物は検出していない。

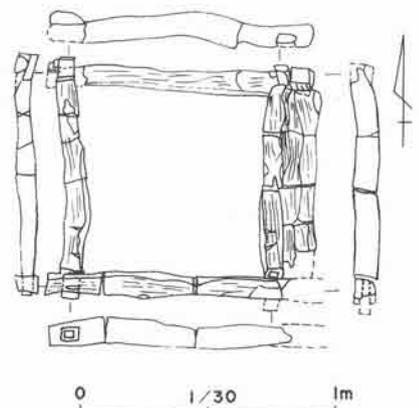
底部の木枠に使用した四面加工木材は長さ90~100cm、幅10cm、高さ 10cm 程の寸法を測る。南北部材の両端に横 7.0cm・縦4.5cm の柄(ぼ)穴を設け、東西部材の柄を差し込んで枠組を方形にしている。枠組の東側に木材が1本平行に押し込まれて出土している。枠組の安定固着を計るためと思われる。

井戸側石積み面(あ)の内法(うちり)寸法は 75cm で木枠組に合わせてやや隅丸の方形に、徐々に広げながら 80cm 程積み上げ内法寸法を120cm 程とし、この寸法で確認面まで積み上げている。

積み石の寸法は長さ20~30cm、幅15~20 cm、厚10cm程の扁平な川原石を使用し小口積にしている。積み石と掘り方の隙間の裏込めは粘性に富んだローム質褐色土で埋め戻している。

遺物は上層で土師器の甕片・須恵器の甕片が、下層では土師器の坏・須恵器の甕片を検出し、他に木枠付近より果皮(ひょうたん類)、石斧などを検出した。

他の井戸は浅く素掘りに対して本井戸は木枠と石積を使用してしっかり構築された井戸で長期使用を目的に作られたと思われる。



第9図 基礎枠組

## ( 4 ) 土 坑

### 1 号 土 坑 ( 第 44 図、図版 14 )

B 調査区の中央より東側方向に位置し N-16 グリッドに所在する。確認面 (H=77.500m) は耕作面から 30cm 程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は軽石を含み粘性のある暗褐色土が堆積している。

形状は長径 94cm、短径 84cm、深さ 30cm 程を測り、平面は楕円状を、断面は梯形を呈している。遺物は出土していない。

### 2 号 土 坑 ( 第 44 図、図版 14 )

C 調査区の中央やや南西寄りの S-6 グリッドに所在する。確認面 (H=76.930m) は耕作面から 55cm 程排土した第Ⅳ土層にある。畦畔の一部と西側が重複している。新旧関係は畦畔の一部を切って作られていると思われるが、はっきりしない。

覆土は細砂を含みやや粘性のある暗褐色土が堆積している。

形状は長径 160cm、短径 130cm、深さ 12cm 程を測り、平面は楕円状を呈し、断面はゆるやかに落ち込み放物線形の底は、やや中央が凹んでいる。

遺物は土師器の坏等数点を検出している。

### 3 号 土 坑 ( 第 44 図、図版 14 )

C 調査区の中央南西寄りの U-5・6 から V-5・6 グリッドにかけて所在する。確認面 (H=77.050m) は耕作面から 69cm 程排土した第Ⅴ土層にある。

覆土は確認面で、わずか炭化物・焼土粒・細砂を含む粘性の少ない褐色土層、底面付近は砂質ローム粒を含む暗褐色土を堆積している。

形状は長径 82cm、短径 40cm、深さ 20cm 程を測る。平面はやや細長い楕円状で、断面は梯形を呈している。

遺物は出土していない。

### 4 号 土 坑 ( 第 44 図、図版 15 )

L 調査区の中央北西寄りの D-8 グリッドに所在する。確認面 (H=75.830m) は耕作面から 33cm 程排土した第Ⅲ土層にある。

覆土は、わずか焼土粒、炭化物を含む暗褐色土が堆積している。

確認面の形状は円で径 58cm、深さ 20cm 程を測る。断面は、ほぼ梯形を呈し、底面は平らである。

遺物は出土していない。

## 5 号 土 坑 ( 第 44 図、図版 15 )

F調査区の中央西側方向よりI-1からJ-1グリッドにかけて所在する。確認面(H=76.500m)は耕作面から75cm程排土した第VI土層にある。当遺構の西側8.0mに3号井戸跡が確認されている。

覆土は上層を粘性のある暗褐色土で、下層は砂・粘土・礫を含む灰褐色土が堆積している。確認面で多数の石が出土したが下層からは出土していない。積石に使用したものとは思えない。

確認面での形状は径180cm程のほぼ円形を呈している。深さは確認面より約90cmを測り、底部に達している。底面は締まった自然堆積の灰褐色シルト層であり、径100cm程で円状である。

壁は粘質土層で木杵、積石の痕跡はないが湧水状況等から、浅井戸の可能性も否定できない。遺物は浅い層より土師器甕片、須恵器の埴、甕片などを検出している。

## ( 5 ) ピ ッ ト

### ピ ッ ト P<sub>1</sub> ~ P<sub>4</sub> ( 第 45 図、図版 15 )

B調査区の中央東南寄りのU-16・17からV-16・17グリッドに所在する。確認面(H=77.300m)は耕作面から50cm程排土した第IV土層にある。覆土はピットの中心部が灰褐色粘土層で埋められ、周りは暗褐色土層で埋まり、断面はU字形を呈している。

ピットの位置は南北に伸びる1号溝跡を東西に挟んで確認した。

ピットの 呼称	確認面の形状寸法(cm)			深さ(cm)
	形 状	長 径	短 径	
P <sub>1</sub>	円	27	—	30
P <sub>2</sub>	ほぼ円	25	22	32
P <sub>3</sub>	円	20	—	40
P <sub>4</sub>	ほぼ円	24	20	30

ピットの間隔は溝を挟んで東西2.0m、南北1.8mで配置されている。溝との新旧関係は不明であるが平面的に見て溝を跨ぐような位置である。

遺物は出土していない。

### ピ ッ ト P<sub>5</sub> ( 第 45 図、図版 15 )

C調査区の中央南西寄りのQ-6グリッドに所在する。確認面(H=77.000m)は耕作面から60cm程排土した第IV土層にある。周辺は水田跡が確認されている。

覆土は砂質ロームを含む暗褐色土が堆積している。平面形状は短径34cm・長径40cmの楕円で、断面は深30cmを測る梯形を呈している。遺物は出土していない。

ピット P<sub>6</sub>～P<sub>9</sub>。(第45図、図版15)

L調査区の中央北西寄りのC-8グリッドに所在する。確認面(H=75.800m)は耕作面から40cm程排土した第Ⅲ土層にある。当遺構の南側から溝(W-15・16)、土坑(D-4)が、北側から住居跡(H-22・23)が確認されている。

ピットは4ヶ所確認したが全体の形態は不明である。

ピットの形状などは下表の通りである。

ピットの呼称	確認面の形状寸法(cm)			深さ(cm)	断面の形状	覆土の状況
	形状	長径	短径			
P <sub>6</sub>	ほぼ円	22	20	29	U字形	上層はわずかにB軽石を含み粘性のある暗褐色土で埋まる
P <sub>7</sub>	ほぼ円	23	22	30	〃	上層はわずかにB軽石を含み粘性の強い暗褐色土で埋まる
P <sub>8</sub>	円	32	—	35	二段〃	上層はわずかに炭化物・B軽石を含む暗褐色土で埋まる
P <sub>9</sub>	円	30	—	29	U字形	上層はわずかに炭化物・B軽石を含む暗褐色土で埋まる

P<sub>8</sub>断面の形状は底に径10cm、深10cmの凹みがあり、落ち込みが二段に見られるU字状を呈している。

遺物は出土していない。

## (6) 水田跡 (第41図、図版11・12)

C調査区の中央西側寄りのP-6・7からO-6・7、R-6・7、S-6グリッドにかけて所在する。

確認面(H=77.050m)は耕作面から55cm程排土した第Ⅳ土層にある。当遺構の内に土坑(D-2)が、北側から住居跡(H-21)・溝(W-24)が確認されている。覆土はB軽石の純層が一部で見られたが大部分が二次堆積層と思われる。F・P粒も見られたが耕作の影響によるものと思われる。

水田跡の全様は不明だが調査範囲で10面を確認した。田面一枚全部を確認できるものは無かった。水田畦畔部は北西から南東方向(N-130°-E)で、畦畔の長さ3.3~4.2m程を2ヶ所測る。南西から北東方向(N-40°-E)の畦畔の長さは4.7mを測定できるもの1ヶ所で、他は全体を測定できなかった。水田の長軸は、おおむね南西から北東方向と思われる。

水田は確認部分で北西から南東にかけて、8~10cmの比高差を持ち北から南へ下る棚田

的な様相を呈すると考えられる。

畦畔は大部分が直線的に伸びて田面を長方形に囲んでいるものと思われる。田面の主軸は、おおむね北東方向（N-40°-E）である。水田に伴うものかどうかは不明だが溝（W-24）遺構が近接して確認している。

遺物は畦畔上から9世紀後半～10世紀前半ごろの須恵器塊の破片が1点と土坑からは土師器坏（ほぼ完形）など、9世紀後半ごろの遺物を検出している。

### （ 7 ） グ リ ッ ド 出 土 遺 物 （ 第 46 ～ 52 図 ）

B区M-13、B区U-15、C区M-6・7、E区D-15、E区H-20・21、F区J-0、L区C-9各グリッドからの出土遺物は土師器坏・甕、須恵器塊・皿、土師質塊の他に石鏃、石斧、鉄滓などが検出している。また各調査区（B区、C区、E区、F区、I区、L区）から出土した一括取り上げ遺物の土師器甕、紡錘車、土錘、砥石、石斧なども、出土遺物観察表に記載した。

#### 参考文献

塚廻り古墳群 1980 群馬県教育委員会

清里・陣場遺跡 1981（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

中尾（遺物編）1984「中尾遺跡」群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

引切塚遺跡 1985 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団

下東西遺跡 1987 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

芳賀東部団地遺跡Ⅱ 1988 前橋市教育委員会

奥原古墳群（第158図 円筒埴輪部位名称 P-174 による。）

1983 群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 第 4 章 ま と め

前田遺跡は水田農業地帯にあり、周囲は曾て広瀬古墳群と称され県内屈指の古墳群が所在していた地域として知られ、今も貴重な古墳が点在している。

調査では主に平安時代の住居跡20軒と竈不明のもの5軒、住居跡の一部不明4軒、竈のみ4軒、溝25条、水田跡1ヶ所、井戸跡3ヶ所、土坑5ヶ所、ピット9ヶ所を確認することができた。

### 住 居 跡 について

住居遺構の形態と数は隅丸方形のもの4軒、南北に長軸（主軸）を持つ隅丸長方形のもの15軒、東西に長軸を持つ隅丸長方形のもの6軒、形態不明のもの8軒である。形態不明のものを除いて25軒を確認している。このうち南北に長軸を持つものが圧倒的に多く60%を締めている。他は東西に長軸のもの24%、方形のもの16%であった。床面は、貼り床はほとんど認められず、単に荒掘り時に生じた凹凸部を黒褐色土やロームまじりの褐色土で平らに整えているものと思われる。

竈は全体に東向きで東壁中央やや南寄りが多く、煙道も短い物が多い。南東コーナーに竈を構築し煙道も長いものに、H-9、H-13、H-20号が上げられる。竈の右袖に円筒埴輪を使用して竈の補強材としているH-20号住竈の天井部分と思われる位置から須恵器大甕片が数点出土し竈の構築材として使用されたと思われるH-12号竈を確認している。その他竈では川原石を利用していた。コーナー竈は市内では少なく引切塚遺跡4号住居跡や竈作り替えによるコーナー竈の下東西遺跡S J 70号住居跡などに見られる。

### 住 居 跡 出 土 遺 物 について

#### 9世紀後半代

- 土師器 甕 大型と小型の甕がある。口縁部に強い屈曲を持つ「コ」の字状のもので口縁部と胴部の境が明瞭で肩から底部にかけて急激に細くすばむもの。
- 坏 平底から直線的に開く体部を持つ。底部にわずか丸みを残す。器肉の薄いものが多く緩やかに「S」字状の体部を持つ。
- 須恵器 坏 全て回転糸切り未調整。体部外面ロクロ痕を残すもの。底径は口径の50%前後のもの。直線的なもの丸みを持つもの。
- 甕 器肉が厚く体部に内外面に叩き痕があるもの。

#### 10世紀前半代

- 土師器 甕 「コ」の字状口縁を持つもの。「コ」の字状を変形させたもの。肩部の張りが弱くなり全体の丸くなるもの。口縁部・底部の器肉が厚いもの

小 型 甕 甕とほぼ同じである。

須恵器 坏 深い壙型と浅いものがある。底部が口径の50%以下の物が多く口縁部で外反する。

壙 体部の深いもの、浅いもの、体部が丸みを持ち口縁部で外反する。高台部の短いものが多い。

皿 全て高台付でやや深めの台形高台を持つ。

#### 10世紀後半代

土師器 坏 底部に丸みを持ち体部緩やかに「S」字状に、わん曲する器肉の薄いもの。ロクロ整形、内黒のもの。底部転糸切り痕を残すもの。

須恵器 坏 (土師質) 体部が直線的で底部のやや大きいもの。体部に丸みを持ち底部の小さいもの。体部が直線的で浅いもの。体部が直線的で口縁部で外反するもの。全て糸切り未調整なもの。

土師質 壙 足高高台のもの。

羽釜 口縁部の内傾が弱く端部が厚くなるもの。口縁部の立ち上がり傾向が強くと端部の平坦面が水平に厚くなるもの。

須恵器 甕 堅緻な焼成なもの。外面に叩き痕内面は指頭圧痕ヘラナデ調整のもの。

壙 大型で高い高台のもの。深めの体部太く短い高台を持つもの。

土師器 壙 高台付でロクロ整形で丸い体部を持つ。内面口縁部外側ヘラ磨き黒色処理のもの。

小 型 甕 厚い器肉、短く外反する口縁部ヘラナデ、ヘラ削り。

以上の特徴を持つ遺物が出土している。

#### 住居跡の編年について

本住居跡を他遺構との出土遺物、出土位置などから相対的編年を行い比較分類し住居跡を9世紀後半から10世紀後半までに分類した。

編 年 代	住居ナンバー	摘 要
9世紀後半代	H-1・2・3・4・6・11・25	実測可能な遺物より編年した
10世紀前半代	H-10・22・27	
10世紀前半から後半代	H-14・24	
10世紀後半代	H-9・13・15・16・19・20・28	
9世紀後半代	H-26	実測は不可能な遺物で一部特微を持つ物により推定編年した
10世紀前半代	H-12・23・31	
10世紀後半代	H-5・18・32・33	

以上の住居跡の内H-9・13・20号住は、南東コーナーに竈を持つ、また20号住は竈補強材として円筒埴輪が使用されていた。H-7・8・17・21・29・30号住居跡は出土遺物が少なく編年区分の範囲に含まれていない。

次に各期における重複住居の新旧関係を見ると以下の様になる。

重複住居	時期	新旧関係	備考
H-4 H-5	9世紀後半代 10世紀後半代	H-4→H-5	H-5は一部破片等の特徴により編年
H-26 H-27	9世紀後半代 10世紀前半代	H-26→H-27	一部出土遺物の特徴や竈の残り具合等による
H-28 H-29 H-30	10世紀後半代	H-28→H-29 →H-30	住居跡の残り具合より推定による
H-24 H-33	10世紀前半代 から後半代 10世紀後半代	H-24→H-33	33号住が24号住の床面を壊していることによる

以上住居跡の編年、重複関係について述べてきたが本遺跡は9世紀後半代から10世紀後半代にかけて住居が構築されている。特に9世紀後半代と10世紀後半代が集中して構築されている。それ以後は、あまり構築されていないものと思われる。

本遺跡付近には朝倉・広瀬古墳群があり当遺跡との関係も考えられ、竈の構築材として円筒埴輪などの使用も見られ水田、井戸跡なども確認されており古墳時代以後に集落が形成されたものと思われる。

### 溝遺構

溝は調査区全域から25条が確認されている。溝の底部、または覆土から遺物を伴って確認されたものは、1・5・8・9・11・12・13・15・18・20号溝である。

1号溝は北から南へ流下する方向で確認され、この中で最も大きな規模を持ち、遺物には、土師器甕・須恵器埴・土師質埴など10世紀後半の遺物が出土している。

13号溝からは10世紀後半と思われる土師質埴、20号溝からは10世紀前半ごろの須恵器埴などの遺物を検出している。その他の溝は破片のみで時期は不明である。

### 井戸跡

井戸跡は、素掘り井戸跡2基、石組井戸跡1基を確認している。出土遺物など時期を推定する材料に乏しく時期は不明である。今後の課題としたい。

## 出土遺物観察表

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで（ ）は推定値を表す。

NO	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
1	H-1-1	土師器甕	①(20.4)	密・酸化	橙	口縁部は「コ」の字状を呈し、口唇部は沈線状をなす。口縁部横位のナデ、内面横ナデ調整、内外面接合痕あり。	口縁部上半部1/4残	16
2	H-2-1	須恵器杯	② 6.9	粗・還元	暗青灰	平底の底部、体部ロクロ痕。底部回転糸切り未調整。	底部1/4残	16
3	H-3-1	須恵器杯	①(14.2)	普通・還元	灰オリーブ	緩やかに彎曲する体部、外反する口縁部。体部ロクロ整形。	底部欠損	16
4	H-3-2	土師器甕	①(17.8)	密・酸化	鈍い褐	口縁部上半で外反し口唇部に沈線状をなす。内外面口縁横ナデ、外面肩部、横位のヘラ削り。	口～頸部1/4残	16
5	H-3-3	土師器甕	①(19.6)	普通・酸化	赤褐	胸部は上位から膨らみを持ち、彎曲気味に直立し、口縁部は直線的に外反する。外面横位にヘラ痕、内面ヘラナデ。	口～胸部1/4残	16
6	H-3-4	須恵器高台付埴	①(14.0) ③(6.6) ④ 5.9	粗・還元	灰白	底部から体部は直線的に外反する。内外面に細砂を含み、表面全体に損傷あり。ロクロ整形底部回転ナデ調整。	1/4残	16
7	H-3-5	土師質杯	①(12.0) ② 6.0 ④ 3.8	普通・酸化	鈍い褐	底部は上底、体部は中位に段差を持ち、口縁部で外反する。口縁部内外面横ナデ調整。	体部1/4残	16
8	H-3-6	土師器甕	①(19.2)	普通・酸化	明赤褐	口縁部は「コ」の字状を呈する。口縁部内外面に接合痕、内面横位のナデ。	口縁部1/4残	16
9	H-4-1	土錘	⑤(3.3) ⑥ 0.9	酸化	明黄褐	穿孔径0.3 重さ2.28g	一部欠損	28
10	H-4-2	土師器甕	①(19.2)	粗・酸化	橙	口縁部は「コ」の字状を呈する。内外面横ナデ。	口縁部～頸部1/4残	17
11	H-4-3	須恵器埴	① 15.5 ③ 6.0 ④ 5.5	普通・還元	灰白	体部直線的に外傾し口縁部で外反する。体部内外面ナデ、底部回転糸切り、高台部割れ。	口～体部1/4残	17
12	H-6-1	須恵器高台付埴	①(13.6) ③(6.7) ④ 4.6	粗・還元	灰	底部は付高台、体部は内彎し、口縁部は緩やかに外反する。体部内外面横ナデ底部回転糸切り未調整。高台部割れ痕あり	ほぼ完形	17
13	H-6-2	須恵器高台付埴	① 15.5 ③ 7.1 ④ 51.0	粗・還元	灰	高台を付した底部から緩やかに彎曲し口縁部で外反する。体部ロクロ整形、底部回転糸切り後ナデ、雑な付高台。	完形	17
14	H-6-1	土師質高台付埴	①(12.8) ③ 6.2 ④ 5.0	普通・酸化	黒	底部は付高台、体部は直線的に口縁部に至る。体部内外面横ナデ。	1/4残	17
15	H-9-1	土師質高台付埴	③ 8.0	粗・酸化	黒褐	高台は外傾して開き、体部は丸味をもって内彎している。底部は貼付高台。	口縁部欠損	17
16	H-9-2	土師質埴	① 14.7 ③(5.2)	密・酸化	褐 内面黒	体部は緩やかに内彎し口縁部でわずかに外反する。体部内面ヘラ磨き、底部回転糸切り後ナデ、付高台。	高台部欠損	17
17	H-9-3	土師質高台付埴	①11.6 ③ 6.1 ④ 4.2	普通・酸化	橙	高台は「ハ」の字に外傾して開く、体部中位で内彎し口縁部は外反する。体部にロクロによるナデ目残る。底部は回転糸切り後付高台。	完形	17
18	H-9-4	土師質環	① 9.3 ② 5.2 ④ 2.4	密・酸化	鈍い橙	底部は平底、体部は短く内彎する。内外面一部黒色を呈す。体部内外面横ナデ、底部右回転糸切り未調整。	ほぼ完形	18
19	H-9-5	土師質環	①(10.9) ② 6.8 ④ 2.1	普通・酸化	明赤褐	底部は回転糸切りで、僅かに上底を呈す。体部は緩やかに外反し、口縁部に至る。底部回転糸切り。	ほぼ完形	18
20	H-9-1	土師質羽釜	①(18.0)	粗・酸化	赤褐	胸部は球形をなし、口縁部は内傾し、短い鐔は上向き、器形ゆがむ。口縁は内面横ナデ、胸部縦位のヘラ削り。	底部欠損 胸部1/4残	18
21	H-9-2	土師質環	① 9.6 ② 5.6 ④ 3.5	密・酸化	暗赤褐	底部は肉厚で、体部は短く外反する。体部は内外面横ナデ、底部回転糸切り未調整。	ほぼ完形	18
22	H-9-3	土師質高台付埴	① 16.4 ③(9.6) ④ 6.6	粗・酸化	明赤褐	高台は彎曲し足高。体部中位で内彎し、口縁部で外反する。細砂を含む。ロクロ整形、高台貼付後ナデ	高台部1/4欠損	18
23	H-10-1	刀子	⑤ 18.5 ⑥ 2.4 ⑦ 0.7			刃部12.3、茎 6.2、原形の長さを示す。全体的精化進む。重さ44.85g。	完形	28

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで（ ）は推定値を表す。

NO	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
24	H-10-2	土師器甕	①(20.0)②3.2	密・酸化	褐	不安定で小さな平底から直線的に立ち上がる。口縁部大きく外反し、内外面横ナデ、指頭圧痕あり。肩部外面横へら削り	胴部欠損	18
25	H-10-3	土師質高台付埴	①(13.0)③5.4 ④4.7	密・酸化	黒褐	体部は僅かに内彎しながら口縁に至る。体部内外面とも横ナデ。内面褐色を呈す。底部回転糸切り後付高台ナデ調整。	口縁部欠損	18
26	H-10-4	砥石	⑤19.6 ⑥14.2 ⑦9.6			四面使用痕あり。うち一面に細い溝が10条並ぶ。 重さ3280g		27
27	H-11#1	須恵器甕	①(56.0)	密・還元	青灰	口縁部は外反し、口唇部は外傾し幅広い面を持ち、上下に弱い凹帯が二条巡る。外面クロコ整形。	口縁部欠損	19
28	H-13-1	須恵器高台付皿	①(16.4) ②(7.6) ④3.1	密・還元	灰白	体部は僅かに内彎し、口唇部で大きく外反する。内面は部分的に釉を施す。	底部欠損	19
29	H-13-2	土鍾	⑤3.0 ⑥0.8	還元	黒	穿孔径 0.3 重さ1.93g	完形	28
30	H-13-3	土鍾	⑤(3.9) ⑥1.2	還元	黒褐	穿孔径 0.3 重さ4.11g	一部欠損	28
31	H-13-4	土鍾	⑤4.9 ⑥1.7	酸化	灰白	穿孔径 0.5 重さ10.99g	完形	28
32	H-13-5	土鍾	⑤4.1 ⑥1.2	還元	灰	穿孔径 0.3 重さ6.84g	完形	28
33	H-14-1	須恵器羽釜	①(18.2) 胴最大径(19.6)	粗・還元	灰	胴部は緩やかに内彎し口縁部は内傾して立ち、銚はやや上向に張り出す。内外面横位のナデ、銚難な貼り付け。	口～体部欠損	19
34	H-14-2	埴輪	②(12.4)	良・酸化	鈍い橙	突帯貼り付け、内外面縦方向刷毛目、円筒埴輪の基底部。部分的にナデ消し。	第一突帯欠損	19
35	H-14#1	埴輪	②(11.2)	良・酸化	鈍い橙	突帯貼り付け、透孔あり。内外面縦方向刷毛目、ナデ消し。円筒埴輪の基底部。		19
36	H-15-1	土師器甕	①(9.6)	普通・酸化	明赤褐	体部は内彎し口縁部に至る。口縁部は「く」の字状に外傾する口縁部内外面横ナデ、胴部不定方向のへら削り、内面ナデ。	口～胴部欠損	19
37	H-16-1	土師質高台付埴	①(12.8) ③6.2 ④5.3	粗・酸化	赤橙	高台を付した底部から体部は内彎し、口縁部で緩やかに外反する。体部外面斜位へらナデ調整。底部回転糸切り後ナデ。	口縁部一部欠損	19
38	H-16-2	須恵器埴	①(11.6) ③6.6 ④4.8	密・還元	灰	上げ底気味の底部から緩やかに外反し、口縁に至る。体部内面ナデ、外面釉、底部回転糸切り未調整、高台部はがれ。	口縁部一部欠損	19
39	H-16-3	土師質羽釜	③(6.6)	普通・酸化	明褐	平底の底部から直線的に体部に至る。体部外面へらナデ調整内面クロコ整形。	底～体部欠損	20
40	H-16-4	須恵器甕	①19.0 ④31.4	密・還元	鈍い橙	平底の底部より大きく内彎し胴部中位に立ち上がる。口縁部は外反し、口唇部に弱い凹帯が二条、内面に一条巡る。外面に顕著なクロコ痕、内面横ナデ。	胴、底部欠損	20
41	H-16-5	土師器甕	①(19.2) 胴最大径(21.4)	密・酸化	暗褐	「コ」の字状を呈す口縁部から胴部上半部で丸みを持ち下位ですぼまる。内外面口縁横ナデ、胴部上位と下位にへら削り内面横ナデ。	底部欠損 口～体部欠損	20
42	H-16-6	須恵器高台付埴	①(12.6) ③(6.7) ④4.7	普通・還元	灰白	高台部は直立し、体部は丸味を持ち口縁部で外反する。内外面ナデ。底部回転糸切り後付高台。	欠損	20
43	H-16-7	刀子	⑤19.2 ⑥2.5 ⑦1.6			原型の長さを示す。全体的に錆化が著しい。 刃部 13.6 茎 5.6 重さ 71.07g	完形	28
44	H-16-8	須恵器埴	①11.6 ②5.3 ④3.2	普通・還元	灰	平底の底部、体部は直線的に立ち、口縁部は緩やかに外反する。体部内外面横ナデ、底部は回転糸切り後未調整。	口縁部一部欠損	20
45	H-16-9	須恵器瓶	胴最大径 25.6	密・還元	灰白	胴部下位は内彎しながら立ち上り、胴中位から内傾する。胴部内面回転ナデ。胴部外面釉流れ痕あり。	胴部のみ	20
46	H-16-10	土師器甕	①(20.4) ④(15.2) 胴最大径 (20.9)	密・酸化	鈍い赤褐	口縁部は「く」の字状に外反し、胴部は緩やかに内彎する。内面は口縁部胴部とも横ナデ。外面は口縁部横ナデ胴部縦斜方向へら削り。	口～胴部欠損	20

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで（ ）は推定値を表す。

NO	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
47	H-16-11	須恵器高台付埴	①(13.6) ③ 6.8 ④ 5.3	普通・還元	灰	直立する高台から緩やかに外傾する体部。体部内外面ナデ、底部回転糸切り後付高台ナデ。	1/2残	21
48	H-16-12	土師質高台付埴	① 13.4 ③ 6.4 ④ 5.0	普通・酸化	鈍い褐	高台部は短く、体部は深く丸みを持って立ち上がり、口縁部で外反する。体部内外面ともナデ、底部回転糸切り後付高台	完形	21
49	H-16-13	土師質埴	①(12.2) ② 5.3 ④ 3.1	普通・酸化	鈍い赤褐	底部は僅かに上底を呈し、体部は内彎する。口縁部は外反する。底部回転糸切り後ナデ。	1/2残	21
50	H-16-14	土師質埴	①(14.0) ③ 6.4 ④ 5.5	普通・酸化	褐	底部は短い高台、体部は深く丸みを持って立ち上がり口縁部で外反する。ロクロ整形、底部回転糸切り付高台後ナデ。	1/4残	21
51	H-16-15	須恵器壺	胴最大径 (41.8)	密・還元	明青灰	胴部より大きく内彎しながら口頸部に至る。外面頸部平行叩き目、胴部に叩き目痕、内面上部ナデ、中位に強い青海波紋が見られる。	頸部胴部 1/2残	21
52	H-16-16	須恵器埴	①(13.4) ② 6.0 ④ 4.8	普通・還元	黄灰色 一部黒褐色	底部は上底で器肉が厚く段差を持つ。体部は内彎し、口縁部で外反する。ロクロ整形、底部糸切り未調整。	口縁一部 欠損	21
53	H-16-1	土師質羽釜	② 11.8	粗・還元	褐灰色 一部黒	平底の底部から胴下半部で直線的に立ち中位で彎曲する。内面横ナデ、輪積痕、外面横ナデ。一部不定方向ナデ。	底～胴上 半部	21
54	H-17-1	紡錘車	⑦ 1.5		滑石製	断面台形状。 上径(3.1) 下径(4.2) 孔径(0.8) 重さ22.25g	1/4残	
55	H-18-1	紡錘車	⑦ 0.9		滑石製	断面台形状、上下径面共に平坦、穿孔はほぼ均一削痕あり。 上径3.4 下径4.5 孔径0.8 重さ35.41g	完形	28
56	H-19-1	須恵器壺	② (11.0)	密・還元	灰	底部は平底、体部は直線的に立ち上がる。内外面ロクロ整形、底部内外面に強いナデ調整。	底部1/2残	21
57	H-19-2	土師質埴	①(15.0) ③ 6.7 ④ 5.3	普通・酸化	鈍い赤褐	底部は高台付、体部は下位に影らみを持つ。口縁部は外反する。体部内外面横ナデ、底部回転糸切り後ナデ調整。	口縁部1/2 残	22
58	H-19-3	土師器埴	①(12.6) ③(8.2) ④ 3.3	普通・酸化	明赤褐	底部は平底、体部は直線的に開く。体部内外面横ナデ。	底部口縁 部一部欠	22
59	H-20-1	土師質羽釜	①(28.6)	粗・酸化	鈍い黄褐	彎曲気味の胴部からやや下向きの跨を経て直立して口縁部に至る。外面横ナデ貼り付け丁寧。	口～胴1/2 残	22
60	H-20-2	土師質埴	①(8.6) ② 4.8 ④ 1.9	密・酸化	明赤褐	底部は平底、体部は開き気味で短い。体部内外面横ナデ、底部糸切り後ナデ調整。	口縁部1/2 残	22
61	H-20-3	土師質埴	① 8.0 ② 4.8 ④ 1.8	密・酸化	褐灰	直線的に外反する短い体部。体部内外面横ナデ、底部回転糸切り未調整。	ほぼ完形	22
62	H-20-4	土師質埴	①(9.0) ③ 5.4 ④ 3.3	密・酸化	明褐	底部は外傾して開く、高くしっかりした高台、体部は短く外反する。体部内外面回転ナデ。	口縁部1/2 残	22
63	H-20-5	土師質埴	①(8.8) ② 4.6 ④ 1.7	密・酸化	赤褐	体部は短く直線的に外傾し、内外面横ナデ。底部回転糸切り未調整。	1/2残	22
64	H-20-6	土師質埴	① 8.2 ② 4.6 ④ 1.6	普通・還元	灰白	底部はわずかに上底、体部は短く内外面ナデ、底部回転糸切り未調整。	完形	22
65	H-20-7	土師質埴	① 9.0 ② 5.0 ④ 1.8	密・酸化	暗褐	底部は平底、体部は短く開く。内外面横ナデ、底部回転糸切り未調整。	口縁部1/2 残	23
66	H-20-1	土師質埴	①14.6 ②(7.1) ④ 4.2	普通・酸化	橙	上げ底気味の底部、直線的な体部、緩やかに外反する口縁部、体部内外面ロクロ整形、底部回転糸切り。	1/2残	23
67	H-20-12	円筒埴輪	②12.5	良・酸化	赤橙	突帯貼り付け、透孔2、外面縦方向刷毛目、内面縦方向刷毛目、ナデ消し。基底部内面に凹みあり。	第2突帯 1/2残	23
68	H-20-13	土師器壺	①(29.0)	粗・酸化	暗赤褐	胴部上半部でわずかに内彎し、口縁部は強く外反し肉厚。口頸部内外面指ナデ。	1/2残	23

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで（ ）は推定値を表す。

NO	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
69	H-22-1	須恵器高台付皿	①(13.0) ③(6.9) ④ 2.8	普通・還元	黄灰	高台を付した底部から直線的に外反する体部、口縁部は緩やかに外反する。体部ロクロ整形、底部回転系切り未調整。	1/2弱残	23
70	H-22-2	土師質環	①(12.2) ②(8.0) ④(3.1)	密・酸化	鈍い橙	底部は平底、体部は彎曲気味、口唇部で僅かに内彎する。	3/4残	23
71	H-22-3	土鍾	⑤(5.1) ⑥1.5	酸化	灰白及び黒	穿孔径0.5 重さ9.31g 部分的に黒色を呈する。	一部欠損	28
72	H-22-4	須恵器環	①(12.8) ② 6.2 ⑥ 5.0	普通・還元	明青灰	底部は僅かに上底、体部は彎曲する。底部回転系切り。	口縁部1/2残	23
73	H-22-5	土鍾	⑦(2.9) ⑧(1.5)	還元	褐灰	穿孔径0.5 重さ4.41g	1/2残	28
74	H-22B1	須恵器環	①(12.5) ②(7.3) ④ 3.1	普通・還元	灰白	底部は平底。体部は内彎し、口縁部で外反する。体部内外面横ナデ、底部回転系切り未調整。	1/2残	23
75	H-22B2	須恵器高台付埴	①(15.4) ③ 7.9 ④ 5.8	粗・還元	灰一部 暗灰色	高台を付した底部から緩やかに外反し口縁部に至る。体部内外面横ナデ外面ロクロ痕、底部は回転系切り後ナデ調整。	口縁一部欠損	24
76	H-22B3	須恵器環	①(12.9) ② 5.5 ④ 3.5	普通・還元	灰色一部 黒色	底部は平底で、体部は僅かに内彎し、口縁部で外反する。体部内外面横ナデ底部回転系切り後未調整。	口縁部一部欠損	24
77	H-22B4	須恵器高台付埴	①(14.0) ③ 7.6 ④ 5.6	普通・還元	灰一部 褐色	底部からわずかに膨らみを持ち口縁部で外反する。体部外面に顕著なロクロ整形、底部回転系切り。	3/4残	24
78	H-24-1	土師器甕	④(4.3)	普通・酸化	明赤褐	中位で屈曲して緩やかに広がる台付甕の台部のみ、内外面とも丁寧な横ナデ調整。	脚台部残	24
79	H-24-2	須恵器環	①(12.4) ② 6.0 ④ 4.0	普通・還元	灰白	底部は段をなし器肉厚く、体部は中位に膨らみ、器肉は薄い口縁部は外反する。体部外面ロクロ整形、底部回転系切り。	口縁部1/2残	24
80	H-24-3	土鍾	⑥ 2.2 ⑦ 4.3	酸化	灰白	穿孔径0.2 重さ9.88g	1/2残	24
81	H-25-1	須恵器環	①13.4 ② 6.4 ④ 4.2	粗・還元	灰褐	体部は僅かに内彎し、口縁部で外反する。口縁部体部とも内外面ナデ、底部回転系切り未調整。	ほぼ完形	24
82	H-25-2	土師器環	①(13.0) ②(8.0) ④ 3.1	普通・酸化	鈍い赤 褐	平底の底部から緩やかに内彎し、わずかに口縁部で外反する。口縁部内外面ナデ、体部指押さえ。	1/2残	24
83	H-25-3	砥石	⑤12.6 ⑥10.7 ⑦ 4.1			輝石安山岩。両面とも中央部に細い溝が並ぶ、使用痕あり。重さ740g		27
84	H-25-4	擦石	⑤12.1 ⑥10.3 ⑦ 3.4			輝石安山岩。扁平な自然石。重さ670g		27
85	H-26	土鍾	⑤(4.4) ⑥1.4	酸化	鈍黄褐	穿孔径0.5 重さ6.18g	一部欠損	28
86	H-27-1	土師器環	①(12.2) ②(6.8) ④ 4.0	普通・酸化	鈍い橙	底部と体部は屈曲し器肉変化あり。口縁部内外面横ナデ、底部内面ナデ調整。	口縁部一部欠損	24
87	H-27-2	須恵器高台付埴	①(16.0) ③ 6.6 ④ 5.1	粗・還元	灰	底部は短い高台、体部は僅かに丸みを持って立ち上がり口縁部で外反する。ロクロ整形、底部回転系切り付高台ナデ。	口～底1/4残	25
88	H-28B1	土師器甕	①(19.0)	密・酸化	暗褐	口縁部は短く外反し、内外面横ナデ、外面肩部斜位のへら削り、内面ナデ。	1/2残	25
89	H-33B1	土鍾	⑤ 5.1 ⑥ 2.6	酸化	灰白	穿孔径0.45 重さ32.39g	完形	28
90	W-1-1	土師質埴	①(13.2) ③(6.0) ④ 4.4	密・酸化	暗赤褐	体部は直線的に立ち上がり、口縁部で外反する。体部ナデ調整。	1/2残	25
91	W-1-2	須恵器高台付埴	①(12.5) ③ 5.0 ④ 4.4	粗・還元	灰	短い高台から直線気味の体部、口縁は肥厚。口縁と体部は内面ナデ、底部回転系切り、雑な付高台。	ほぼ完形	25
92	W-13-1	土師質埴	①(10.8) ② 6.6 ④(2.4)	普通・酸化	鈍い橙	内外面ロクロ整形。底部回転系切り未調整。	底～体残	25
93	W-20-1	須恵器高台付埴	①(14.2) ③ 4.7 ④ 5.7	粗・還元	灰白	体部は彎曲気味に立ち上がり口縁部で緩く外反する。口縁部体部とも内外面ナデ。	高台部欠損1/2残	25

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで( )は推定値を表す。

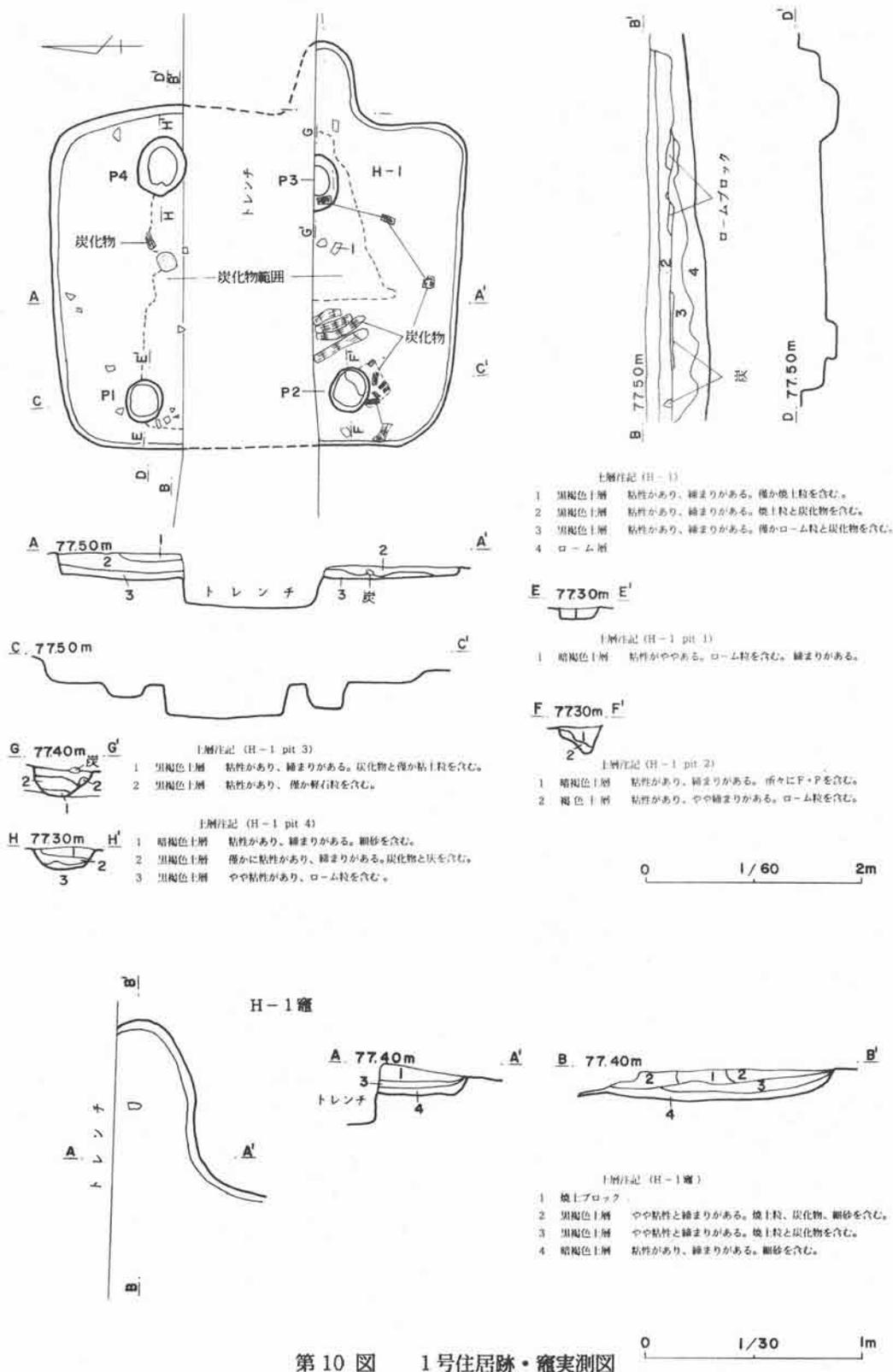
N0	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
94	I-2-1	須恵器高台付埴	③(8.8) ④(2.7)	普通・還元	灰	高台部は「ハ」字状に開く。底部回転糸切り後付高台。	台部残	26
95	D-5-1	須恵器	④(17.4) 胴最大径(24.8)	普通・酸化	明赤灰	胴部は緩やかに下半部より彎曲して立ち上がり上半部で内彎する。外面横位ナデ、胴部に沈線輪積痕あり、内面横位ナデ調整。胴部の一部は、鈍い橙色を呈す。	残	26
96	D-2-1	土師器坏	①(12.1) ②(7.5) ④ 3.3	普通・酸化	明赤褐	平底の底部から緩やかに彎曲し体部に至る。口縁部は僅かに外反する。内外面横ナデ。	弱残	25
97	D-2-2	土師器坏	①(12.0) ② 7.8 ④ 3.5	密・酸化	鈍い褐	僅かに丸みを帯びる底部から緩やかに開く体部を持つ。体部内外とも丁寧なナデ調整。	口縁部残	25
98	BM-139* 1	石斧	⑤13.5 ⑥ 5.3 ⑦ 2.1			頁岩。片面に自然面を残す。 重さ210g	完形	28
99	BL-219* 一括1	鉄製品	⑤14.9 ⑥1.4			錆化が進み用途不詳。全体に大きく彎曲する。 重さ21.40g		28
100	BT-179* 一括1	土鍾	⑤ 3.5 ⑥1.0	還元	黒	穿孔径0.4 重さ3.31g	完形	29
101	BU-159* 1	石織	⑤ 2.2 ⑥ 1.5 ⑦ 0.3			黒曜石。凹基無茎織。 重さ1.07g	完形	29
102	CM-69* 1	土師器甕	①(19.0) 胴最大形(21.0)	普通・酸化	鈍い褐	口縁部は「コ」の字状を呈し胴部上半で緩やかに内彎する口縁部ヘラナデによる沈線。口縁部は内外面横ナデ、胴部外面横、斜位のヘラ削り、胴部内面ナデ。	口～胴残	26
103	CM-79* 1	須恵器高台付皿	①(13.6) ③ 6.2 ④ 3.3	粗・還元	灰黄	体部は緩やかに外反する。口縁部は大きく、体部内外面横ナデ、底部回転糸切り後付高台。	残	26
104	ED-159* 1	土師器高台付埴	①(15.0) ③(7.0)	粗・還元	暗オリ 一ブ灰	体部は中位に丸みを持ち口縁部で開き気味に外反する。口～体部内外面横ナデ、底部回転糸切り、高台部はがれ欠損。	口～体部残	26
105	ED-159* 2	土師器埴	①(14.8) ③ 6.6 ④(5.0)	普通・還元	灰黄	底部からわずかに膨らみを持ち口縁部で外反する。体部外面にロクロ整形、底部回転糸切りナデ。	口縁部残	26
106	EFG-159* 1	紡錘車	⑦(1.6)			滑石製。 上径(2.9) 下径(4.3) 孔径(0.7) 重さ26.51g	残	28
107	EH-209* 1	土師器坏	①(11.8) ②(8.9) ④ 3.4	普通・酸化	明赤褐	平底の底部から直線気味に立ち上がり口縁部に至る。底部下位指ナデ調整、中位横ヘラナデ調整、口縁部内外面横ナデ、底部内面ナデ調整。	残	26
108	EH-209* 1	土師器坏	①(12.0) ② 6.0 ④ 3.2	密・酸化	明赤褐	底部は指頭王痕と下位に指ナデあり。体部は一旦括れて口縁部で外反する。口縁部内外面横ナデ。	口縁部一部欠損	27
109	EH-219* 1	土師器坏	①(12.4) ② 9.5 ④ 3.5	普通・酸化	明赤褐	底部は丸底で、体部は内彎し、口縁部は外反する。底部内面ナデ、外面ヘラ削り口縁部内外面横ナデ。	口縁部一部欠損	27
110	E-J-229* 1	須恵器短頸壺	①(8.9) 胴最大径(22.2)	密・還元	青灰	胴部で内彎しながら立ち上がり、肩部で大きく張り出す。頸部は短く直立する。体部外面ナデ、内面ロクロ痕。	胴残頸部一部残	27
111	EJ-209* 1	土鍾	⑤(4.1) ⑥1.6	酸化	灰白	穿孔径0.5 重さ12.20g	一部欠損	29
112	EK-229* 1	土鍾	⑤ 3.5 ⑥ 0.9	酸化	浅黄黒	穿孔径 0.2 重さ2.72g	完形	29
113	FJ-09* 1	土師器坏	①(12.4) ②(6.5) ④ 3.1	普通・酸化	鈍い橙	丸底気味の底部。口縁部は内彎して立ち上がりやや内傾する。体部内外面横ナデ。	口縁部残	27
114	LC-89* 一括	土鍾	⑤ 4.4 ⑥1.7	酸化	淡い黄	穿孔径0.5 重さ10.26g	完形	29
115	LC-99* 1	鉄滓	⑤ 10.0 ⑥ 7.7 ⑦ 2.2		地肌暗 赤褐	表面中央に彎曲をなし気泡を認む。裏面は滴下状表裏全体的に錆付着。重さ240g		28

註：法量は①口径②底径③高台径④器高⑤長さ⑥幅⑦厚さをcmで( )は推定値を表す。

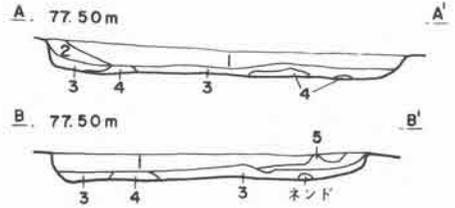
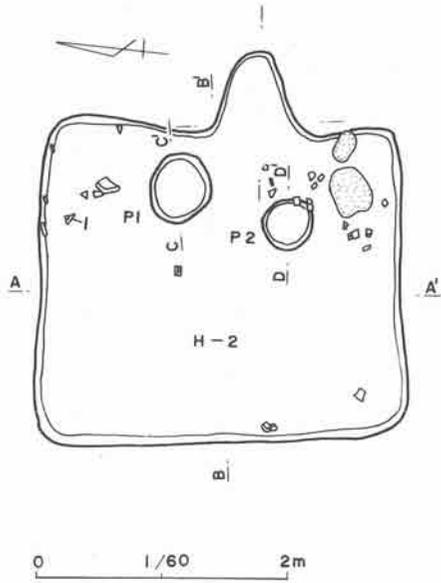
NO.	出土場所	種類	法量	胎土焼成	色調	器形・成形・整形の特徴	遺存備考	図版
116	LD-89'一括	土鍾	⑤(5.0) ⑥1.6	還元	褐灰	穿孔径0.6 重さ10.11g	一部欠損	29
117	B.C.E.F区一括	短冊形打製石斧	⑤ 9.7 ⑥ 3.6 ⑦ 1.4			頁岩。細身で刃部でわずかに広がり丸みを持つ。自然面を残し表面は灰色を呈している。重さ53.62g		28
118	E区一括1	紡錘車		酸化	暗赤褐	断面梯形状の土製防錘車。 上径2.9 下径4.7 重さ16.65g	1/4残	28
119	E区一括2	土鍾	⑤ 4.2 ⑥1.6	酸化	淡い黄	穿孔径 0.3 重さ8.79g 一部黒色を呈す。	完形	29
120	E区一括3	土鍾	⑤ 5.7 ⑥1.7	酸化	明褐	穿孔径0.5 重さ13.07g	完形	29
121	E区一括4	土鍾	⑤ 4.2 ⑥1.9	還元	褐灰	穿孔径0.5 重さ8.94g	完形	29
122	L区一括	砥石	⑤ 6.3 ⑥ 4.1 ⑦ 2.1			楕円形。全面使用痕あり。穿孔有り。 重さ90.69g		28
123	I-49'試	土師器甕	①(22.0)	普通・酸化	明赤褐	胴部は上位に最大径を持つ。頸部は括れ口縁部で外反する。口唇部外面に一条の沈線有り。口縁部内外面ナデ。内面頸～胴部横方向刷毛ナデ。	口縁部～胴部1/4残	27
124	W-139'試	土師器甕	①(18.1) ④(5.5)	密・酸化	赤褐	「コ」の字状の口縁。内面横位のナデ、外面へラ痕明瞭。	口～胴部	27
125	試掘一括	土鍾	⑤ 2.0 ⑥2.2	還元	灰褐	穿孔径0.3 重さ9.71g	完形	29
126	I、L区一括	土鍾	⑤(4.3) ⑥1.8	還元	灰褐	穿孔径0.5 重さ13.71g	一部欠損	29



遺構実測図 1



第 10 図 1号住居跡・竈実測図



土層注記 (H-2)

- 1 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かにローム粒と炭化物を含む。
- 2 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かにC軽石粒と炭化物を含む。
- 3 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。ロームブロックを含む。
- 4 ローム層 (床面)
- 5 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒を多く含む、炭化物も含む。



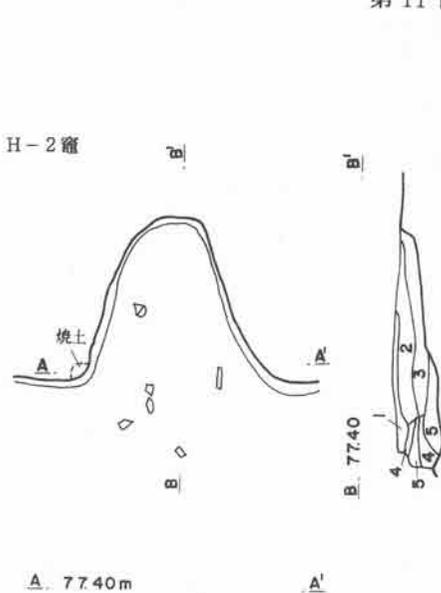
土層注記 (H-2 pit 1)

- 1 褐色土層 粘性があり、締まりがある。炭化物、粘土、ローム粒を含む。

土層注記 (H-2 pit 2)

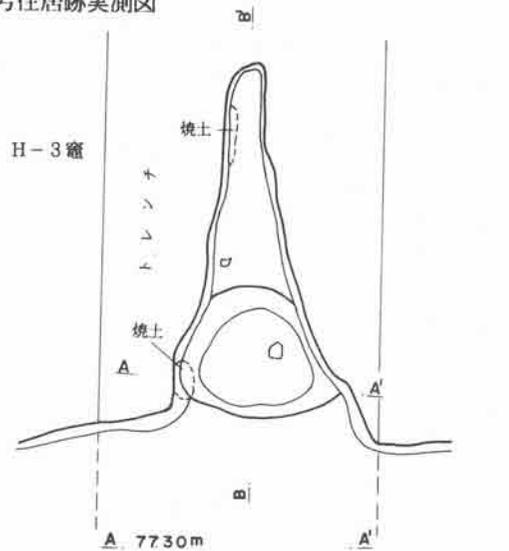
- 1 黒褐色土層 粘性があり、僅かにローム粒を含む。

第 11 図 2号住居跡実測図



土層注記 (H-2 竈)

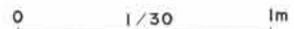
- 1 褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒と細砂を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒を多く含む。細砂も含む。
- 3 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒、炭化物、細砂を含む。
- 4 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。細砂と僅かに炭化物を含む。
- 5 黒褐色土と砂質ロームの混土層



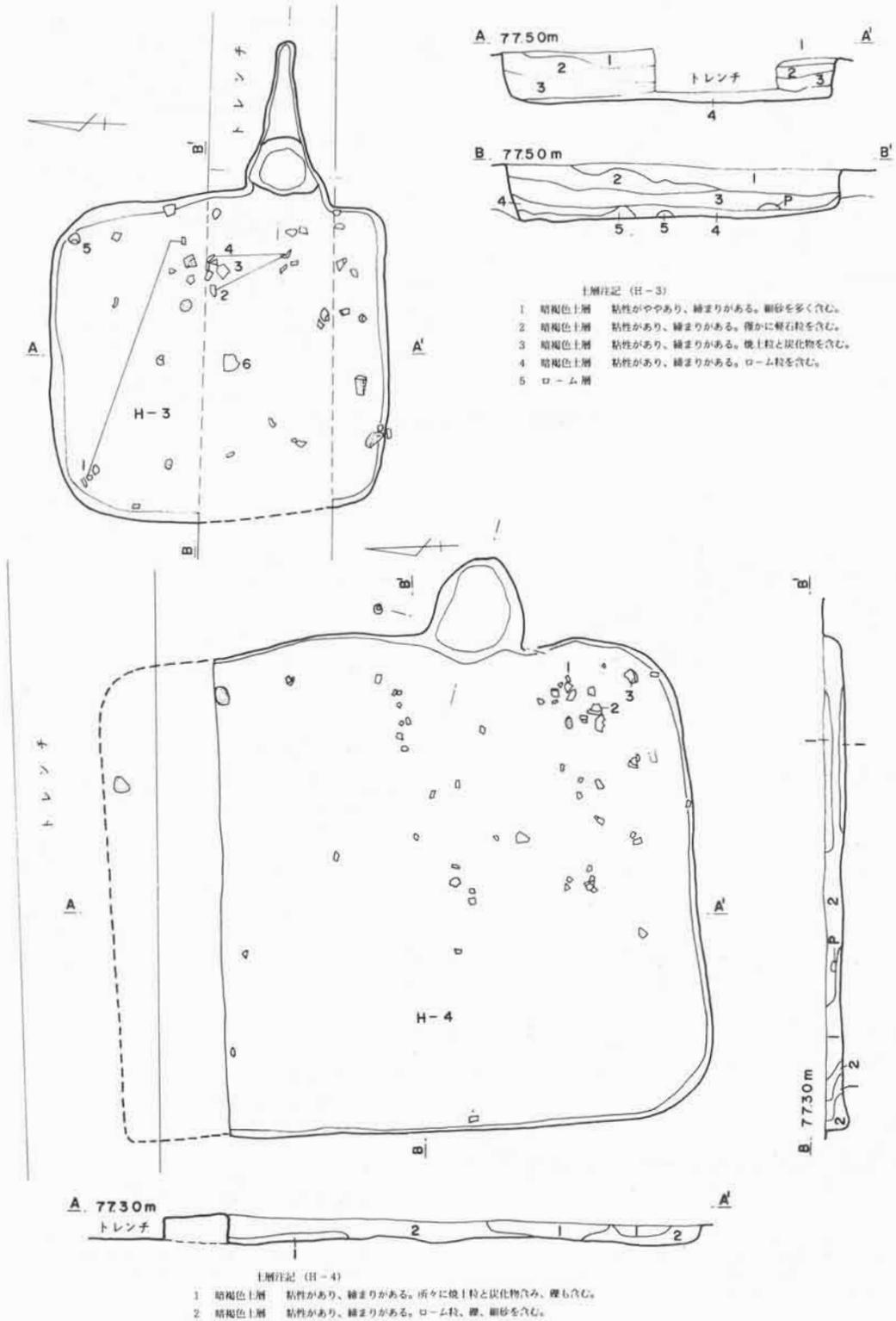
土層注記 (H-3 竈)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに焼土粒を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒と炭化物を多く含む。細砂も含む。
- 3 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。ローム粒と細砂を含む。
- 4 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに焼土粒と炭化物を含む。細砂も含む。

第 12 図 2号・3号住居跡竈実測図

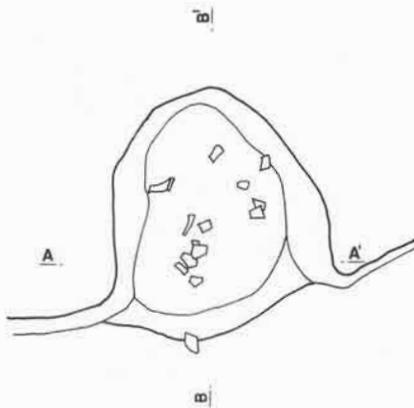


遺構実測図 3

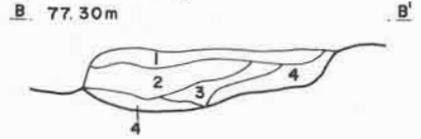
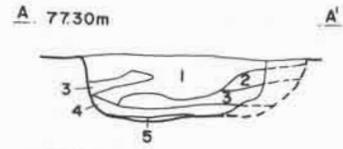


第 13 図 3号・4号住居跡実測図

0 1/60 2m



H-4窟

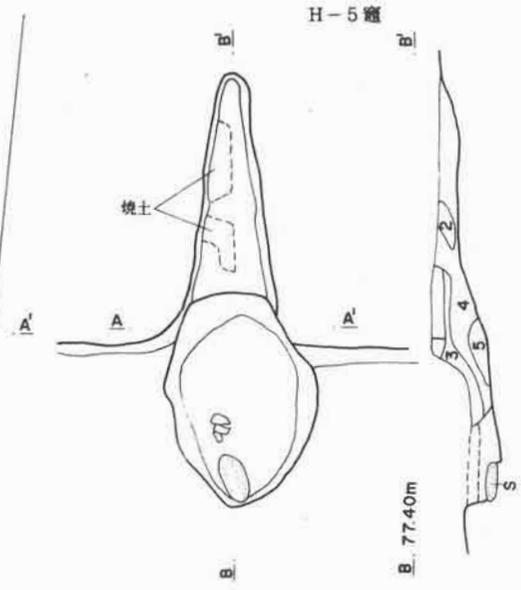
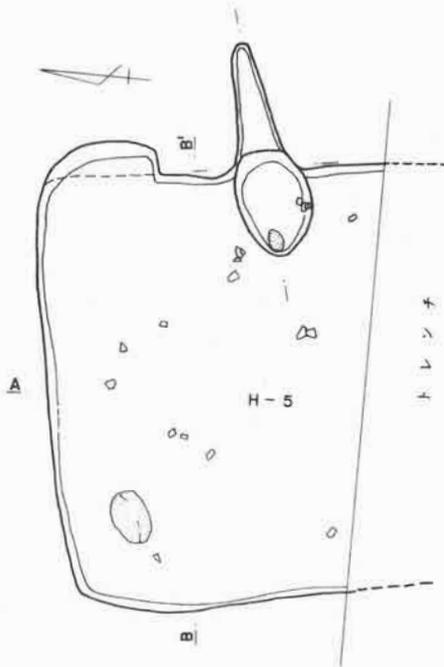


上層注記 (H-4窟)

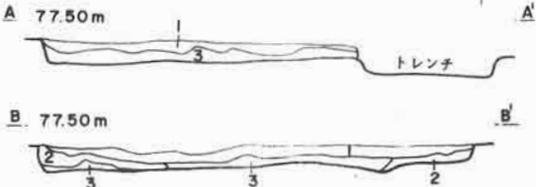
- 1 褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに焼土粒、ロームブロック、細砂を含む。
- 3 褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土ブロック、ローム粒、細砂を含む。
- 4 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土ブロック、ローム粒、細砂を含む。
- 5 灰層

0 1/30 1m

第 14 図 4号住居跡窟実測図



H-5窟

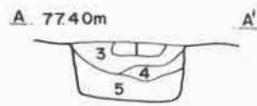


上層注記 (H-5)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに焼土粒と細砂を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。ロームブロック、細砂を含む。
- 3 暗褐色土とロームの混土層 粘性があり、締まりがある。

0 1/60 2m

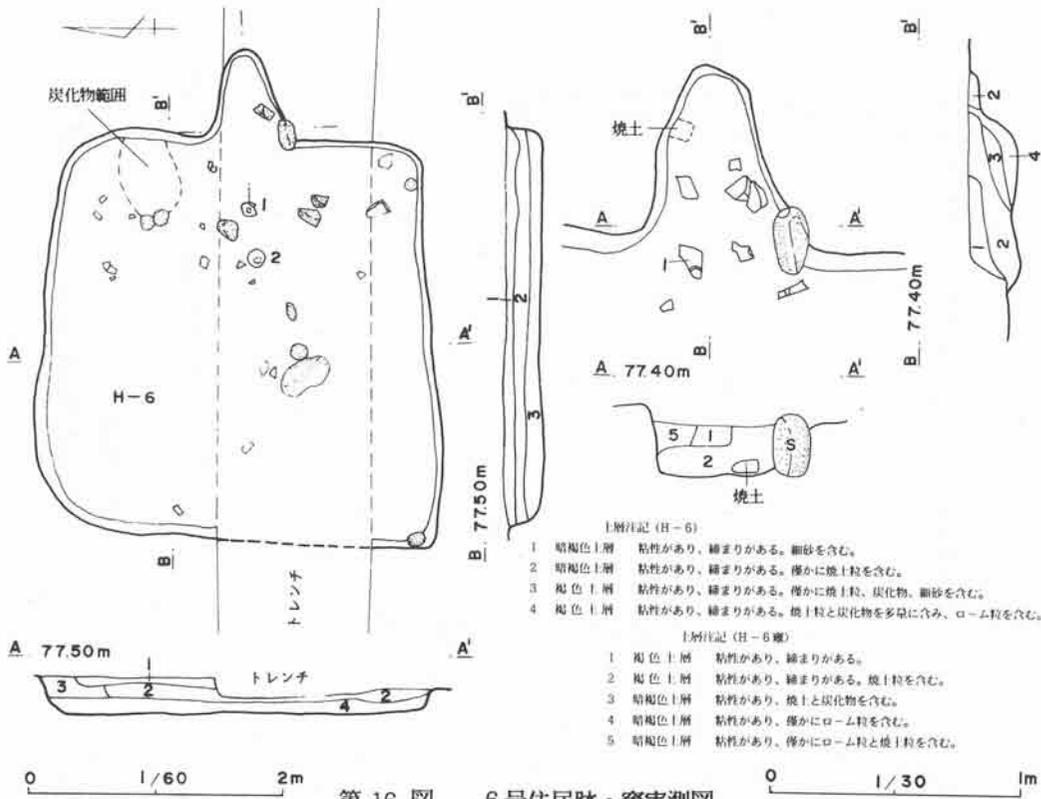
第 15 図 5号住居跡・窟実測図



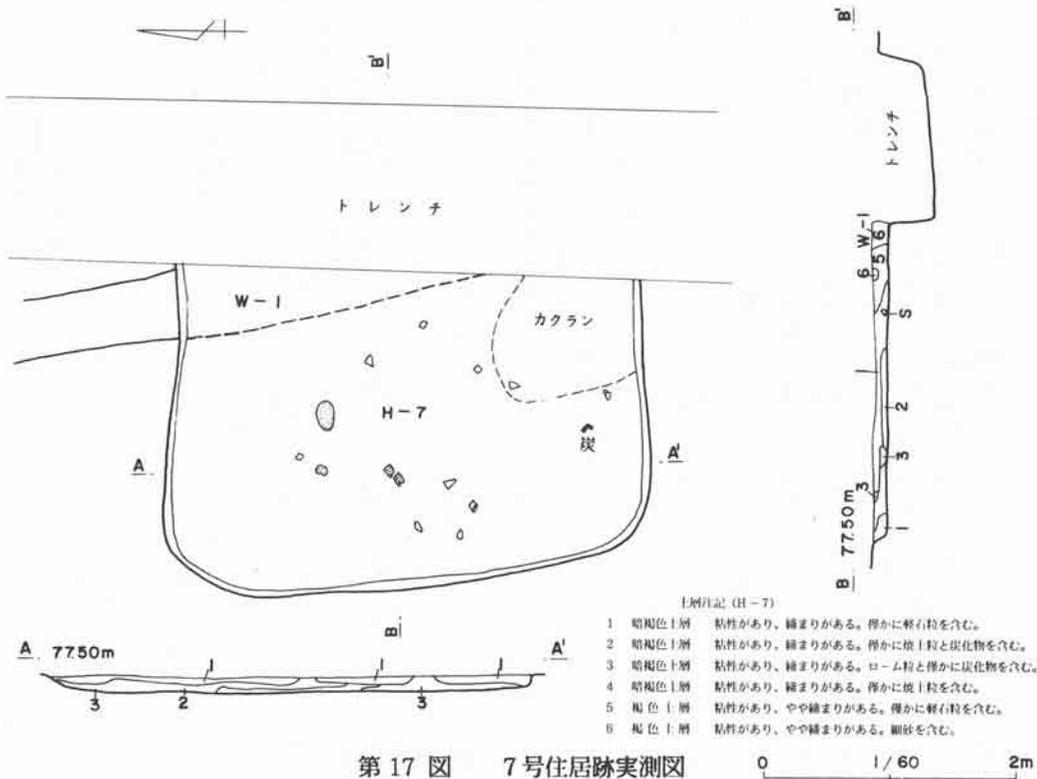
上層注記 (H-5窟)

- 1 褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒と細砂を含む。
- 2 焼土ブロック
- 3 褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒と炭化物を含む。
- 4 褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに焼土粒と炭化物を含む。
- 5 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。炭化物とローム粒を含む。

0 1/30 1m

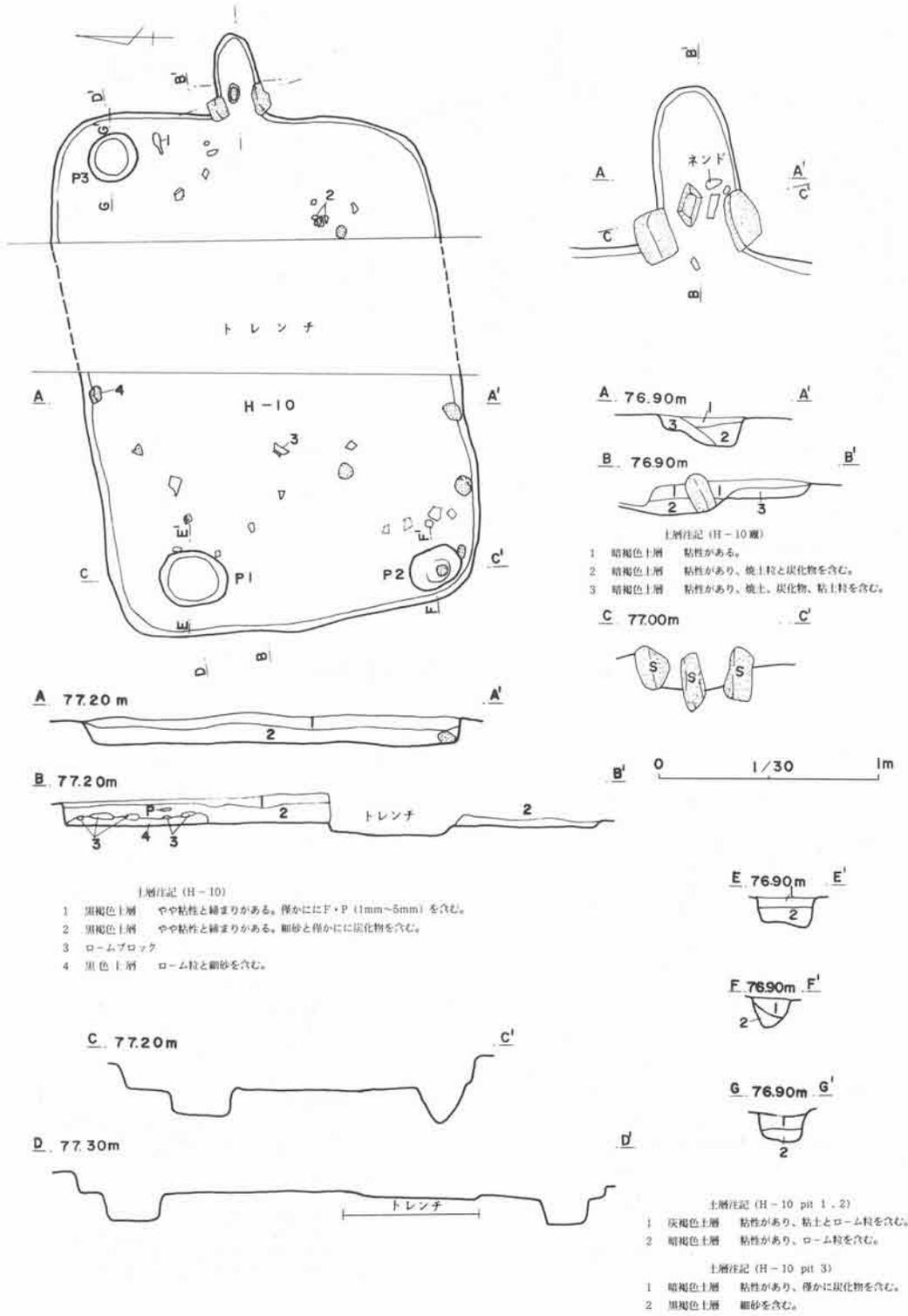


第16図 6号住居跡・竈実測図

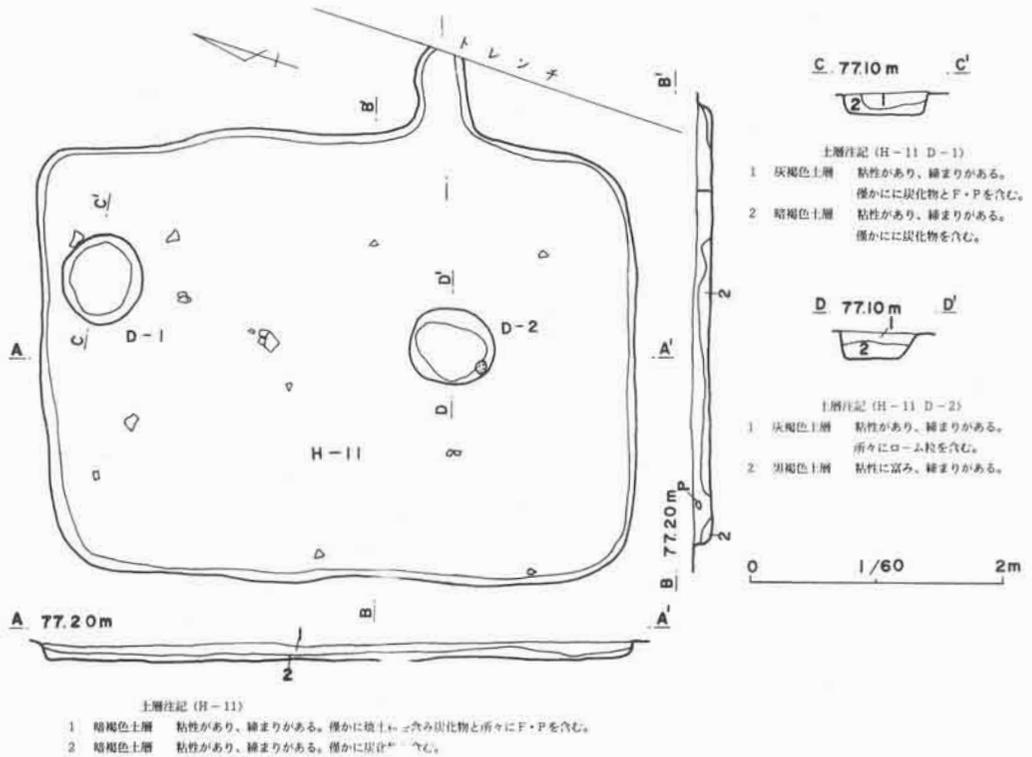


第17図 7号住居跡実測図

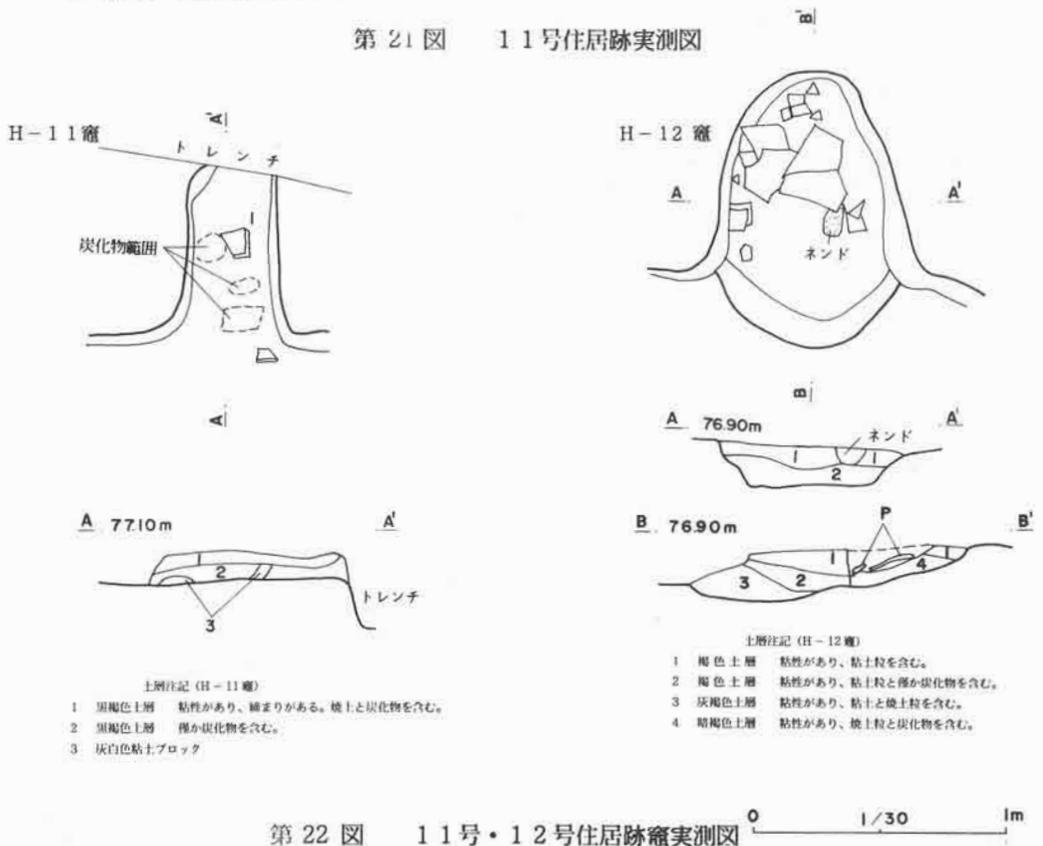




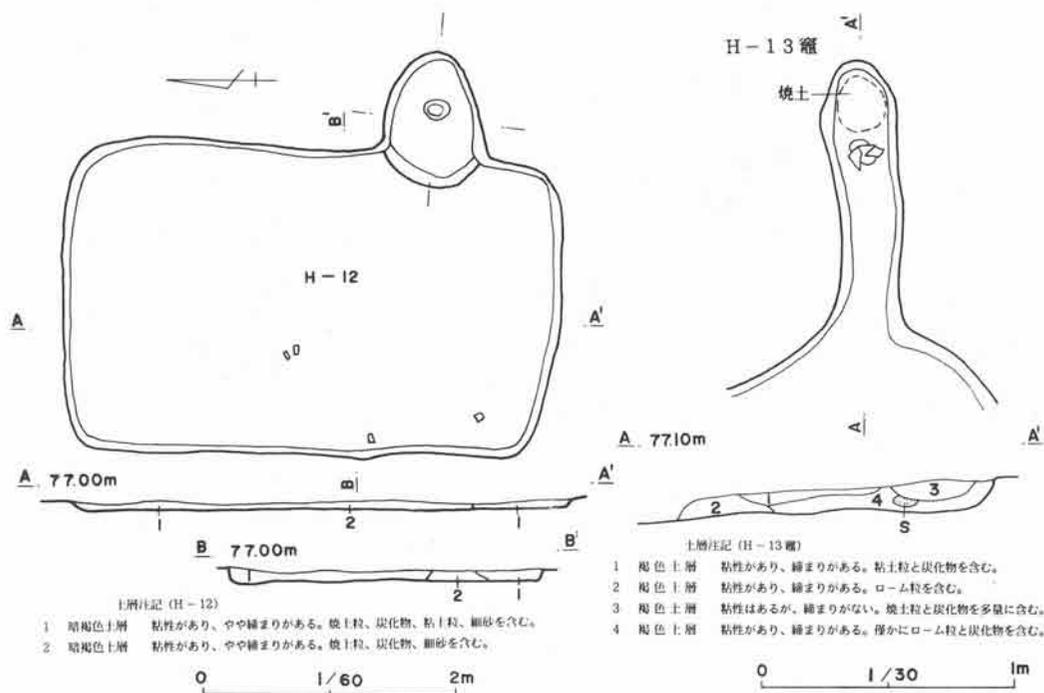
第20図 10号住居跡・竈実測図



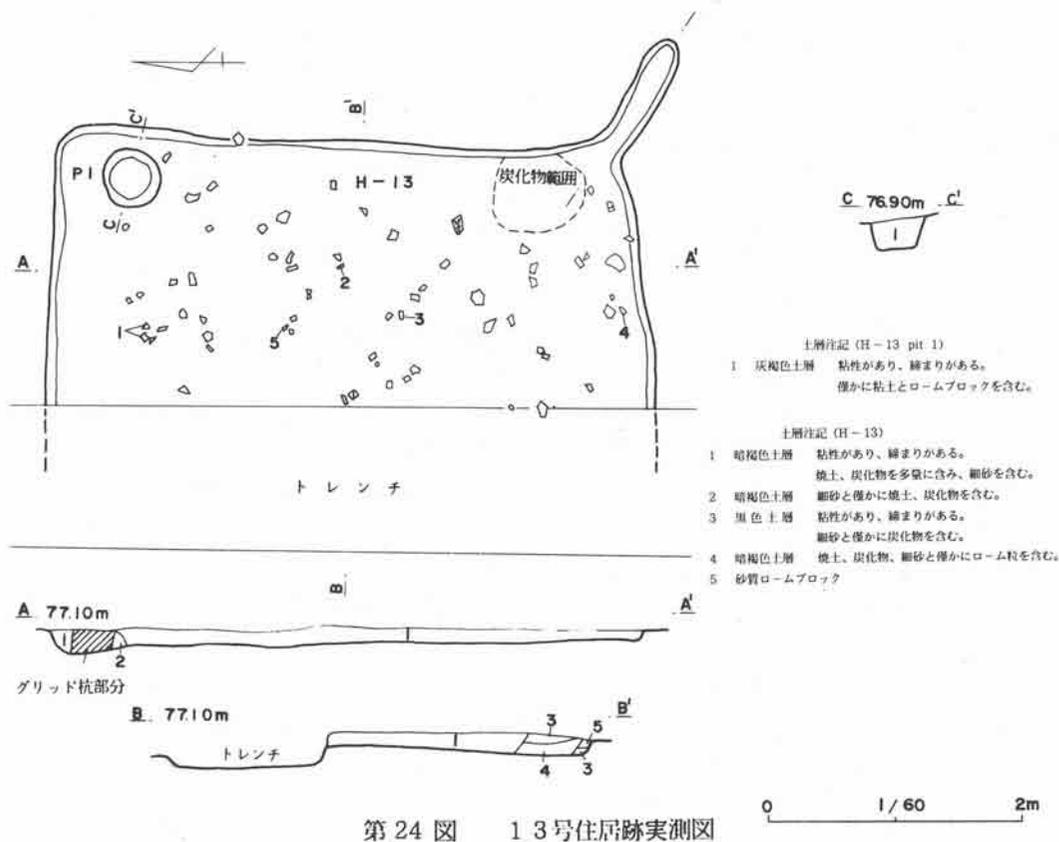
第 21 図 11号住居跡実測図



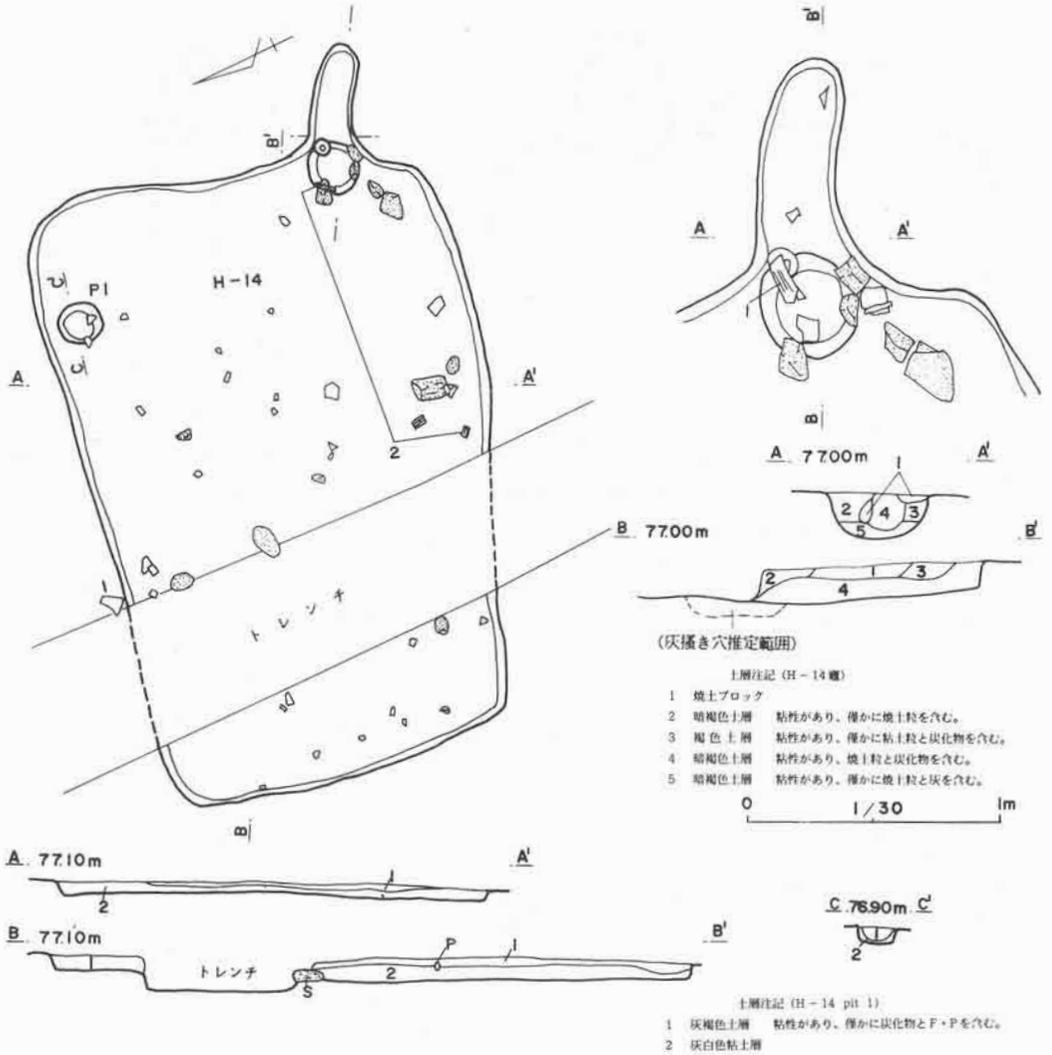
第 22 図 11号・12号住居跡実測図



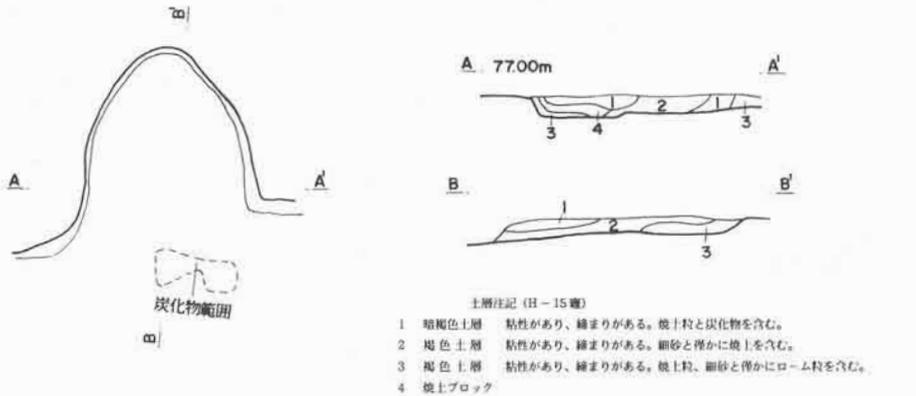
第 23 図 12号住居跡・13号住居跡竈実測図



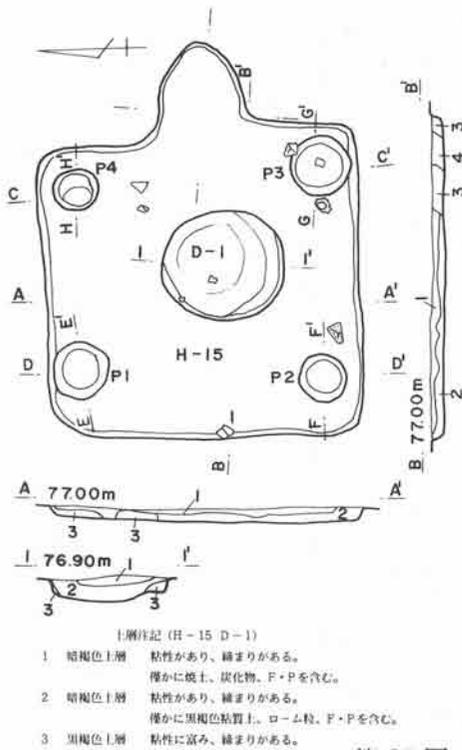
第 24 図 13号住居跡実測図



第 25 図 14号住居跡・竈実測図 0 1/60 2m



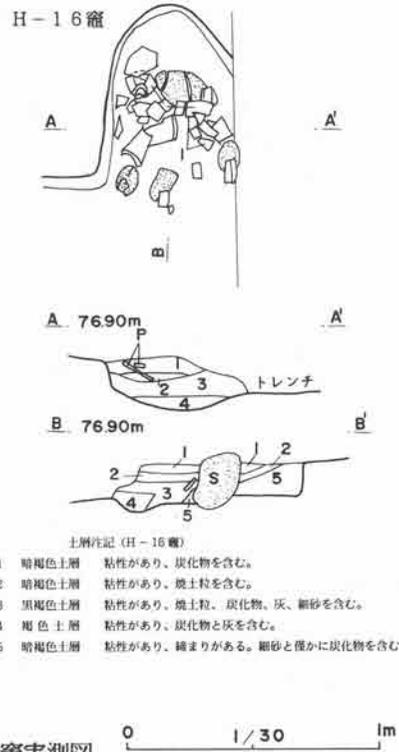
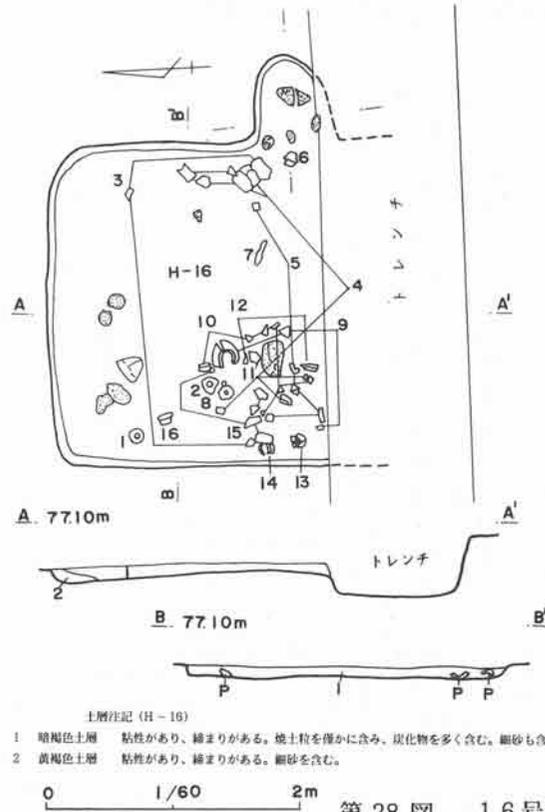
第 26 図 15号住居跡竈実測図



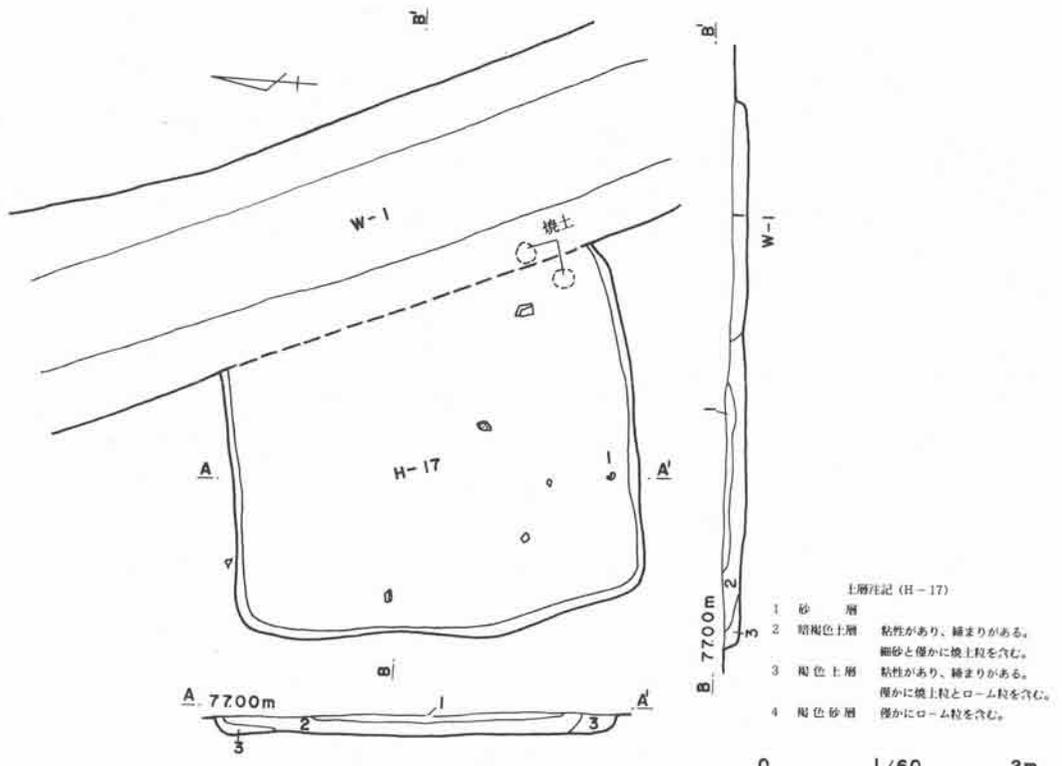
第 27 図



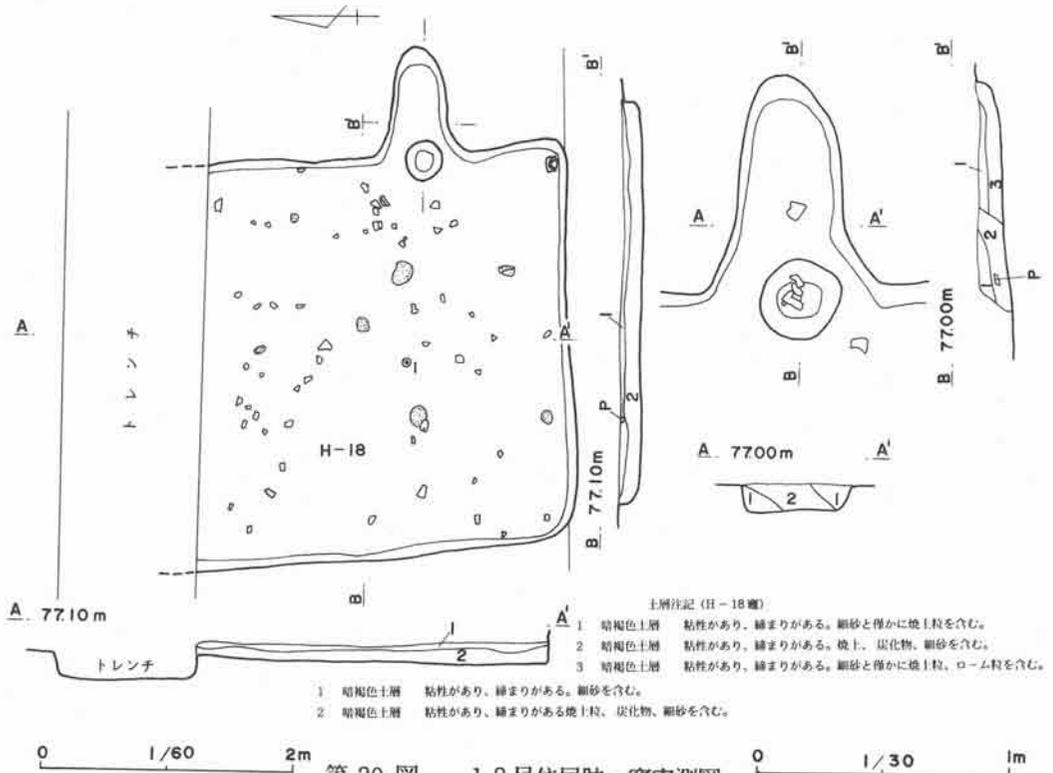
第 28 図 15号住居跡実測図



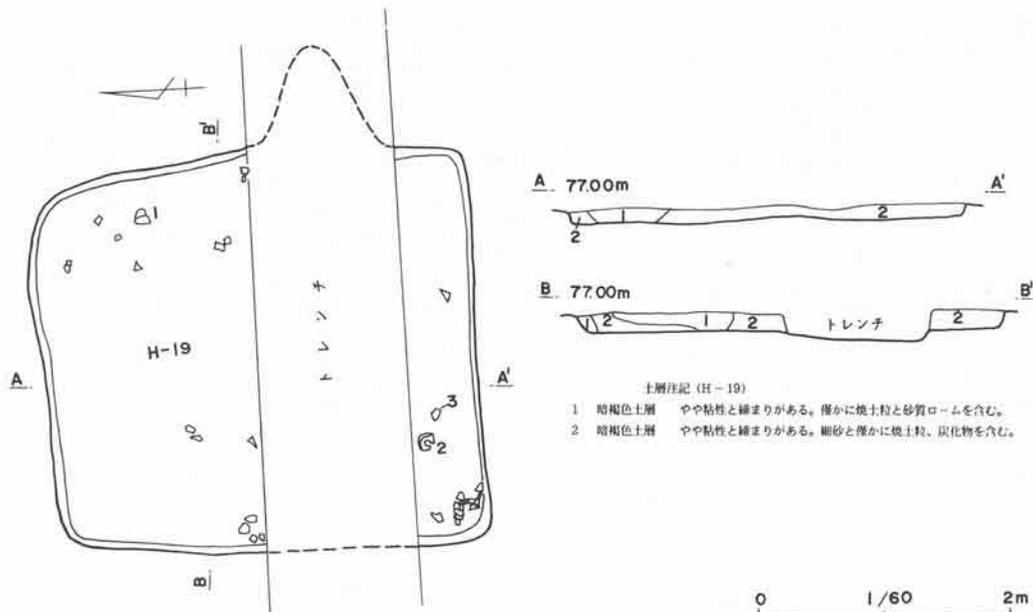
第 28 図 16号住居跡・竈実測図



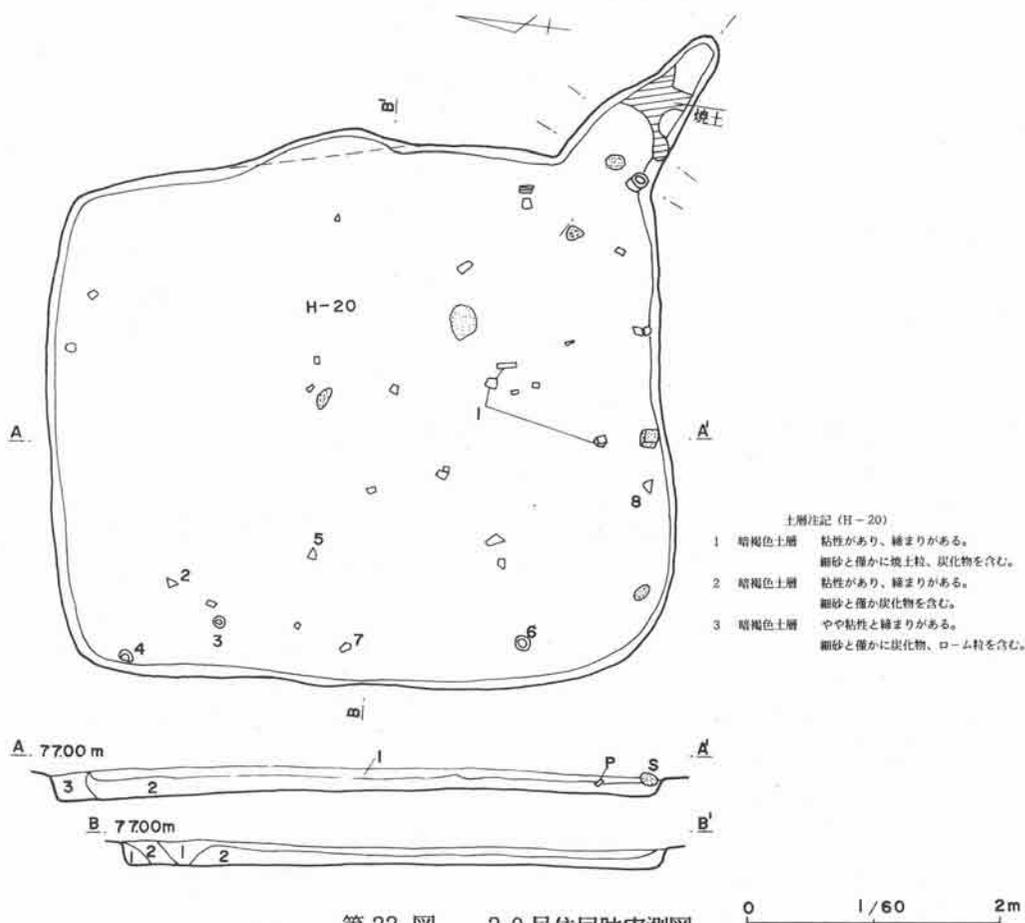
第29図 17号住居跡実測図



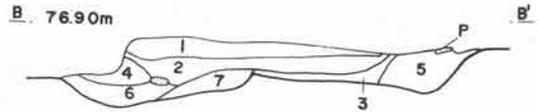
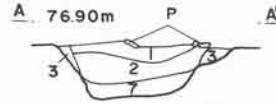
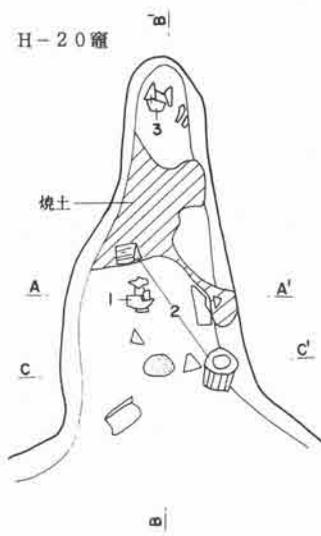
第30図 18号住居跡・竈実測図



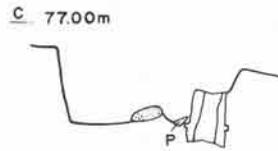
第 31 図 19号住居跡実測図



第 32 図 20号住居跡実測図

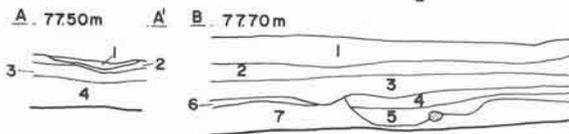
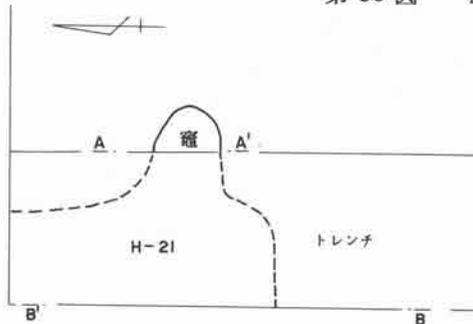


- 土層注記 (H-20 竈)
- 1 褐色土層 粘性があり、締まりがある。炭化物を含む。
  - 2 褐色土層 粘性があり、僅かに焼土粒を含む。
  - 3 焼土ブロック
  - 4 褐色土層 粘性があり、僅かに焼土粒と炭化物を含む。
  - 5 暗褐色土層 粘性があり、細砂を含む。
  - 6 暗褐色土層 粘性があり、焼土、炭化物、灰を含む。
  - 7 暗褐色土層 粘性があり、僅かに焼土粒を含む。



0 1/30 1m

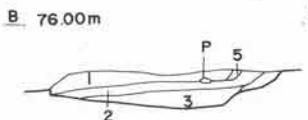
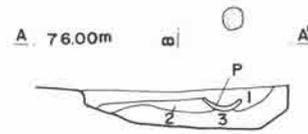
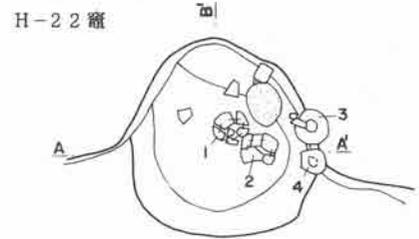
第 33 図 20 号住居跡竈実測図



- 土層注記 (H-21 竈)
- 1 褐色土層 焼土粒、炭化物、灰を含む。
  - 2 褐色土層 僅かに軽石粒を含む。
  - 3 黒褐色土層 やや粘性と締まりがある。
  - 4 黄褐色土層 ローム粒を含む。

- 土層注記 (H-21)
- 1 耕作土
  - 2 褐色土層 粘性と締まりが余りなく、細砂を含む。
  - 3 暗褐色土層 粘性と締まりが余りなく、焼土粒、炭化物と僅かにF・Pを含む。
  - 4 暗褐色土層 粘性と締まりが余りなく、僅かに焼土粒、炭化物、F・Pを含む。
  - 5 暗褐色土層 粘性と締まりが余りなく、ローム粒を含む。
  - 6 黒褐色土層 やや粘性と締まりがある。
  - 7 黄褐色土層 ローム粒を含む。

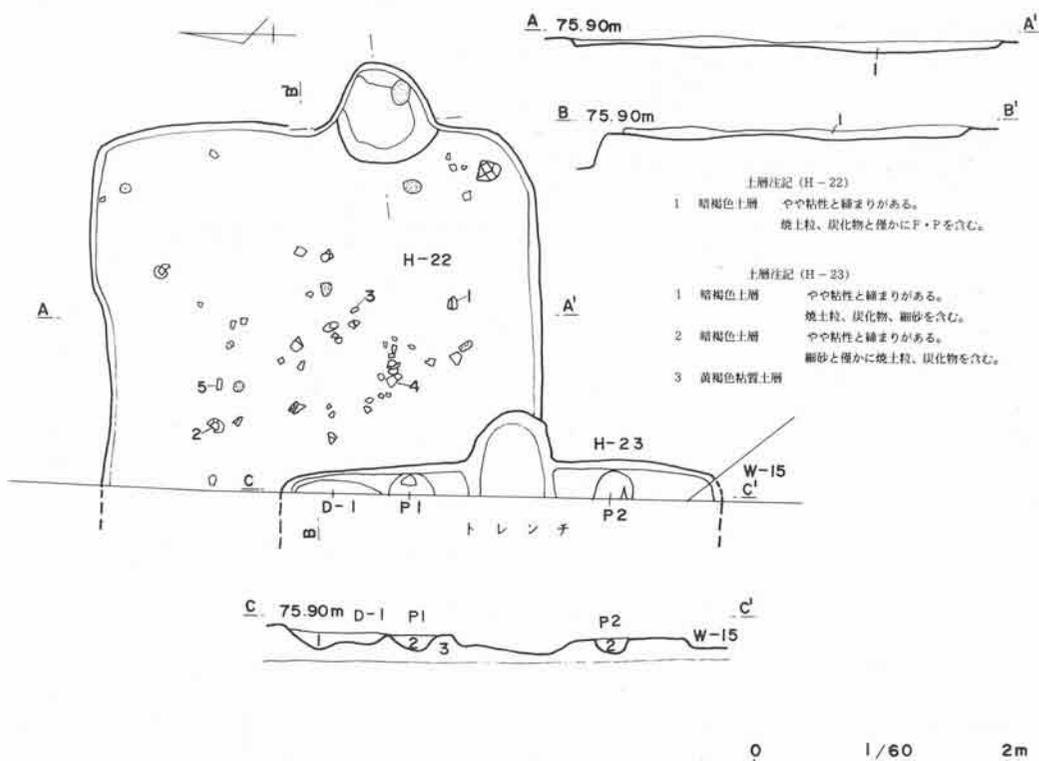
0 1/60 2m



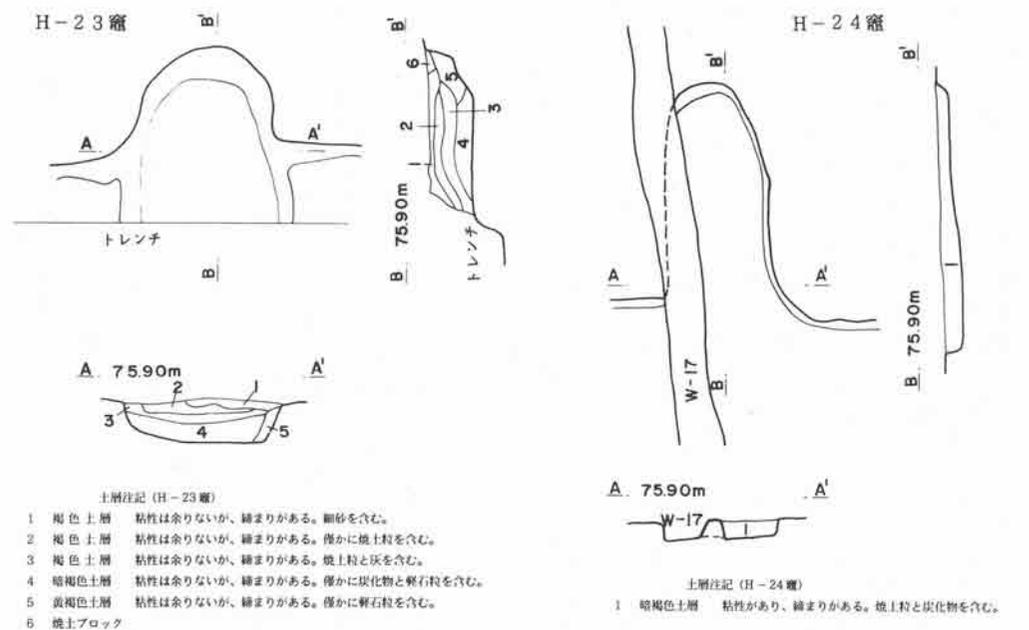
- 土層注記 (H-22 竈)
- 1 褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土粒と炭化物を含む。
  - 2 灰層
  - 3 褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒、ローム粒、灰を含む。
  - 4 黄褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに軽石粒を含む。
  - 5 焼土ブロック

0 1/30 1m

第 34 図 21 号住居跡・22 号住居跡・竈実測図



第35図 22号・23号住居跡実測図



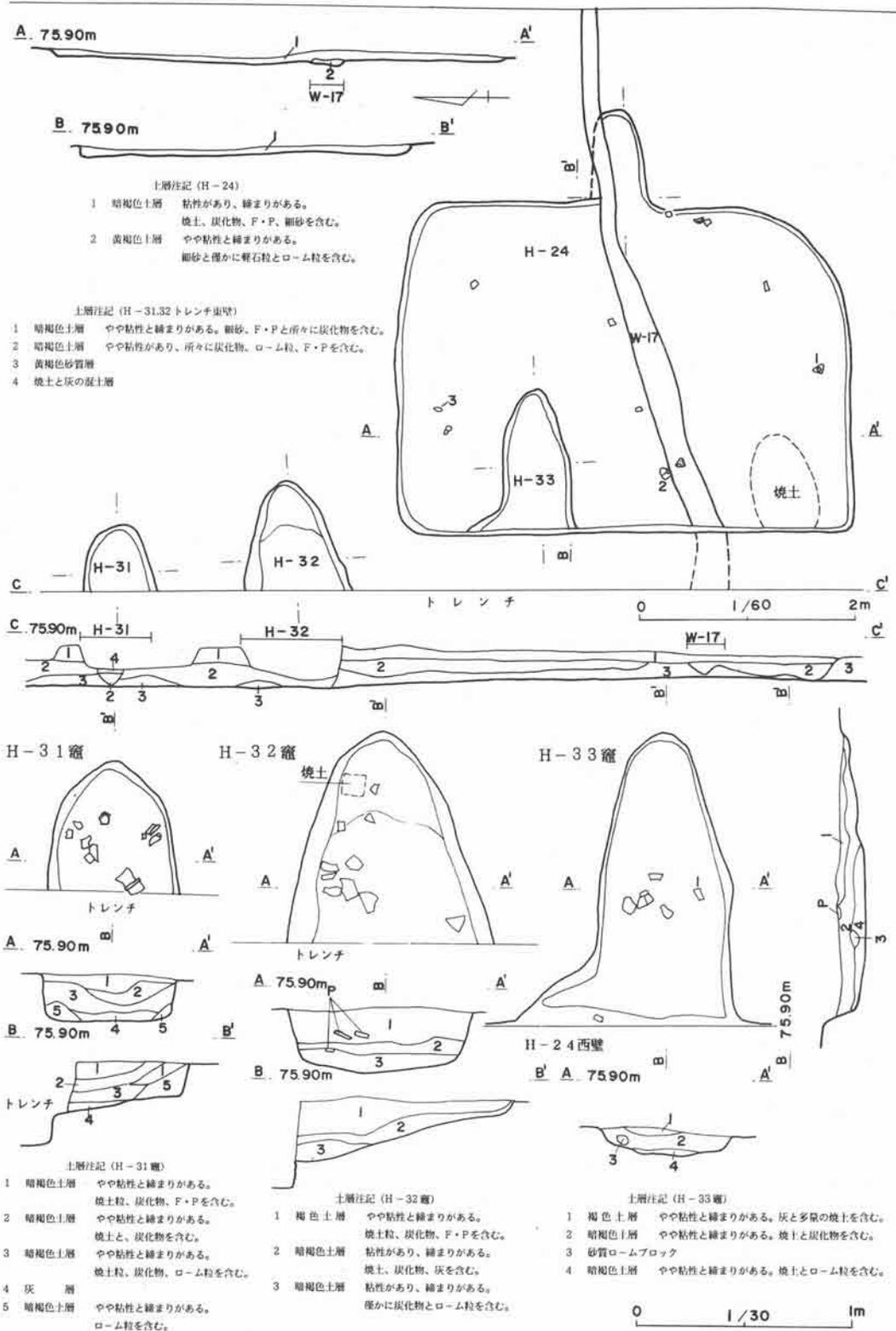
土層注記 (H-23窟)

- 1 褐色土層 粘性は余りないが、締まりがある。細砂を含む。
- 2 褐色土層 粘性は余りないが、締まりがある。僅かに焼土粒を含む。
- 3 褐色土層 粘性は余りないが、締まりがある。
- 4 暗褐色土層 粘性は余りないが、締まりがある。僅かに炭化物和軽石粒を含む。
- 5 黄褐色土層 粘性は余りないが、締まりがある。僅かに軽石粒を含む。
- 6 焼土ブロック

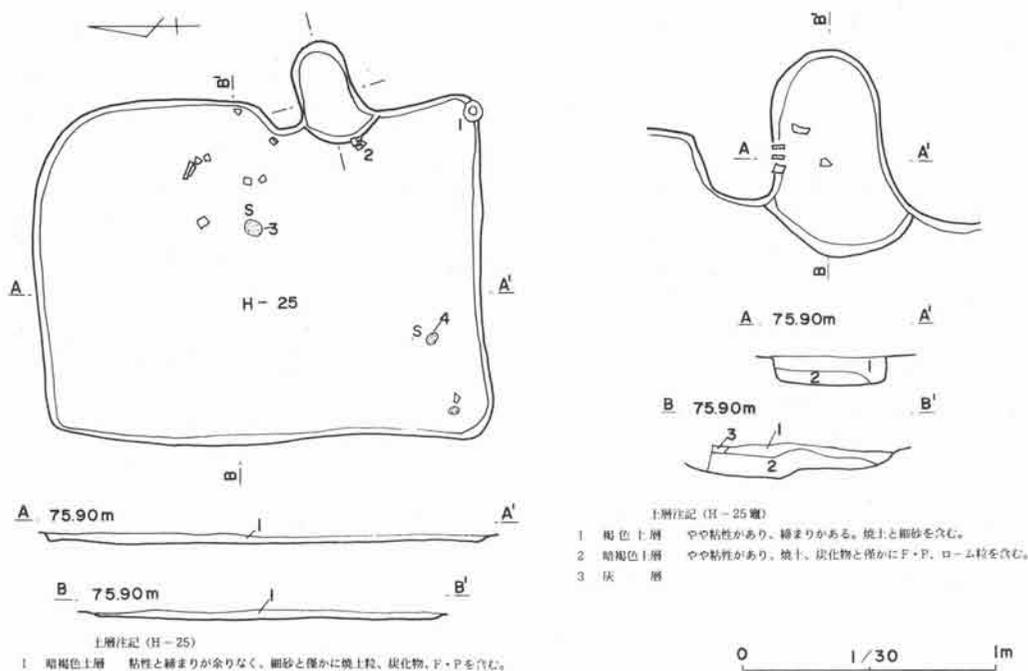
土層注記 (H-24窟)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土粒と炭化物を含む。

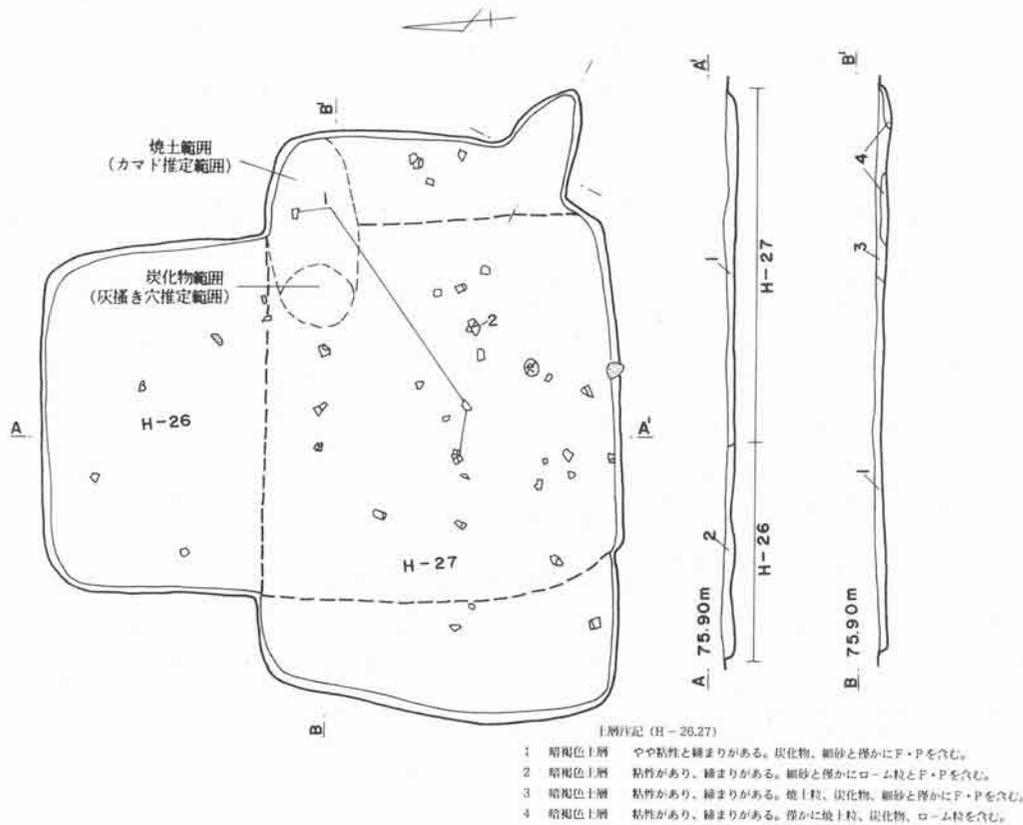
第36図 23号・24号住居跡窟実測図



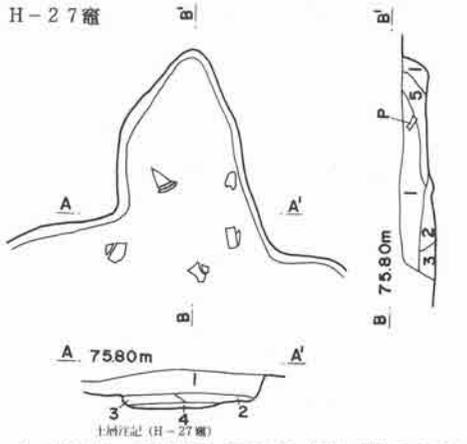
第 37 図 2 4 号住居跡, 31号・32号・33号住居跡・竈, 17号溝実測図



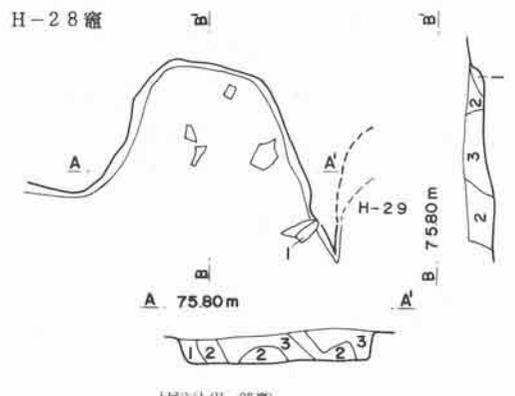
第38図 25号住居跡・竈実測図



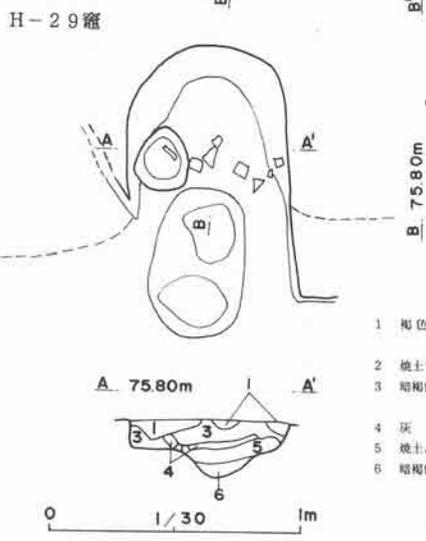
第39図 26号・27号住居跡実測図



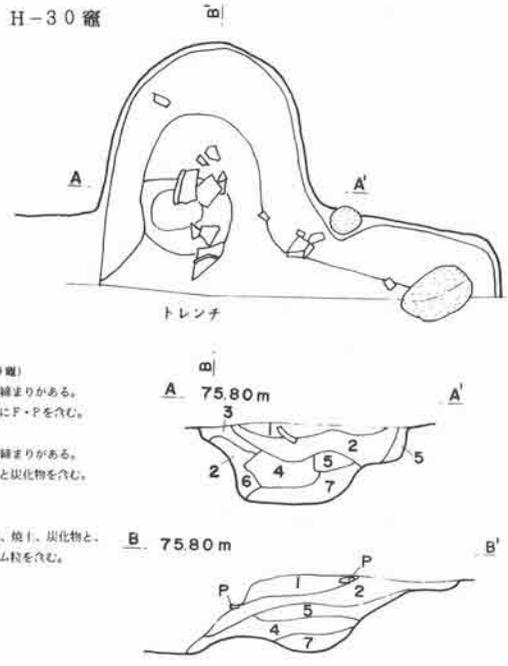
- 土層注記 (H-27窟)
- 1 褐色土層 やや粘性があり、締まりがある。焼土粒、炭化物、F・Pを含む。
  - 2 灰層
  - 3 褐色土層 細砂を多量に、F・Pを僅かに含む。
  - 4 褐色土層 やや粘性と締まりがある。細砂を含む。
  - 5 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土と炭化物を含む。



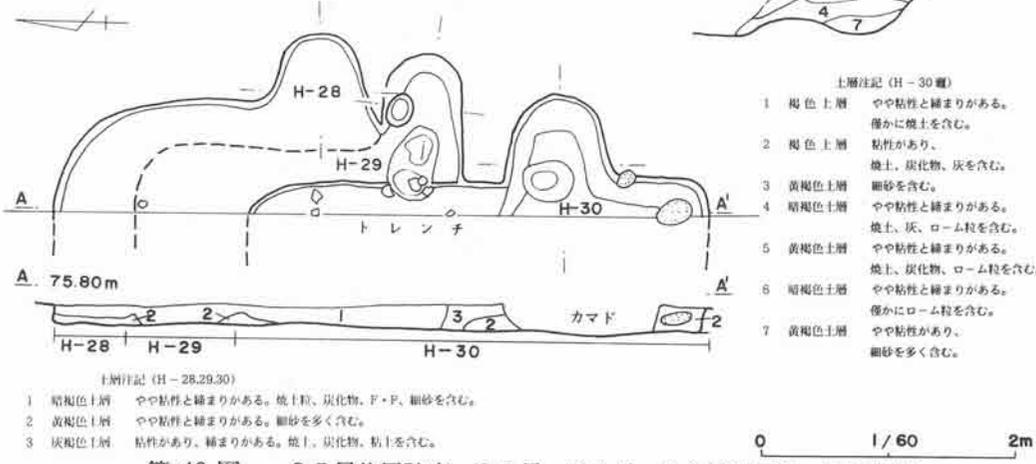
- 土層注記 (H-28窟)
- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。ローム粒を含む。
  - 2 暗褐色土層 粘性があり、焼土と炭化物を含む。
  - 3 暗褐色土層 粘性があり、焼土と僅かにF・Pを含む。



- 土層注記 (H-29窟)
- 1 褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土と僅かにF・Pを含む。
  - 2 焼土ブロック
  - 3 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。僅かに焼土と炭化物を含む。
  - 4 灰層
  - 5 焼土と灰の混土層
  - 6 暗褐色土層 粘性があり、焼土、炭化物と、僅かにローム粒を含む。

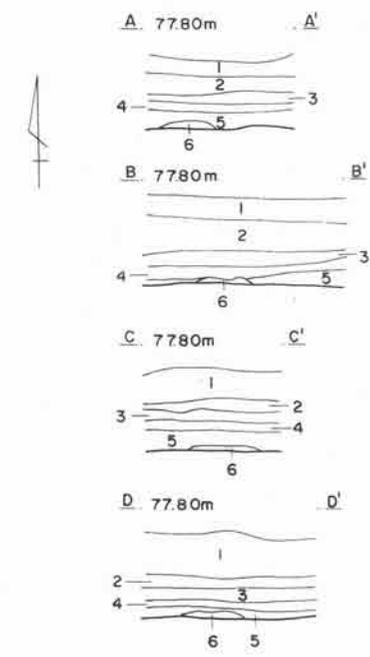
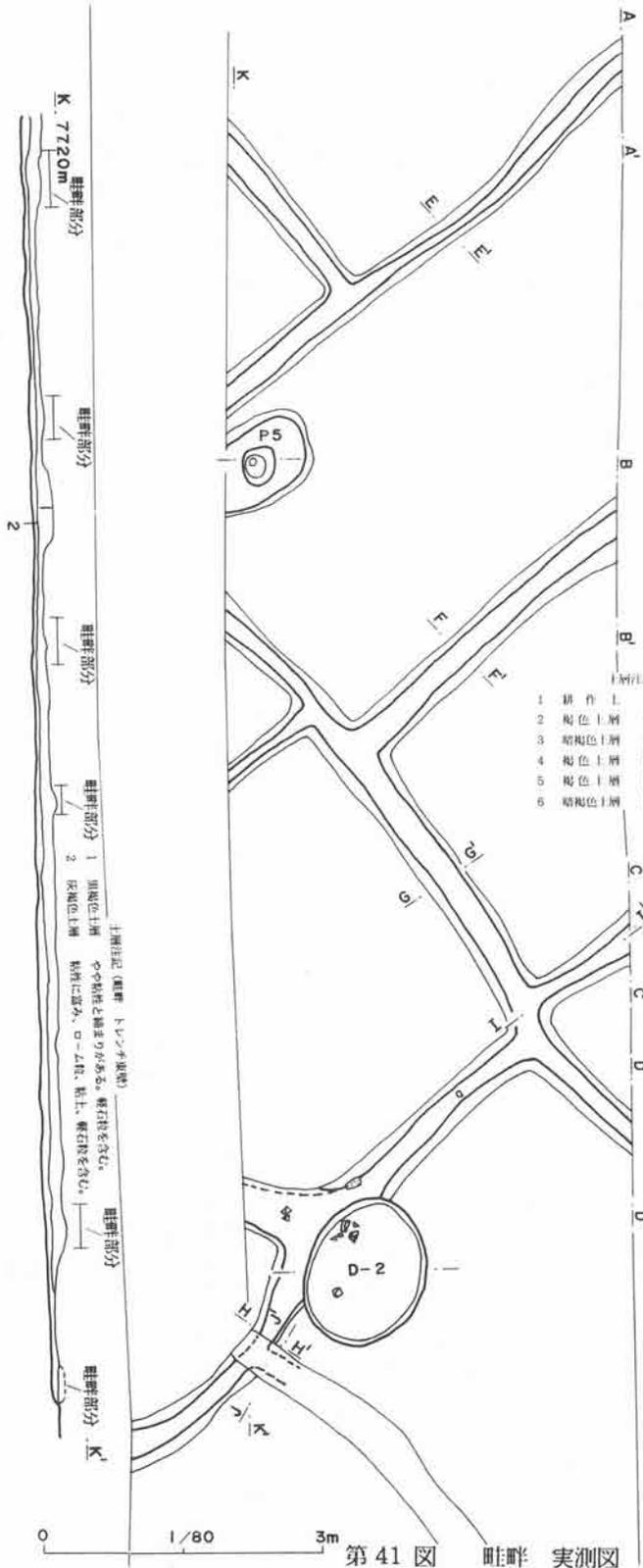


- 土層注記 (H-30窟)
- 1 褐色土層 やや粘性と締まりがある。僅かに焼土を含む。
  - 2 褐色土層 粘性があり、焼土、炭化物、灰を含む。
  - 3 黄褐色土層 細砂を含む。
  - 4 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土、灰、ローム粒を含む。
  - 5 黄褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土、炭化物、ローム粒を含む。
  - 6 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。僅かにローム粒を含む。
  - 7 黄褐色土層 やや粘性があり、細砂を多く含む。



- 土層注記 (H-28,29,30)
- 1 暗褐色土層 やや粘性と締まりがある。焼土粒、炭化物、F・P、細砂を含む。
  - 2 黄褐色土層 やや粘性と締まりがある。細砂を多く含む。
  - 3 炭褐色土層 粘性があり、締まりがある。焼土、炭化物、粘土を含む。

第40図 27号住居跡窟, 28号・29号・30号住居跡・窟実測図



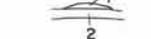
土層注記 (町野 調査区東壁)

- 1 耕作土
- 2 褐色土層 やや粘性と、締まりがある。細砂を含む。
- 3 暗褐色土層 やや粘性と、締まりがある。B層石粒を含む。
- 4 褐色土層 粘性があり、締まりがある。細砂と所々にF・Pを含む。
- 5 褐色土層 粘性があり、締まりがある。細砂、B層石粒を含む。僅かにF・Pを含む。
- 6 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。(町野部分)

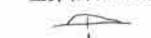
E 77.10m E'



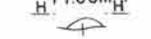
F 77.10m F'



G 77.10m G'



H 77.00m H'



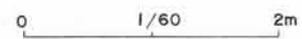
土層注記 (町野)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、B層石粒、細砂を含む。
- 2 黒褐色土層 粘性があり、締まりがある。

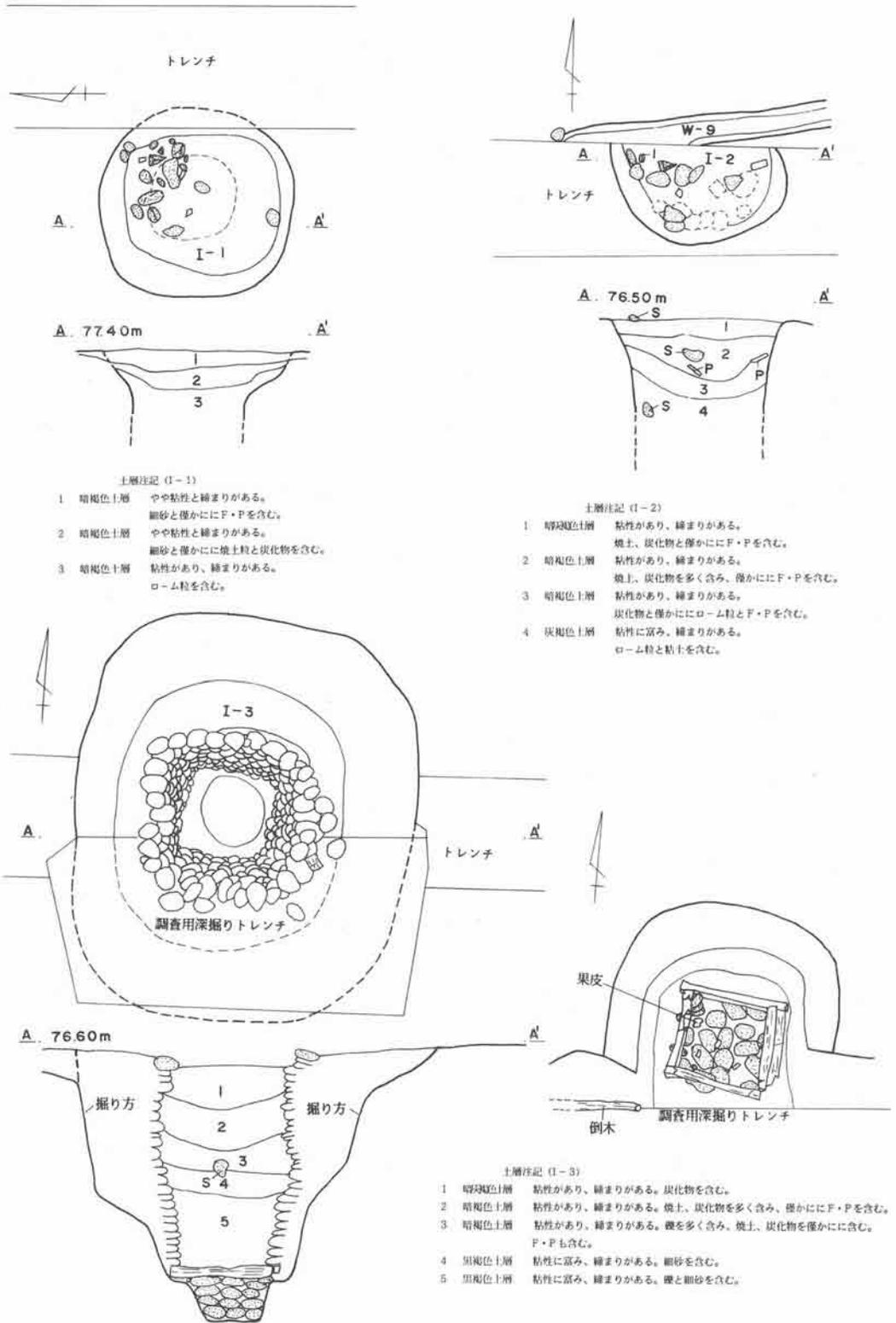
I 77.10m I'



J 77.10m J'



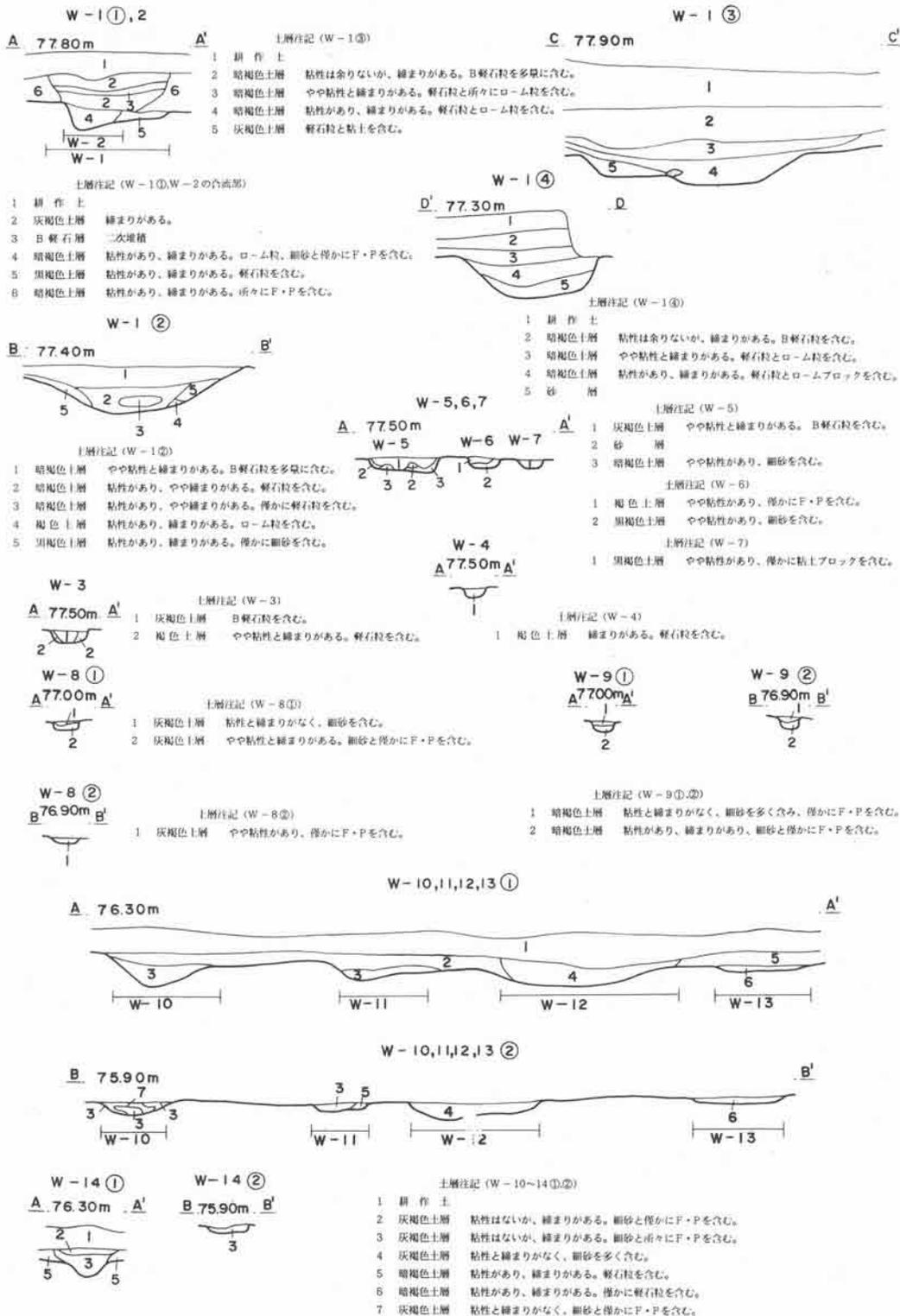
第41図 町野 実測図

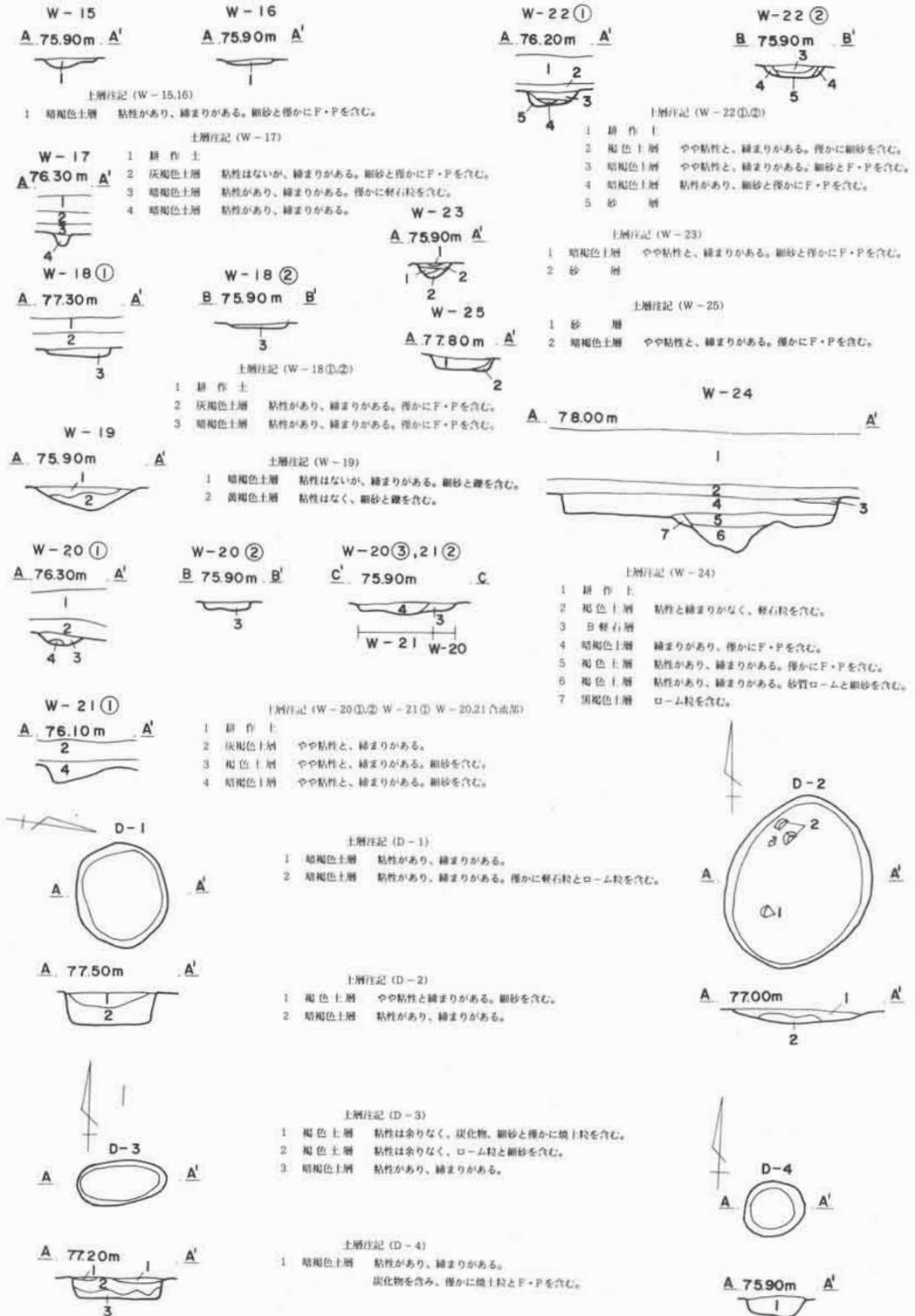


第42図 1号・2号・3号 井戸実測図

0 1/60 2m

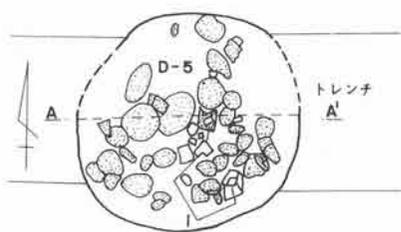
# 遺構実測図 21



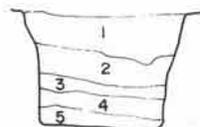


第44図 15~25号溝・1~4号土坑実測図

0 1/60 2m

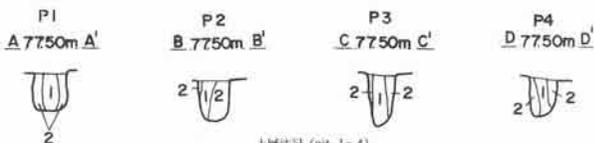


A 76.70m A'



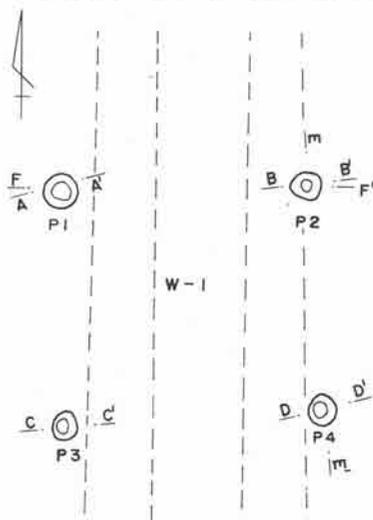
土層注記 (D-5)

- 1 暗褐色土層 粘性に富み、締まりがある。
- 2 灰褐色土層 粘性と締まりは余りなく、細砂を含む。
- 3 灰褐色砂層
- 4 灰白色粘土層 礫と細砂を含む。
- 5 灰褐色砂層 所々に礫と粘土ブロックを含む。



土層注記 (pit 1~4)

- 1 灰褐色土層 ローム粒と暗褐色土が所々に混じる。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがあり、細砂と僅かにFP粒を含む。



F 77.50m F'

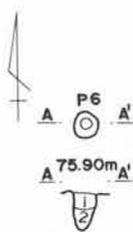


E 77.50m E'



土層注記 (pit 5)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、僅かに炭化物を含む。
- 2 砂質ロームブロック
- 3 暗褐色土層 粘性がある。

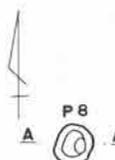


A 75.90m A'



土層注記 (pit 6,7)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに軽石粒を含む。
- 2 灰褐色土層 粘性に富み、粘土を含む。



A 75.90m A'



土層注記 (pit 8)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。僅かに炭化物と軽石粒を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。所々に粘土ブロックを含む。

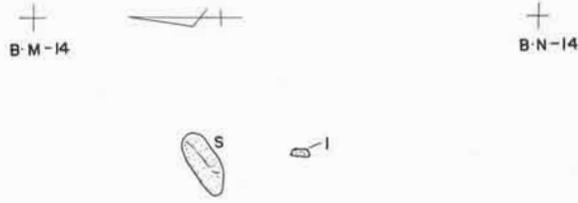
土層注記 (pit 9)

- 1 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。礫土、炭化物、軽石を含む。
- 2 暗褐色土層 粘性があり、締まりがある。礫土、炭化物を含む。

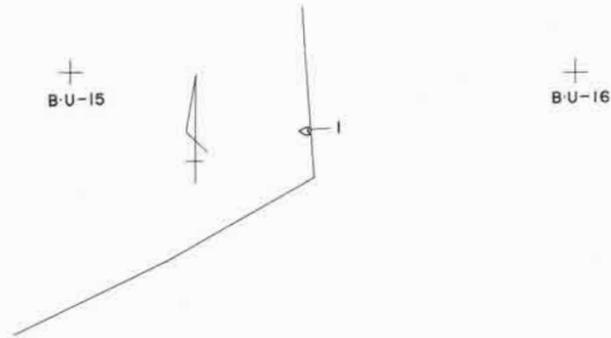


A 75.90m A'

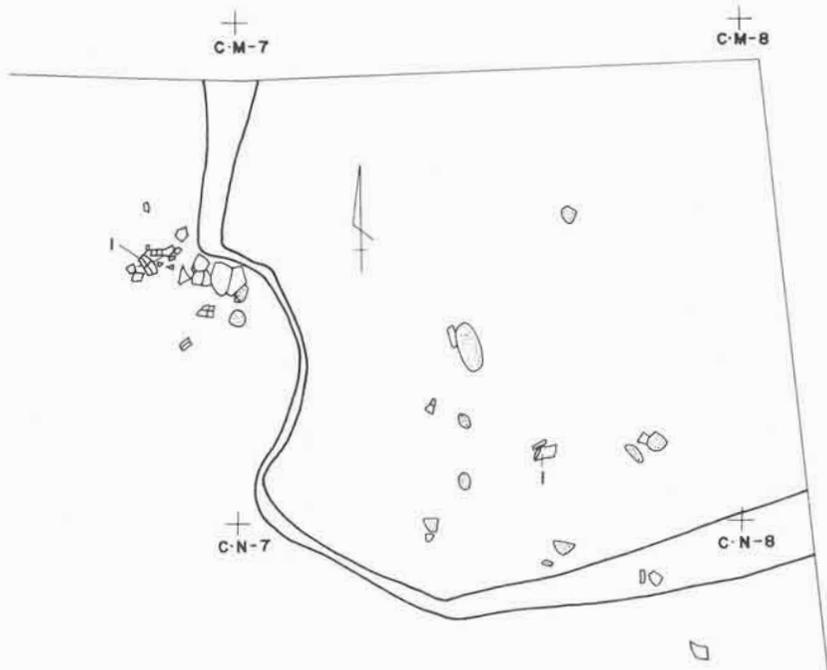




第46図 B・M-13グリッド実測図



第47図 B・U-15グリッド実測図

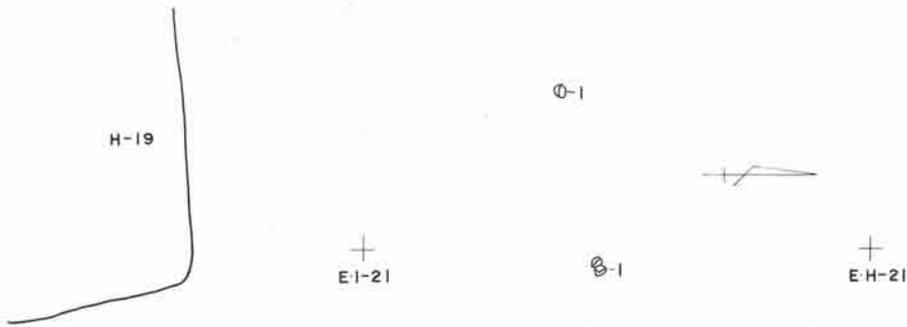


第48図 C・M-6・7, C・N-7グリッド実測図

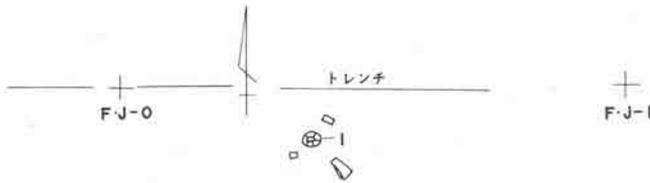
0 1/60 2m



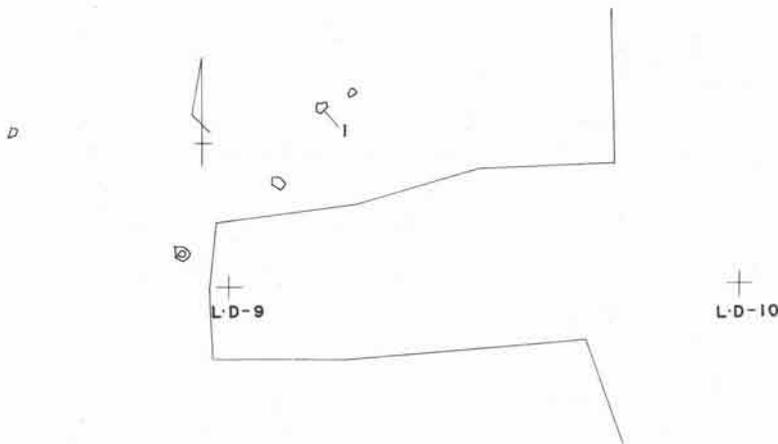
第 49 図 E・D-15 グリッド実測図



第 50 図 E・H-20, 21 グリッド実測図

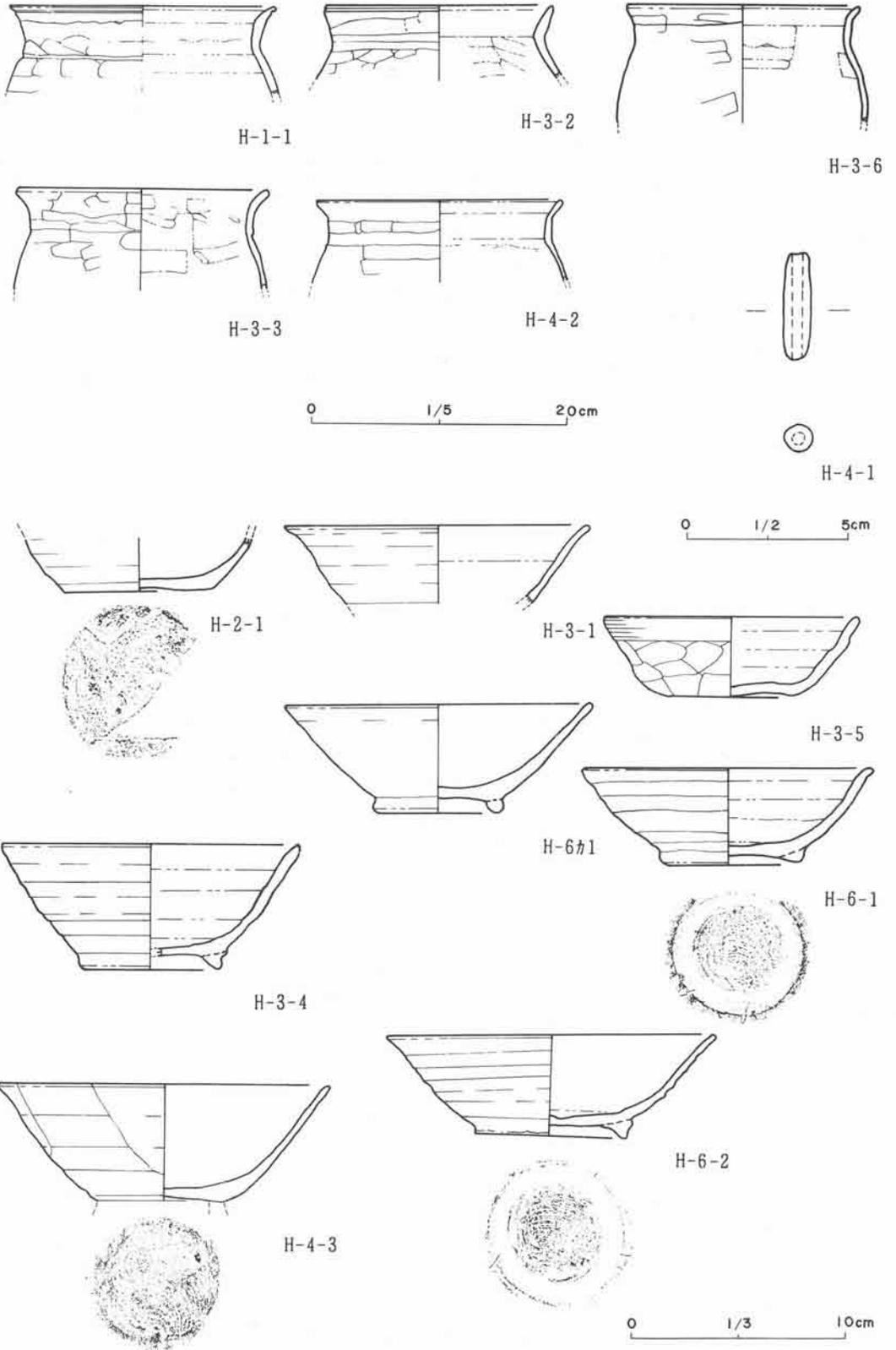


第 51 図 F・J-0 グリッド実測図

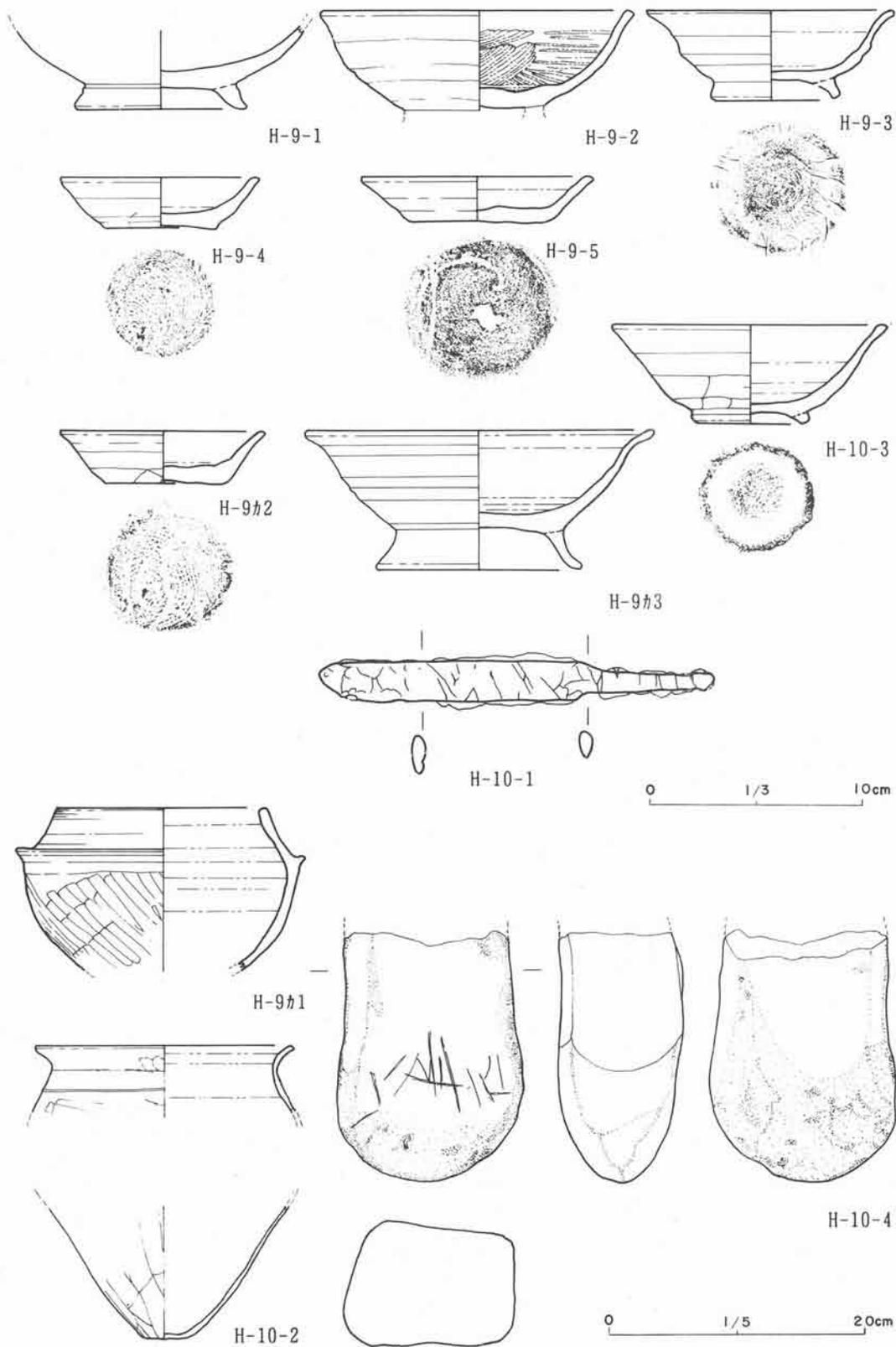


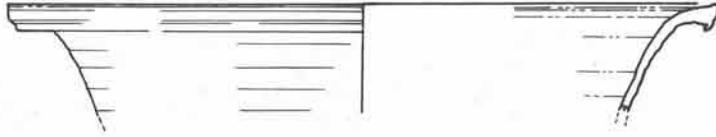
第 52 図 L・C-8・9 グリッド実測図



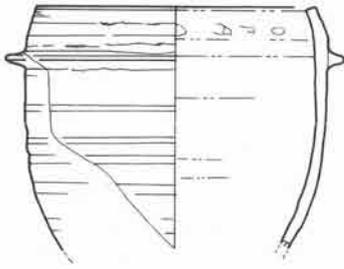


遺物実測図 2

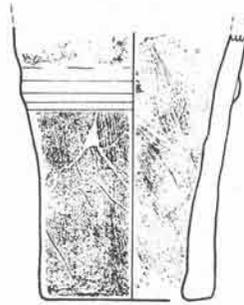




H-11a1



H-14-1



H-14-2

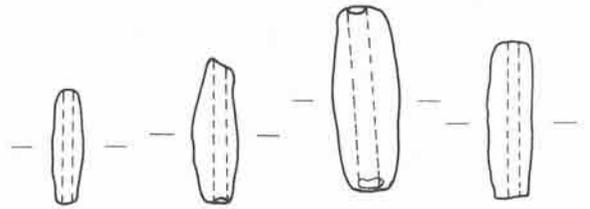


H-14a1

0 1/5 20cm



H-13-1



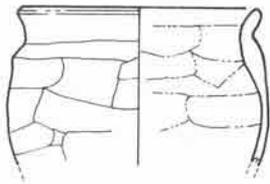
H-13-2

H-13-3

H-13-4

H-13-5

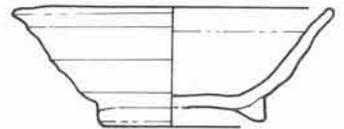
0 1/2 5cm



H-15-1



H-16-2



H-16-6

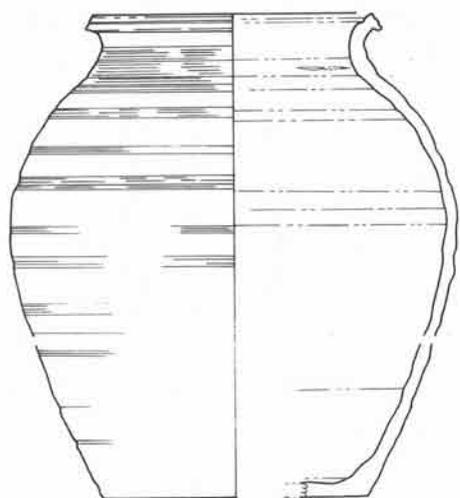


H-16-1

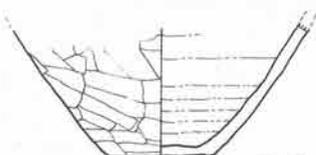


0 1/3 10cm

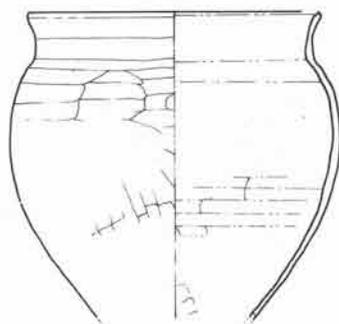
遺物実測図 4



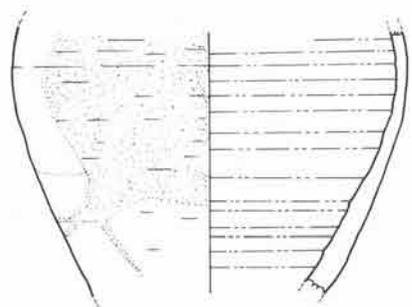
H-16-4



H-16-3



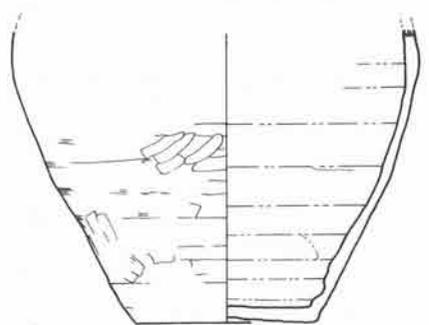
H-16-5



H-16-9

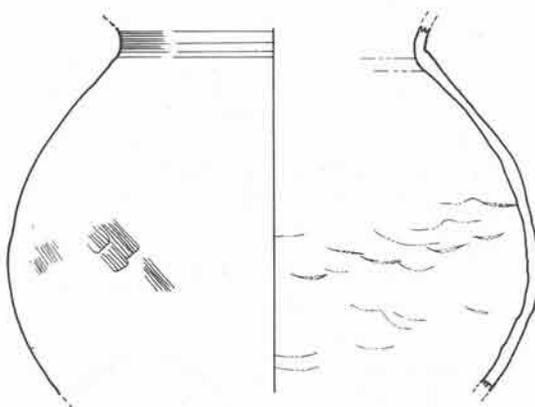


H-16-10

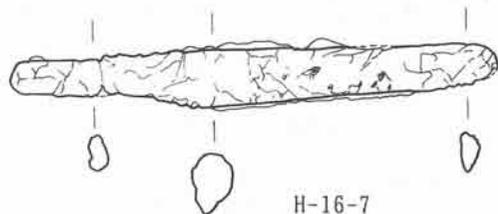


H-16-11

0 1/5 20cm

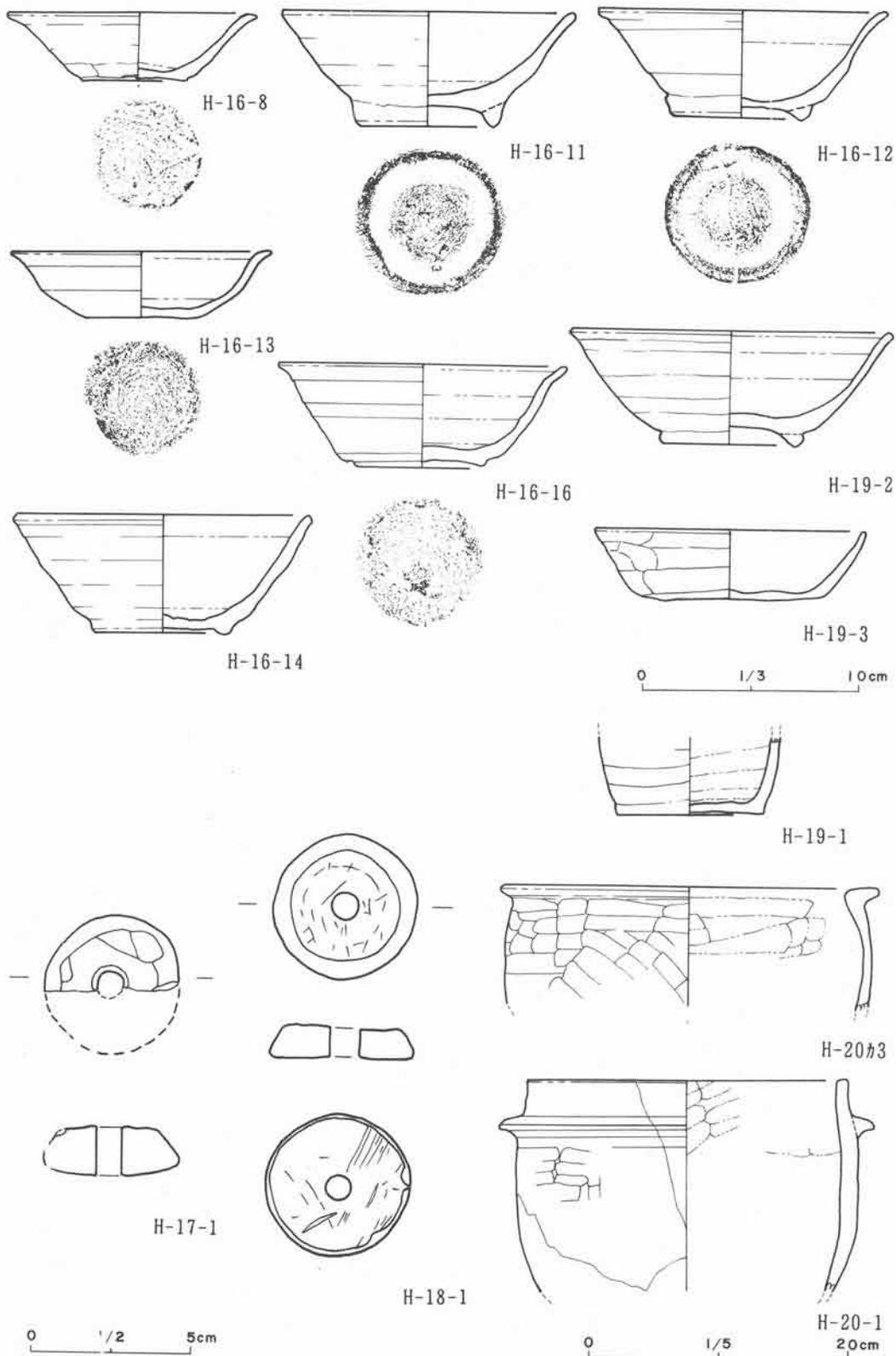


H-16-15

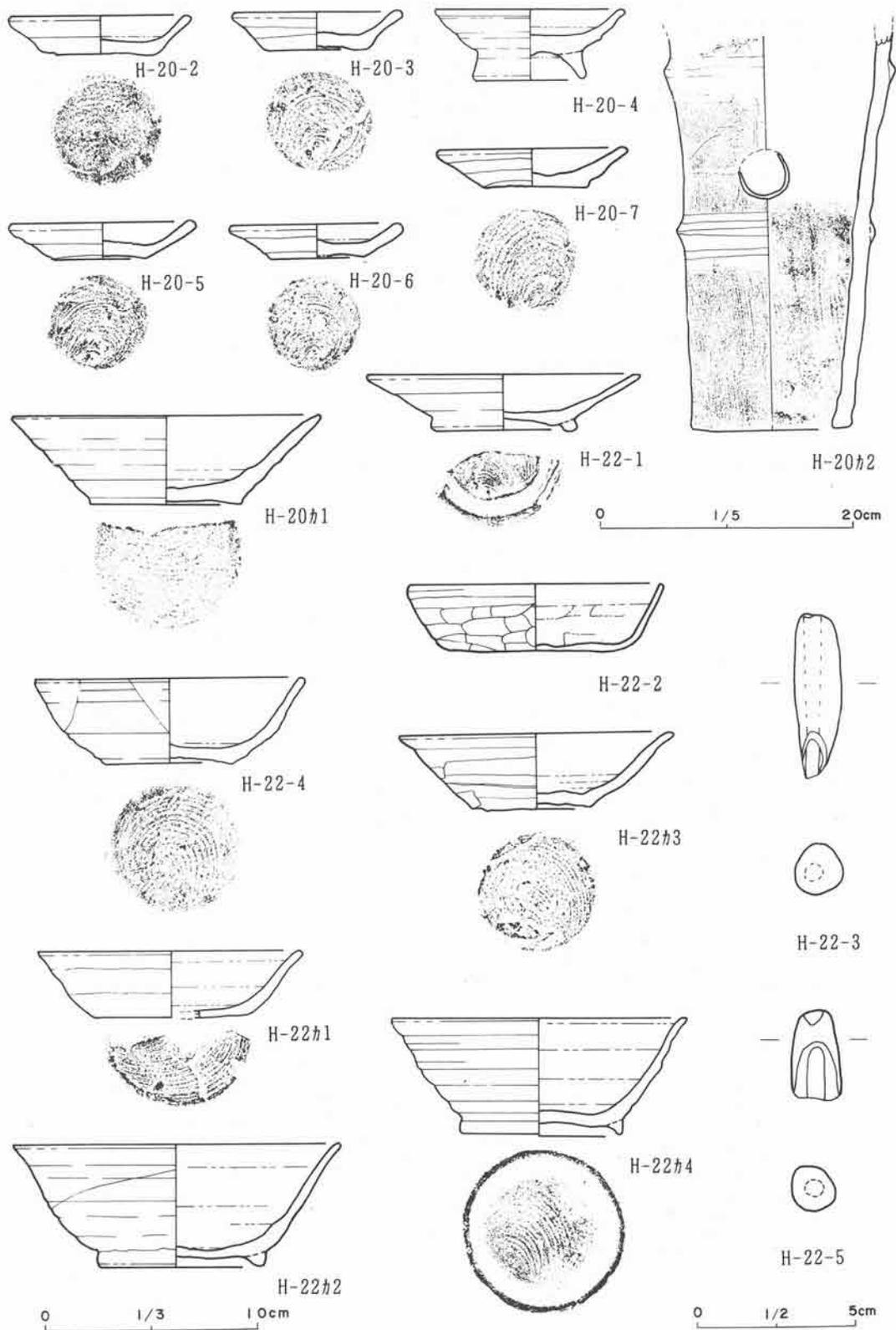


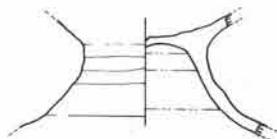
H-16-7

0 1/3 10cm

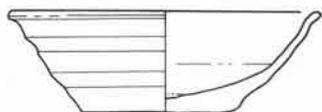
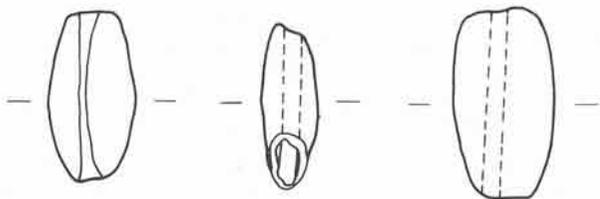


遺物実測図 6





H-24-1



H-24-2



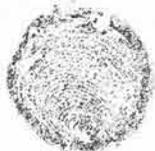
H-24-3



H-26一括



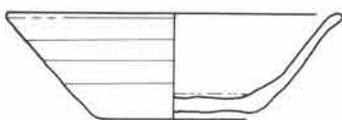
H-33カ1



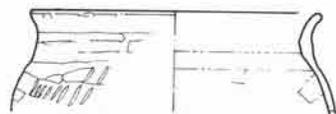
0 1/2 5cm



H-25-2



H-25-1



H-28カ1

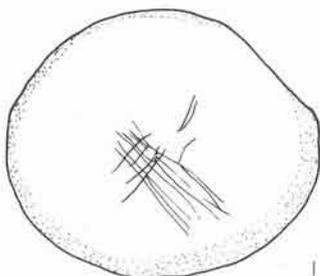
0 1/5 20cm



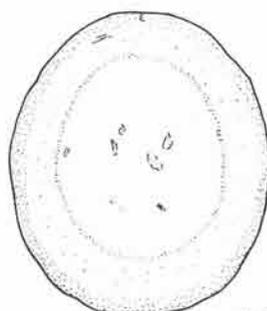
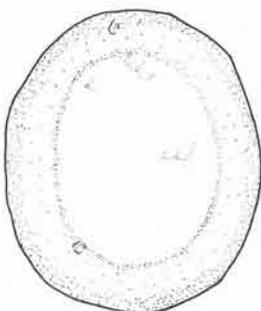
H-27-1



H-27-2

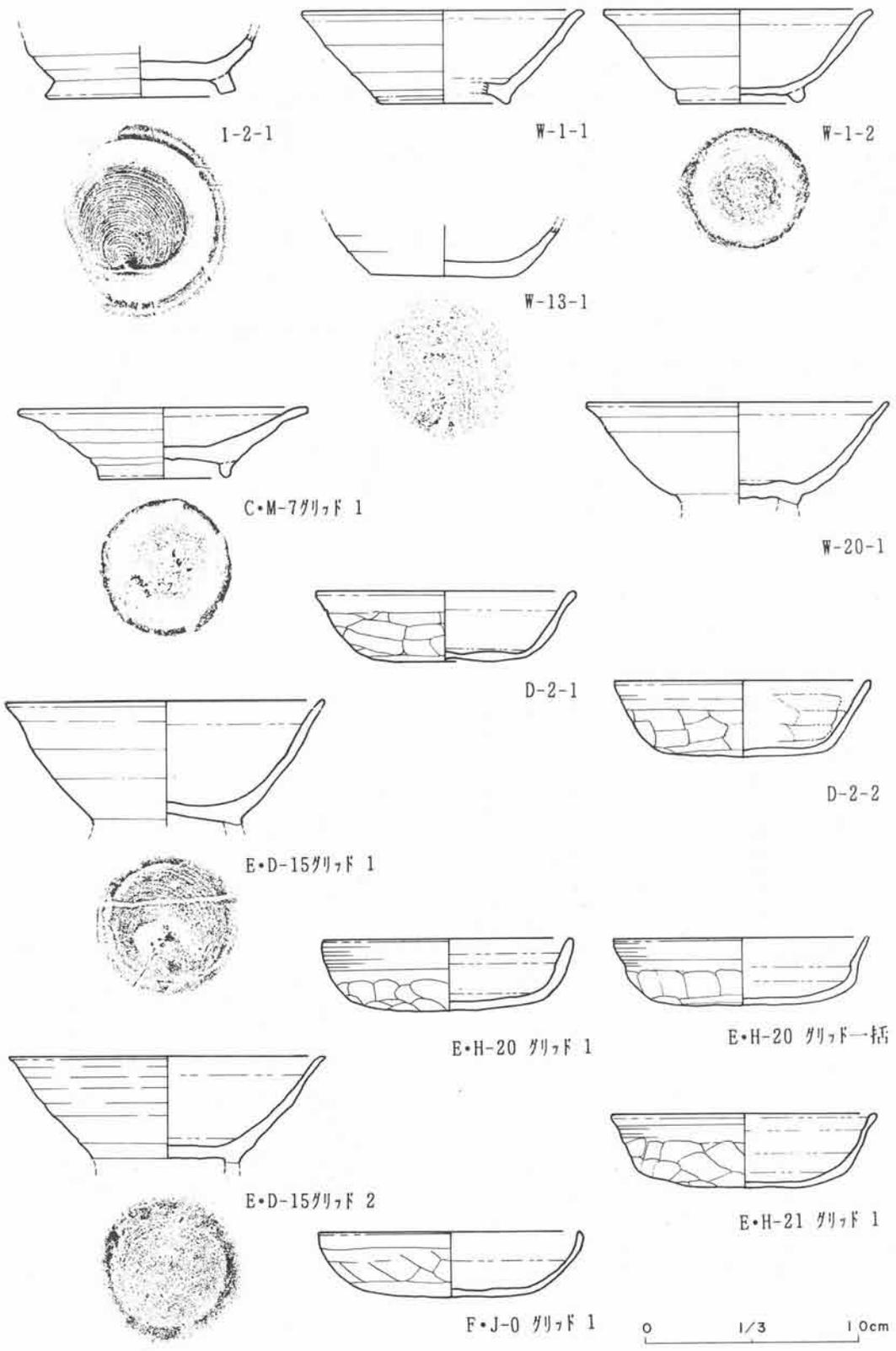


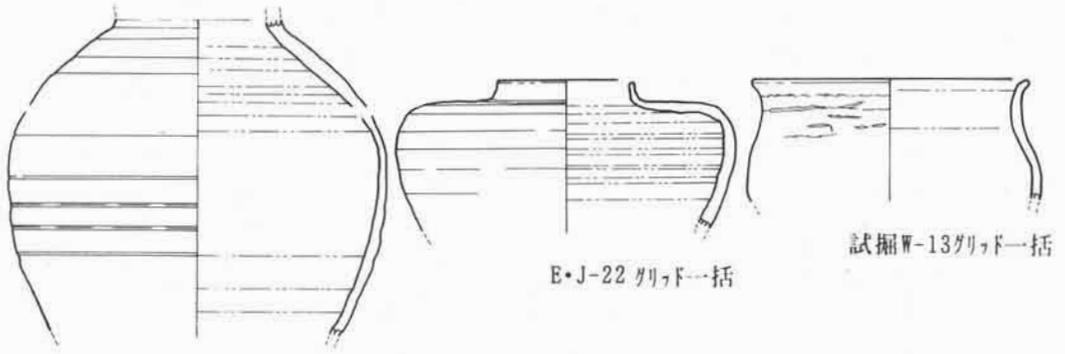
H-25-3



H-25-4

0 1/3 10cm

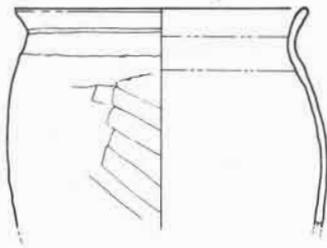




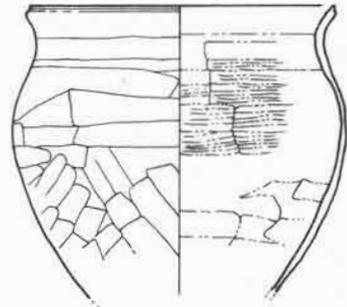
D-5グリッド 1

E・J-22 グリッド一括

試掘W-13グリッド一括

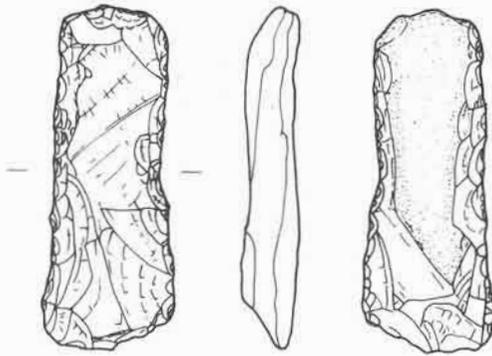


C・M-6グリッド 1

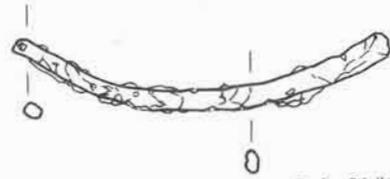


試掘I-4グリッド一括

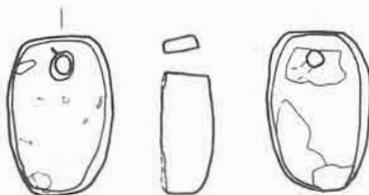
0 1/5 20cm



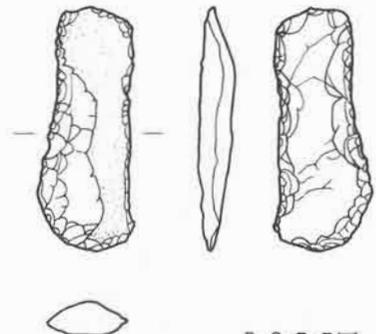
B・M-13グリッド 1



B・L-21グリッド一括

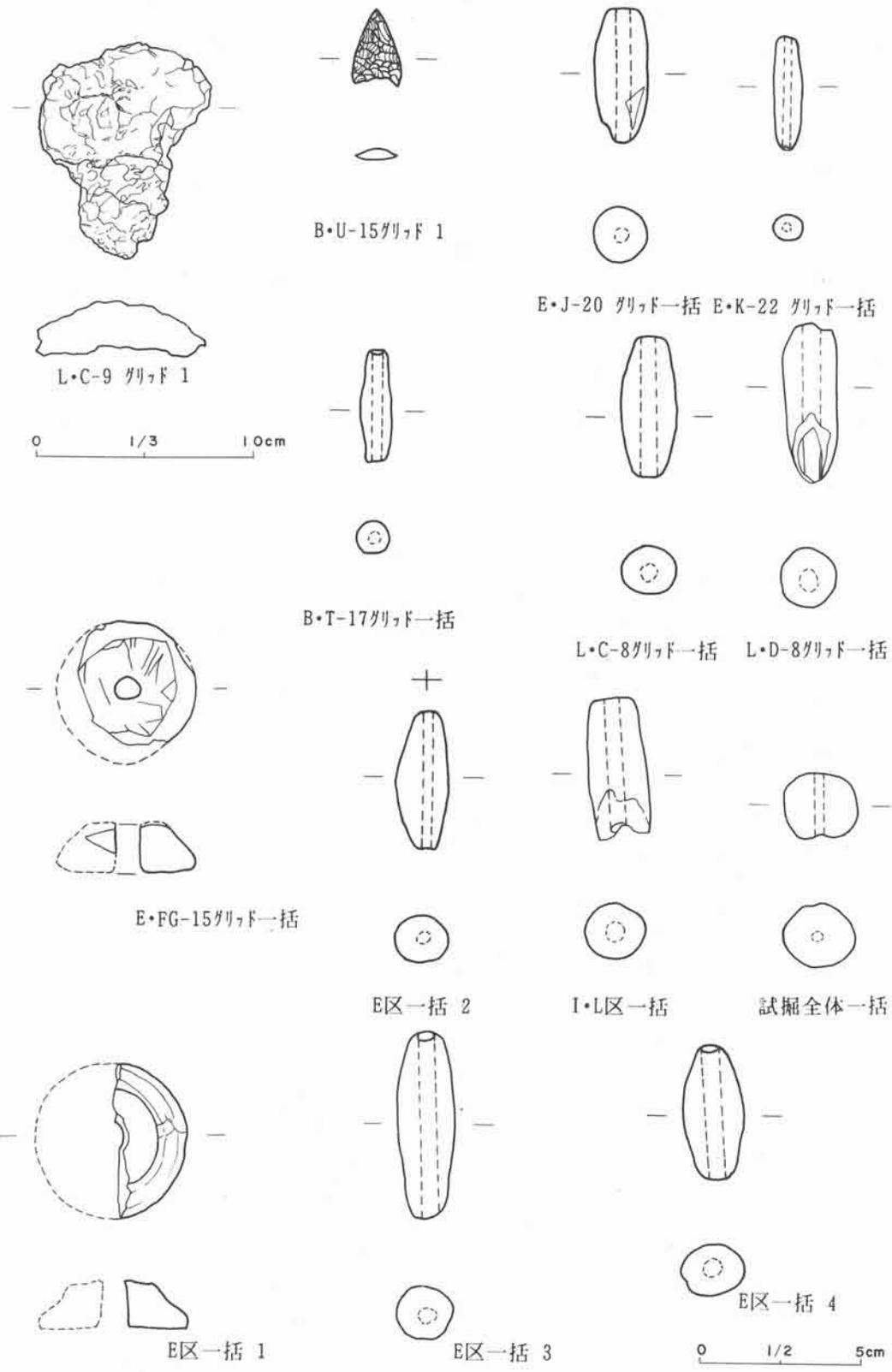


L区一括



B・C・E・F区一括

0 1/3 10cm



B・U-15グリッド 1

E・J-20 グリッド一括 E・K-22 グリッド一括

B・T-17グリッド一括

L・C-8グリッド一括 L・D-8グリッド一括

E・FG-15グリッド一括

E区一括 2

I・L区一括

試掘全体一括

E区一括 1

E区一括 3

E区一括 4

0 1/3 10cm

0 1/2 5cm





調査前現況(東より)



調査前現況(西より)



B・C区(西より)



B・E区(北より)



C・F区(北より)



B・E区(南より)



E・F区(東より)



I・L区(北より)



1号住居跡



1号住居跡出土遺物狀況



1号住居跡窟



2号住居跡



2号住居跡窟



3号住居跡



3号住居跡出土遺物狀況



3号住居跡窟



4号住居跡



4号住居跡出土遺物狀況



4号住居跡竈



5号住居跡



5号住居跡竈



6号住居跡



6号住居跡出土遺物



6号住居跡竈



7号住居跡



8号住居跡



9号住居跡



9号住居跡出土遺物狀況



9号住居跡出土遺物



9号住居跡竈



9号住居跡竈出土遺物狀況



10号住居跡



10号住居跡出土遺物



10号住居跡竈



11号住居跡



11号住居跡竈



12号住居跡



12号住居跡竈



12号住居跡竈出土遺物



13号住居跡



13号住居跡出土遺物狀況



13号住居跡窟



14号住居跡



14号住居跡出土遺物狀況



14号住居跡窟



15号住居跡



15号住居跡窟



16号住居跡



16号住居跡出土遺物狀況



16号住居跡出土遺物



16号住居跡出土遺物



16号住居跡竈



16号住居跡竈出土遺物狀況



17号住居跡



18号住居跡



18号住居跡出土遺物



18号住居跡窟



19号住居跡



19号住居跡出土遺物



20号住居跡



20号住居跡出土遺物



20号住居跡窟



20号住居跡窟出土遺物狀況



20号住居跡窟出土遺物



21号住居跡



22・23号住居跡



22・23号住居跡出土遺物



22号住居跡竈



22号住居跡竈出土遺物狀況



23号住居跡竈



24・33号住居跡, 17号溝



24号住居跡竈



33号住居跡竈



25号住居跡出土遺物状況



25号住居跡出土遺物



25号住居跡竈



26・27号住居跡



26・27号住居跡出土遺物状況



27号住居跡出土遺物



27号住居跡竈



28・29・30号住居跡



28・29・30号住居跡竈セクション(上から)



28号住居跡竈



29号住居跡竈



30号住居跡竈



31号住居跡竈



32号住居跡竈



畦畔(北より)



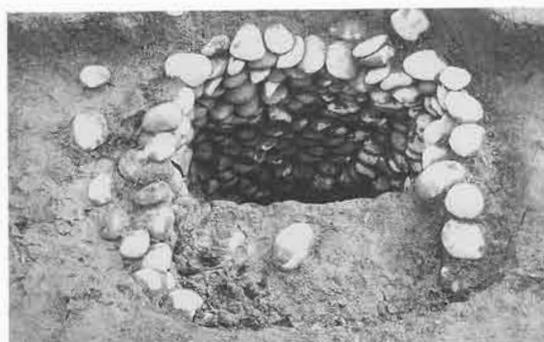
畦畔(南より)



1号井戸



2号井戸



3号井戸 石積み状況



3号井戸 木枠と敷石状況



3号井戸 完掘状況



1号溝(北より)



1号溝(南より)



1号溝・2号溝 合流部セクション



3・4号溝(右から)



5・6・7号溝(左から)



8・9号溝(左から)



10・11・12号溝(左から)



13・14号溝(左から)



15・16号溝(左から)



18号溝



19号溝



20・21号溝(右から)



22・23号溝(左から)



24号溝



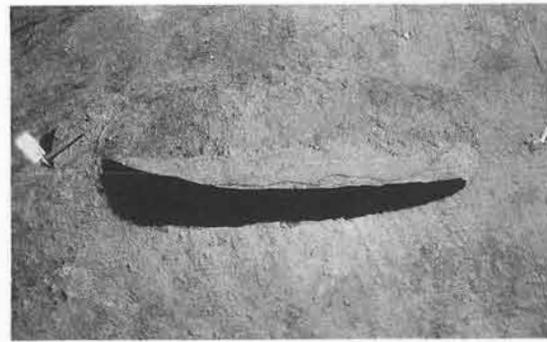
25号溝



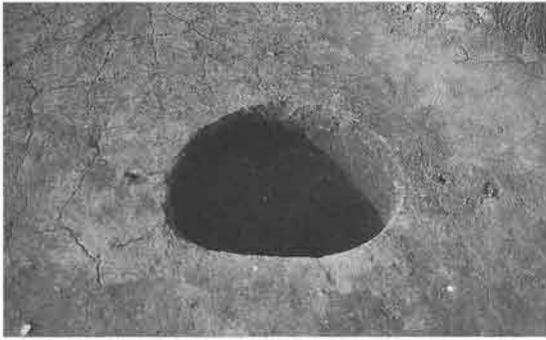
1号土坑



2号土坑



3号土坑セクション



4号土坑



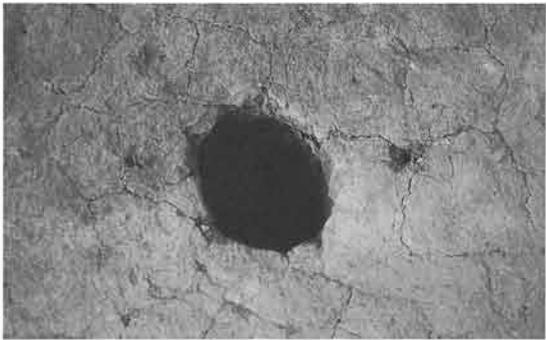
5号土坑



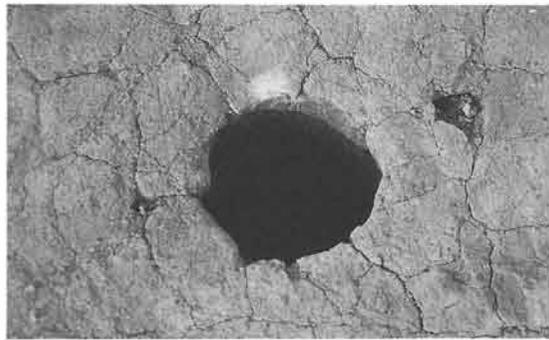
pit 1~4(東劫)



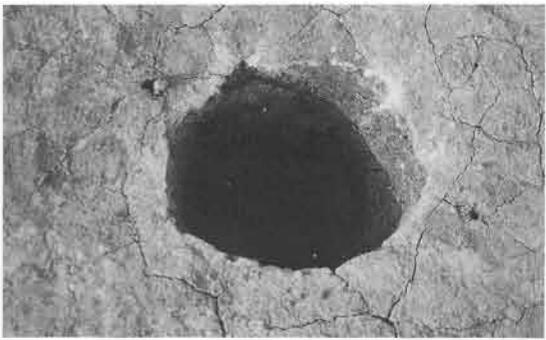
pit 5



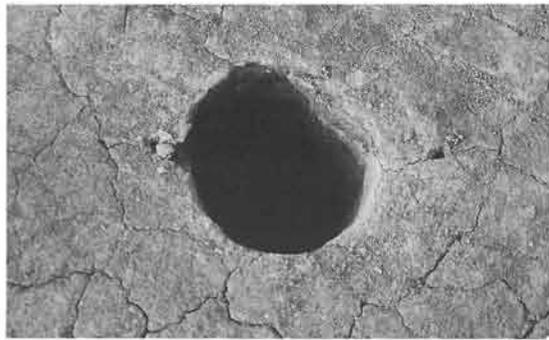
pit 6



pit 7



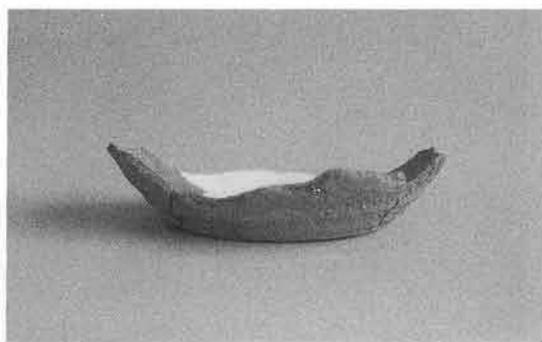
pit 8



pit 9



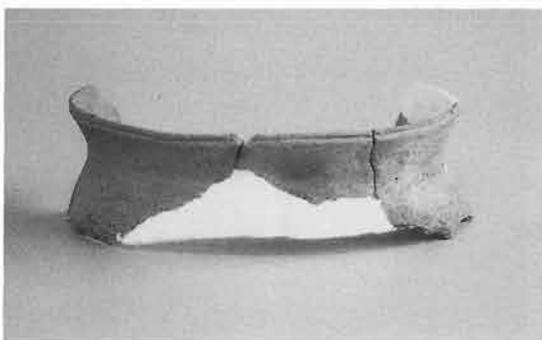
H-1-1



H-2-1



H-3-1



H-3-2



H-3-3



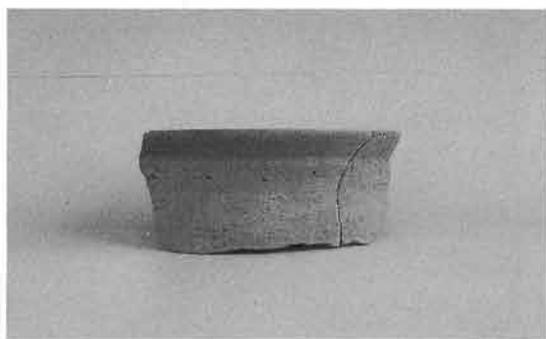
H-3-4



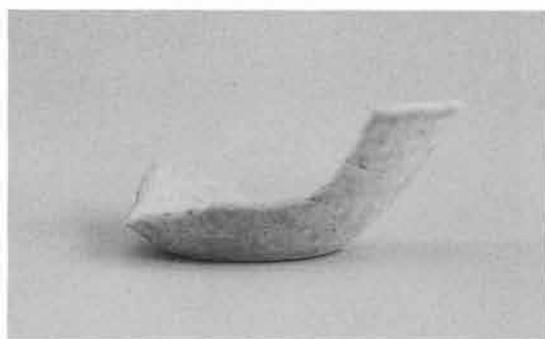
H-3-5



H-3-6



H-4-2



H-4-3



H-6-1



H-6-2



H-6カ1



H-9-1



H-9-2



H-9-3



H-9-4



H-9-5



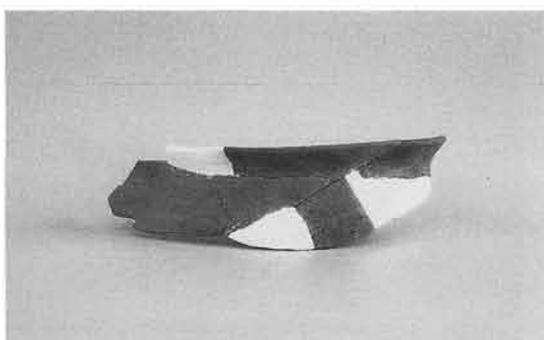
H-9カ1



H-9カ2



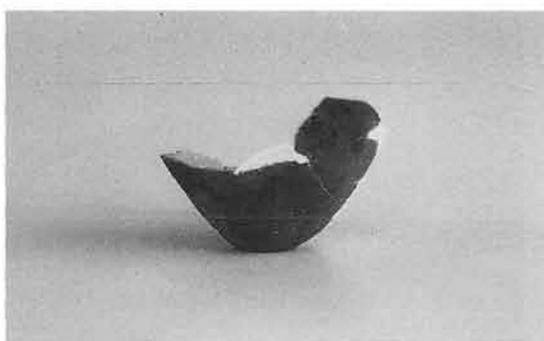
H-9カ3



H-10-2



H-10-3



H-10-2



H-11カ1



H-13-1



H-14-1



H-14-2



H-14-カ1



H-15-1



H-16-1



H-16-2



H-16-3



H-16-4



H-16-5



H-16-4



H-16-6



H-16-8



H-16-9



H-16-10



H-16-11



H-16-12



H-16-13



H-16-14



H-16-15



H-16-16



H-16カ1



H-19-1



H-19-2



H-19-3



H-20-1



H-20-2



H-20-3



H-20-4



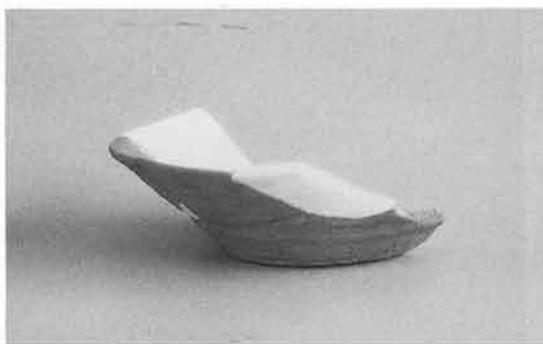
H-20-5



H-20-6



H-20-7



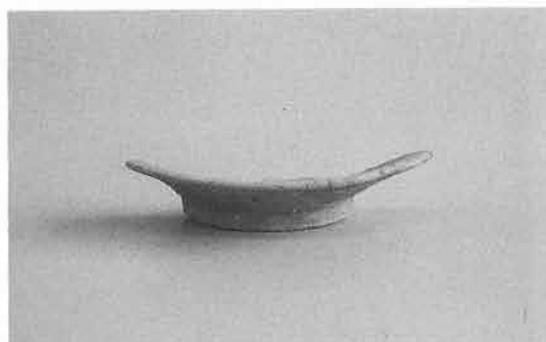
H-20カ1



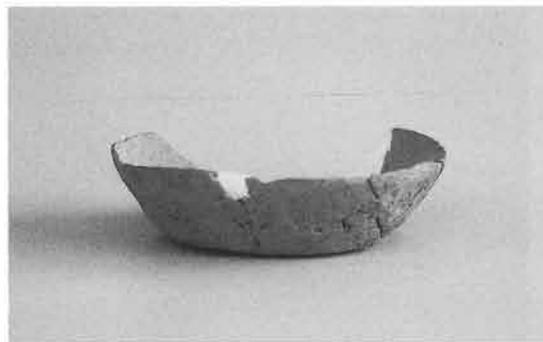
H-20カ2



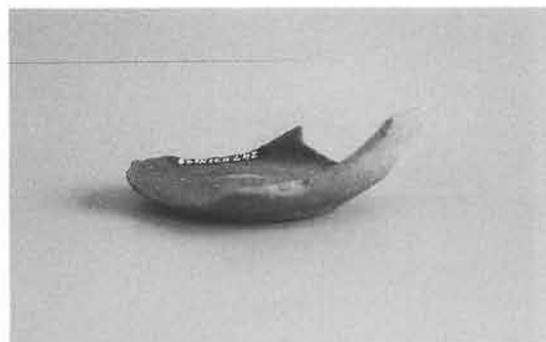
H-20カ3



H-22-1



H-22-2



H-22-4



H-22カ1



H-22カ2



H-22カ3



H-22カ4



H-24-1



H-24-2



H-25-1



H-25-2



H-27-1



H-27-2



H-28カ1



W-1-1



W-1-2



W-13-1



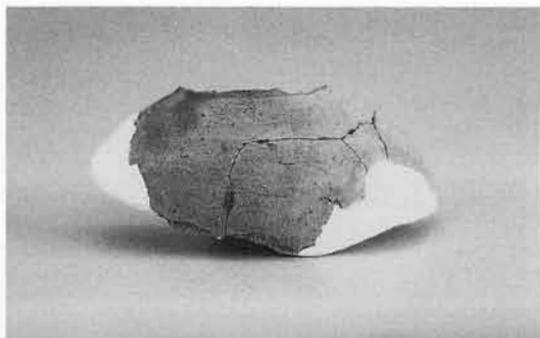
W-20-1



D-2-1



D-2-2



D-5-1



I-2-1



D-5-1



C・M-6グリッド 1



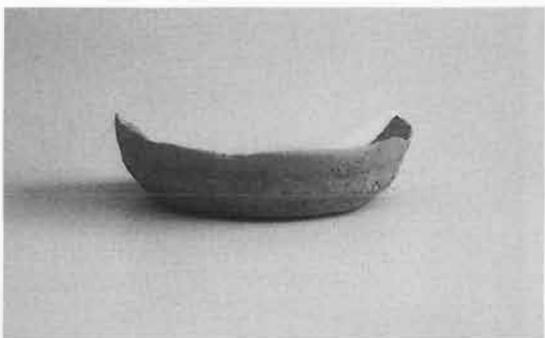
C・M-7グリッド 1



E・D-15グリッド 1



E・D-15グリッド 2



E・H-20 グリッド 1



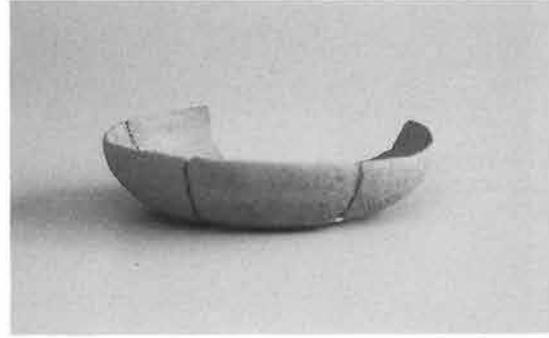
E・H-20 グリッド一括



E・H-21 グリッド 1



E・J-22 グリッド一括



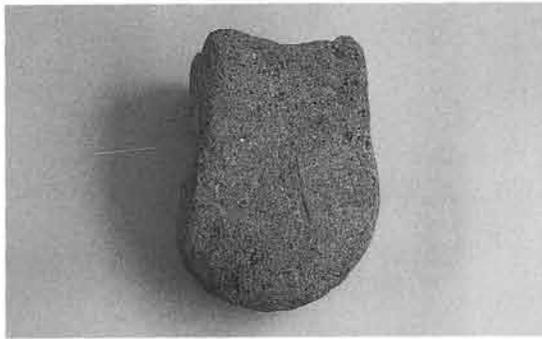
F・J-0 グリッド 1



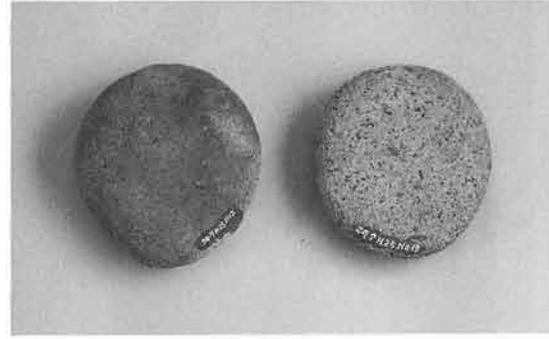
試掘W-13 グリッド一括



試掘I-4 グリッド一括

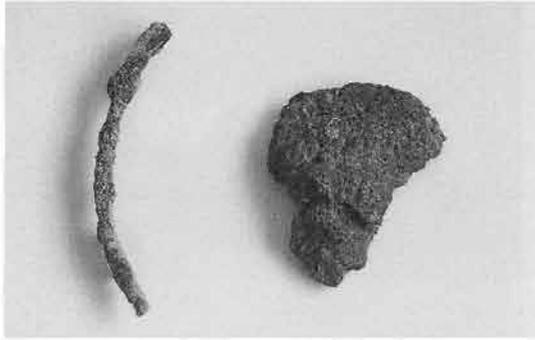


H-10-4

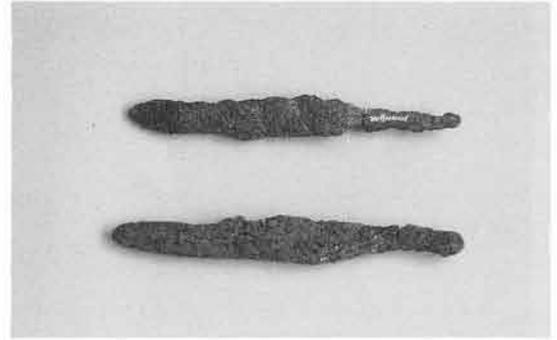


H-25-3

H-25-4



B・L-21グリッド一括 L・C-9 グリッド 1



H-10-1  
H-16-7



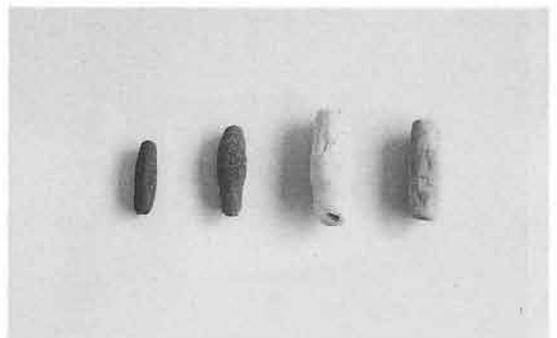
H-17-1 H-18-1



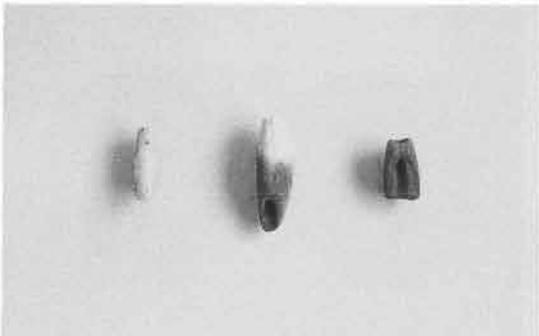
E・FG-15グリッド一括 E区一括 1



B・M-13グリッド 1 L区一括  
B・C・E・F区一括



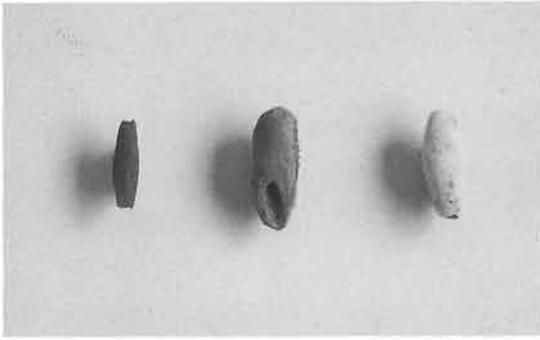
H-13-2 H-13-4  
H-13-3 H-13-5



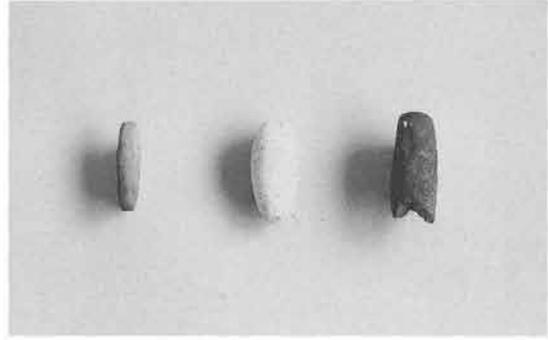
H-4-1 H-22-3 H-22-5



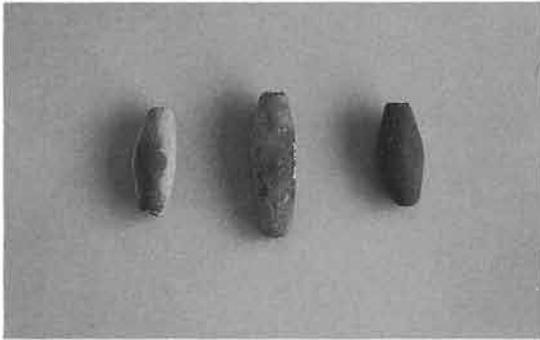
H-24-3 H-26一括 H-33カ1



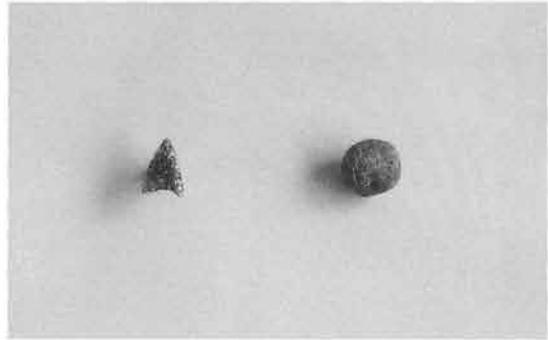
B・T-17グリッド一括    L・C-8グリッド一括  
L・D-8グリッド一括



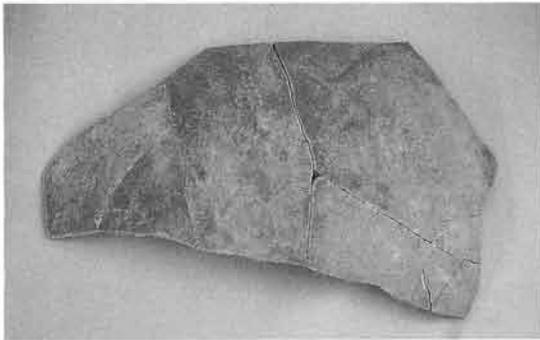
E・K-22 グリッド一括    I・L区一括  
E・J-20 グリッド一括



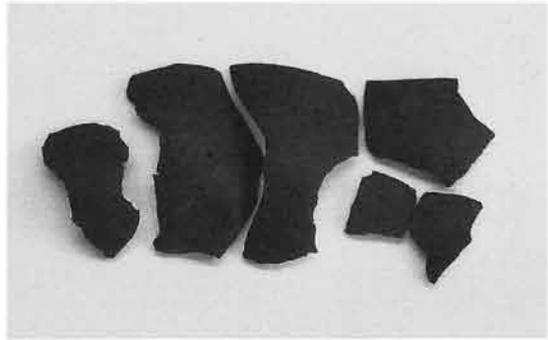
E区一括 2    E区一括 3    E区一括 4



B・U-15グリッド 1    試掘全体一括



H-12 竈出土遺物



I-3 出土遺物 (果皮)



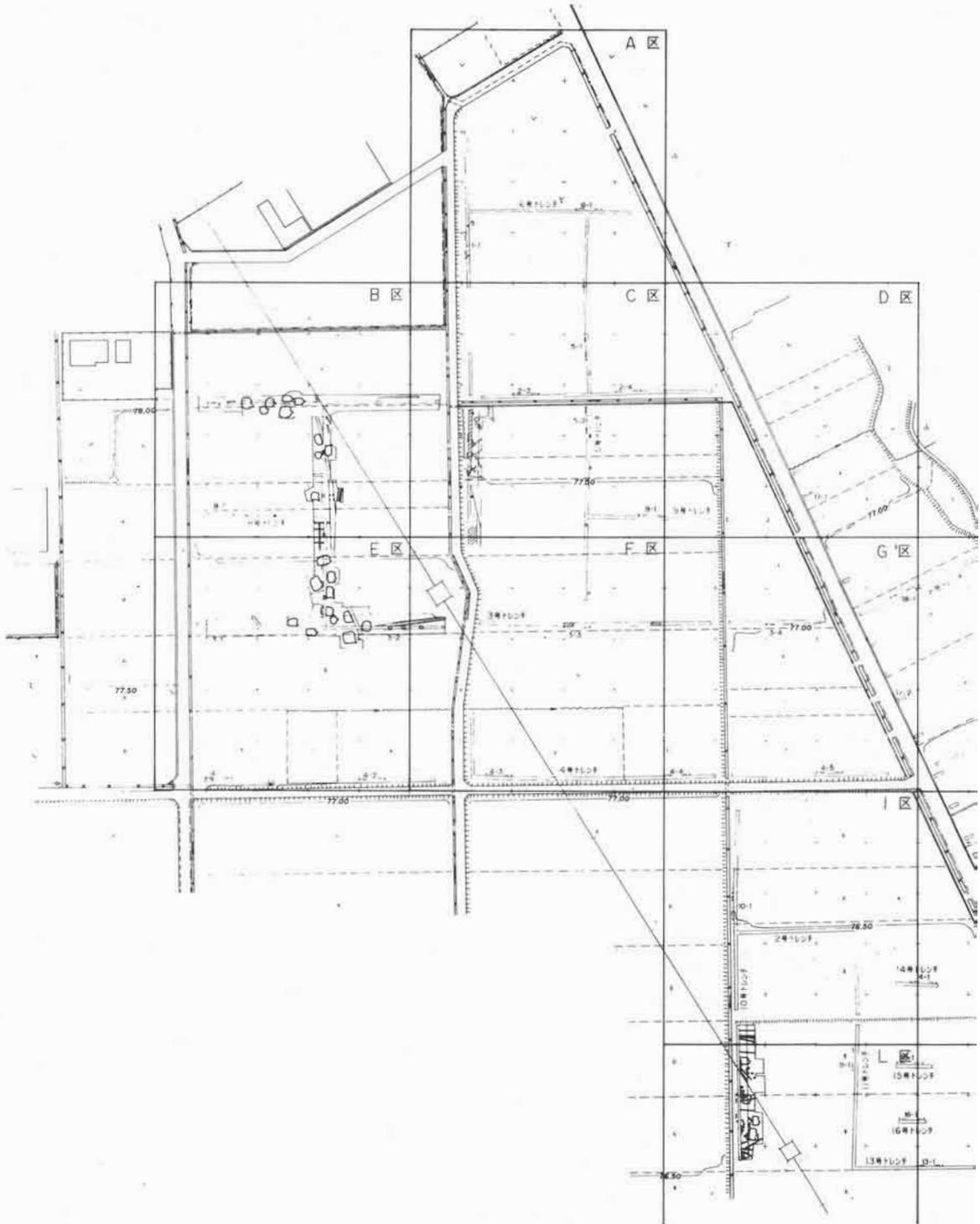
I-3 木枠



I-3 木枠



第53図 前田遺跡現形図









東善住宅団地造成事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

## 前 田 遺 跡

---

---

平 成 3 年 3 月 2 5 日 印刷  
平 成 3 年 3 月 3 1 日 発行

発行者 前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
前橋市上泉町664番地の4

編 集 スナガ環境測設株式会社  
前橋市青柳町211番地の1

印 刷 有限会社サクラヤ印刷所  
前橋市石倉町一丁目5番7号

---

---







